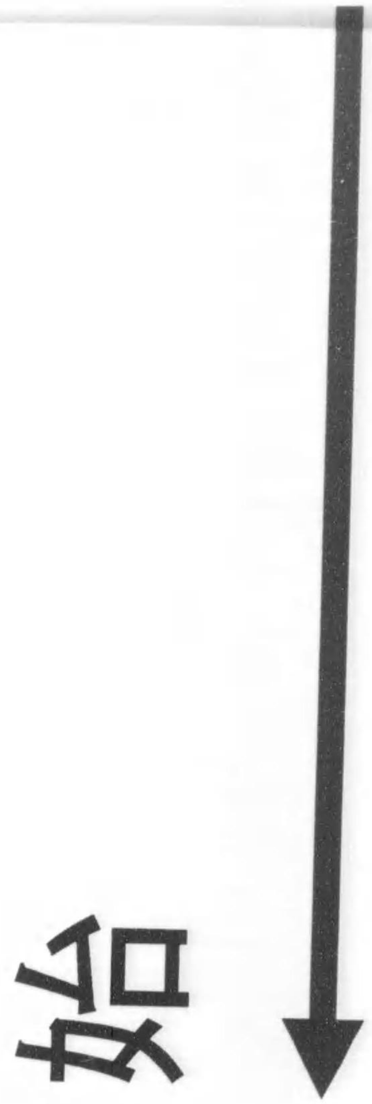
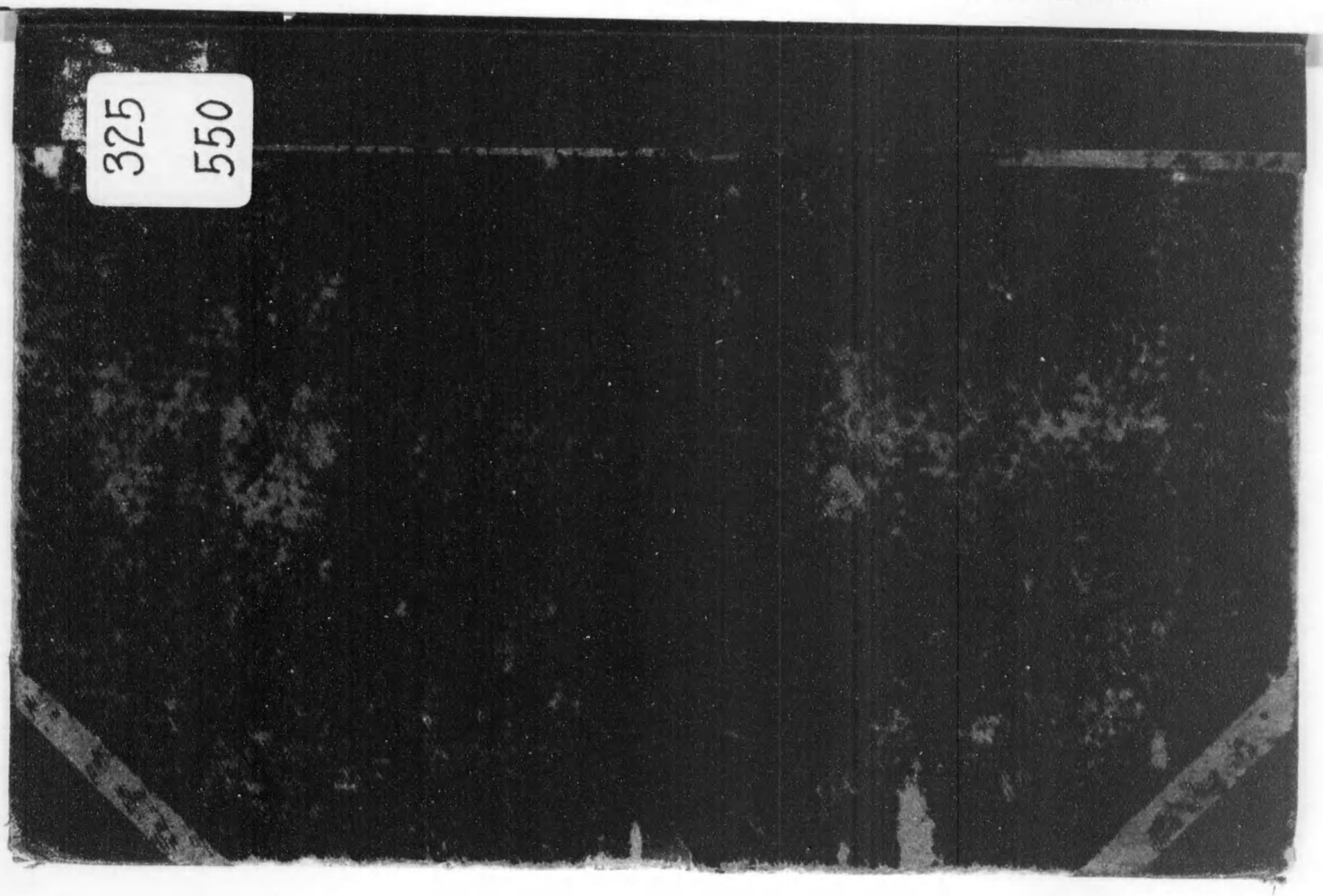

始

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5
6m


325
550

325-550

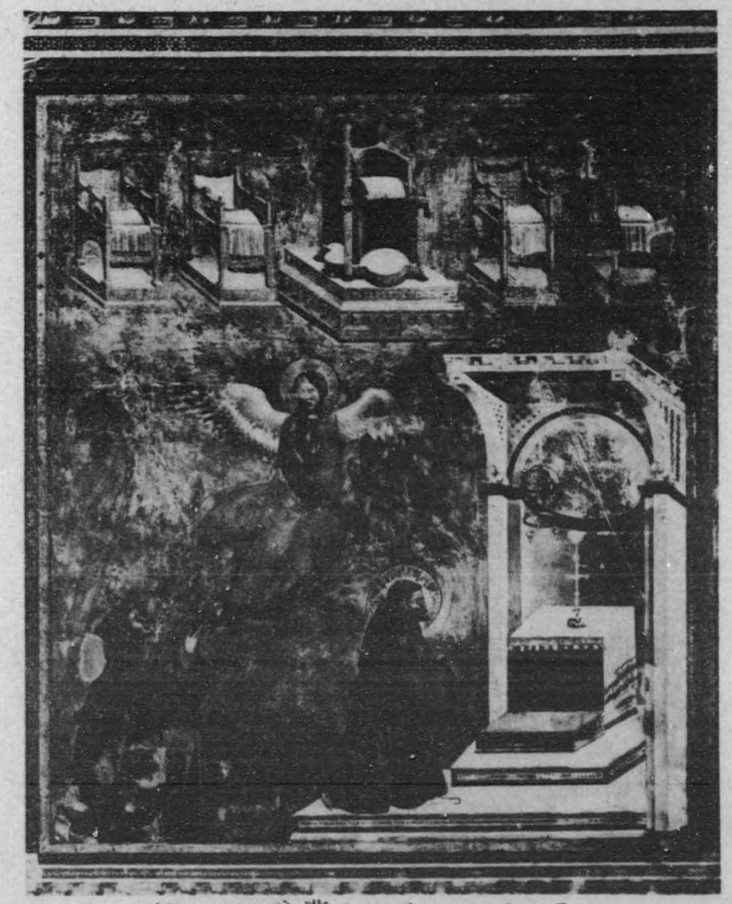
宮内省圖書寮

聖フランシスの完全の鏡

久保正夫譯

大正
8.6.10
内交

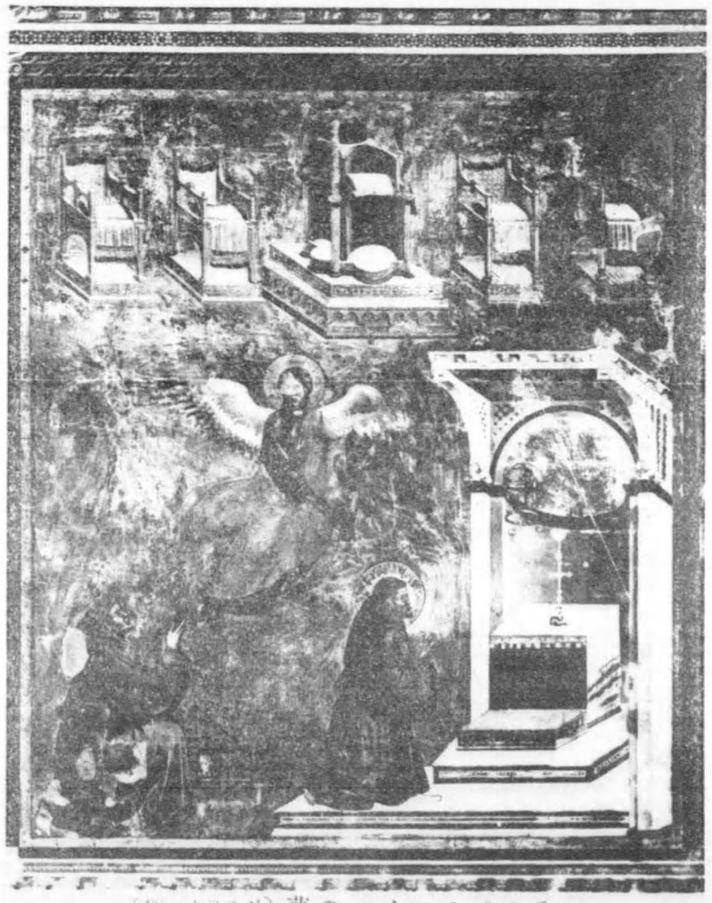
露光量違いの為重複撮影



フラテ・パチフコイの夢（ジョットー作）

完全の頁六〇參照

露光量違いの為重複撮影

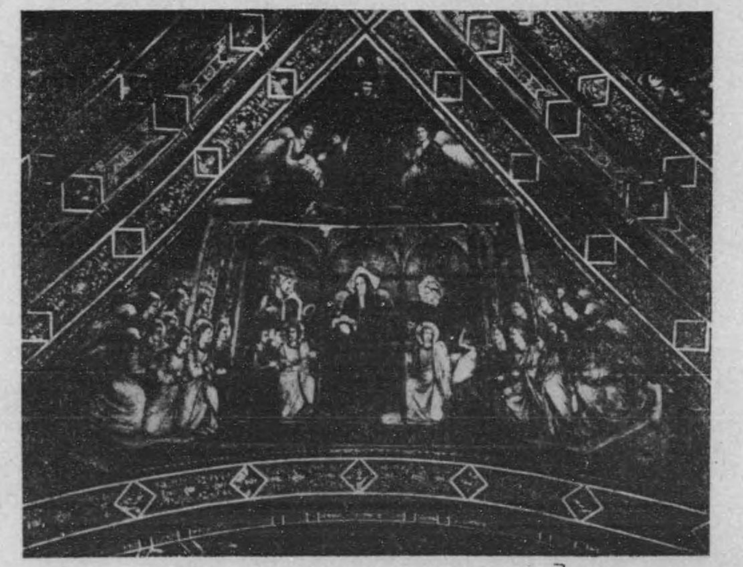


フラテ・パチフコイの夢（ジョット作）

聖堂の壁画

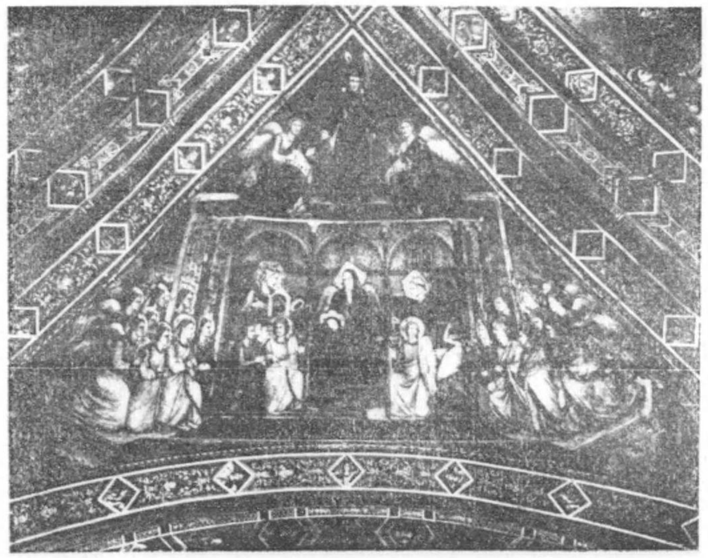
完全の壁画

露光量違いの為重複撮影



「従順」の徳の譬喩畫（ジョットー作）

露光量違いの為重複撮影



「従順の徳の譬喩」（ジョット作）

久保正夫兄。

この一文は始めからお斷り申したやうに序文でも題言でもありません。第一あなたは私のやうなものゝ書く序文などを必要となさる方ではないし、又あなたが十分の蘊蓄を傾けてお譯しになつたこの書物は、世にも尊い文獻の一つであつて私が題言などを夢にも思ひ立つべきものではないと思ひます。

唯あなたが强て勸めて下さるまゝに何にも知らない私が單に聖フランシスの貧しい尊敬者の一人として思つたまゝを云はせていたゞく事にしたまでゞす。

地球といふ一種の生物――それは單に空氣と水分と土塊との機械的な集合物と見るには餘りに生きてゐます――の經來つた歷史の上には不思議に正しい脈が搏つてゐるやうに思へます。我が國で法然上人といふ稀有な善知識が現れて、佛敎を厭禁と祕密と高踏的な哲學とから開放し、人間の生活と正しい關係に持來たしつゝあつた時、伊

太利に聖フランシスが現はれたのを偶然の暗合とのみは云へないと思ひます。去年の秋京都に滯在してゐる間に、私は一日比叡山に參詣しました。八瀬の方から山にかゝつた時には短い日が傾きかけてゐました。而して黒谷の青龍院にかゝつた時にはあたりはもう糢糊とした暮靄に包れてゐました。行手を急いでゐた私は渴き切つてゐたので一杯の水の布施に預らうとして寺門を潛りましたが、その時寺内で夕方の勤行を報ずる鐘が唯一聲聞えて來ました。森閑とした寂寞裡に響き亘るその鐘は寂寞そのものでした。本堂に近づくと低く經文を讀誦する聲だけが幽かに漏れて來ました。庫裏に廻つて案内を請ひましたが取次いでくれる人は更らにありません。私は少し亂暴とは思ひながら斷りもなしに庖厨に赴いて、筧から惜げもなく水甕の中に流れ落ちる山水を手杓に汲んでしたゝか飲み乾しました。清い冷たい甘い味でした。そこを出て庭に立つと雨もよひの空の中に秋さび切つたあたりの景色は私一人のものゝやうに眺められました。法然上人が勸化を思ひ立たれる前、この淋しい寺の中で二十餘年の間沙漠の中の行者のやうに行ひすまされた事を思つて見ました。それは誰れをても涙ぐませ

るに十分です。然しこの死のやうな沈默の中からあの光明遍滿の淨土の敎へは生れたのでせうか。

私が歐洲にあわたゞしい半年程の旅行をした時、是非とも遇ひたいと思つた人はクロポトキン、是非とも訪れたいと思つた土地はアッシシでした。學校にゐる時に私は內村先生に勸められてサバティエーのフランシス聖者傳を讀んで以來、私はこの聖者に對して心からの尊敬を持つやうになりました。殊に聖者の先驅者とも云ふべきヂアッキノデ・イ・フィオーレが人生を三期に分つて豫言したその言葉は深く私の心に徹しました。

「人生は三期に分つ事が出來る。第一期は天父の支配の下にある時で人は嚴正なる律法の中に生活する。第二期は神子の支配の下にある時で人は恩惠の中に生活する。第三期には聖靈が人を司配し、人は愛の豐滿の中に生活するだらう。第一は奴隷的服從の時期である。第二は孝道的服從の時期である。第三は自由到來の時期である。人は先づ畏懼に生き、尋で信仰に生き、最後に愛に燃えて生きるだらう。人は先づ

星々の輝きを望み、尋で曙の白むを見、最後に白日の榮光に浴するだらう。第一の時期は薊を産し、第二の時期は薔薇を生じ、第三は百合花の時期となるだらう」

この言葉はいかにも甘々しい女性的な調子を持つて響きます。然しその内容の深みには嚴肅な革命的な力が罩められてゐます。進歩したと稱せられる今の基督敎も恐らくはこの言葉を反敎的と見るかも知れないと思ひます。それを第十二世紀に、人々が基督再來の惡夢に襲はれて、今日々々を最後の審判てふ懼るべき事變の到來におびえながら過してゐた時に、鳥が春の來たのを知つて歌ひ出したやうにこの言葉を公言したヂアッキノの飾らない素直な態度を私は涼しいと思はないではゐられません。かゝる新鮮な、大膽な、人間的な精神の勃興した時代を逸早く體感してその行者となつた聖フランシスの生涯が私達の時代にまで力となつて働き得る譯がすぐ了解される筈です。

フランシスは何所までもPriestとしてゞはなくmonkとして、羅馬法皇廳の敎權に據る事なくして單なる一箇の宗敎的自由團體の一員として、神の權威を衣した指導者としてゞはなく、人を樂しませる爲めに神から送られた大道藝人として一生を過さう

としてゐた事は存分に窺はれますが、羅馬敎の勢力が何んと云つても牢乎として拔き難い時代であつたものだから、思ひも寄らぬ種々の事情に逼られて、段々正統派の形式に引入れられてしまひました。舊き皮袋に新しき酒を盛つたやうな結果に陷りました。時代の先覺者が味はねばならぬ苦い味をフランシスもしたゝか嘗めさせられました。サバティエーも云つてゐるやうに、フランシスの晩年は悲劇的な幕を閉ぢました。新しい精神の周圍に舊い皮痂の出來て行くのを悲しみ見ながら聖者は終焉の息をついたのでした。嘗ては同じ事が基督の上にも起つたと思ひます。又同じ事がソクラテスの上にも起つたと思ひます。天才の翼の力は餘りに早過ぎる。後繼者がその姿を見失はない爲めには、その翼の羽毛を存分引ちぎる外に道はありません。

然し舊き皮袋は、盛られた新酒が古くならない中に破れてしまひました。私等は渴仰し隨喜してこの舊き皮袋から混々と漏れ出す酒の香に醉ふ事が出來ると思ひます。聖者が逝いてから七百年は經ちました。七百年の間には大抵のものは塵になつてしまひます。然し聖者の心は滅びません。輝いてゐます。彼れの生涯からその生活の形式、

その信仰の外裝、その哲學の面紗を裂き取つて見ると、聖者は七百年の後にして尙新しき現代人です。深く築いた人の力の畏ろしさをまざ〳〵と感じさせられます。縱令どれ程主義に相違があらうと、どれ程性格に距離があらうと、フランシス聖者の如きは、凡ての人の尊敬と愛慕とを受くべき人です。

「完全の鏡」といふ書物を私はまだ讀んだ事がありません。それがラテン語からあなたの手によつて譯されたといふ事を私は深く感謝します。飜譯が單に思想の紹介の爲めばかりになされるのも惡くはありますまい。原文と譯文とに文體や心持ちなどに何等の共通點が見出されないでも許さるべき事かも知れません。然しこの種の書物がさういふ待遇を受ける事は私には忍び難い事に思はれます。あなたのやうな篤學な良心的な聖者の尊敬者によつてこの事業が成就された事を私は讀者の一人として心から嬉しく思ひます。ラテン語も伊太利語も讀めない私はあなたによつて新しい心の收穫を贏ち得ます。

一九・一九年三月九日

有島武郎

聖フランシスの完全の鏡

こゝに一人の小さき兄弟即ち祝福せられたるフランシスの行狀の完全の鏡は始まる。

第一章

一

〔この書は祝福せられたるフランシスの伴侶たちが異れるところにて書きあるひは書かしめた古き說話のいくつかから一つの物語として輯めたものである、〕祝福せられたるフランシスは三つの掟を作つた、すなはち法王インノチェント三世が文書をもつてせずして承認したるもの、のちに彼は一つのより短かきものを作つた、〔それはすなはち彼が顯現に於いて一つの聖體を示され、そして彼が彼に薦められたる小さき細片よりあつめて完たきものを作るべきことを乞はれ、そしてそれを食せんと欲する人々に頒つべきことを命ぜられたことの故に作つたものである、〕そしてこの掟は失はれた。そのつぎに彼は他の一つを作り、それを法王ホノリウスが一つの文書をもつて承認した、この掟のなかからあまたのことがミニストロたちによつて變更されたのであるが、それは〔こののちに於いて知らるゝごとく〕祝福せられたるフランシスの意志に反したものであつた。

祝福せられたるフランシスが作つた第二の掟が失はれたのちに、彼はアッシジのフラテ・レオネとしかしてボロニヤのフラテ・ボニチオとともにある山にわけ登り、一つの掟を作つた、それをキリストの敎へによつて彼は書き下さしめた。

しかしながらあまたのミニストロたちは、祝福せられたるフランシスの代理者であつたフラテ・エリアのもとに集まり、そして彼に謂つた、「我々はこのフラテ・フランチェスコが一つの新しき掟を作るといふことを聞いてゐる、しかしながら我々は彼があまりにきびしき掟を設け、それがために我々がそれを守りあたはぬことがあることをきづかふ。それゆゑ我々は欲する、汝は彼のもとに往き、そして我々がその掟に拘束されざるべきことを告げよ、彼をして我々のためならずたゞ彼みづからのみのために掟を作らしめよ。」

これらの人々にむかつてフラテ・エリアは、彼は彼らとともにでなければ往くことを欲しないと答へた、そしてそこで彼らはすべてともに行つた。

そしてフラテ・エリアが祝福せられたるフランシスのゐたところに近くきたときフラテ・エリアは彼を呼んだ。それにむかつて答へ、そしてまへに言はれたるミニストロたちを見たときに祝福せられたるフランシスは言つた、「これらの兄弟たちは何ごとを欲するのか？」そしてフラテ・エリアは言

つた、「これらのミニストロたちは、汝が新たに一つの掟を作りつゝあることを聞き、そして汝がそれをあまりに嚴格にすることを氣づかつて、彼らがそれに拘束さるゝことを欲しないと言ひさからふのである。それを汝みづからのために作つて彼らのために作つてはいけない。」

そのとき聖フランシスは顏を回して天にむかひ、そしてこのやうにキリストに言つた、「主よ、私は彼らが私を信じないであらうといふことをあなたに言はなかつたでせうか？」そのときすべての人々は空のなかに答へるキリストの聲を聞いた、「フランシスよ、掟のなかには一つとして汝のものなるはない、そこにあるところのものはみなわれみづからのものである、そして私は掟がかくのごときものとして文字の末までも、註釋なく、註釋なく、守らるべきことを欲する。」そして主は言葉をついでいはれた、「弱き人の身としていかばかりをなしうるか、それを私は知つてゐる、そしていかばかり私は彼らを助けることを希ふのであらう、さればそれゆゑに掟にしたがふことを欲せざるものは、團體を出でて去れ！」

祝福せられたるフランシスはこれらの兄弟たちに向きなほり、そして彼らに言つた、「汝らは聞いたであらう、汝らは聞いたであらう！　汝らはそのことを汝らにむかつてふたゝび言はしめることを欲するか？」そのときミニストロたちはたがひに顏を見あはせて、言葉をいだすところなく、恐

しさにみちて歸り去つた。

サバティエ氏校訂の原文に據らざる一つのイギリス譯(Mirror of Perfection, trans. Robert Steele. in 'Everymans Library')にあつて、そして私の使用した原文にない文章は〔　〕のなかに挿入されてゐる。それは遺憾ながらいかなる原文に據るのか私には知られない。その譯文では第一章の第一節の最初の一段はこの部分の標題(ルブリカ)のごとくに書かれてゐる。

私は各章の標題を譯して掲げたけれど、各節の見だしを省略した。

第二章　貧しさの完全について

二

マルカのフラテ・リカルドは生れた族によつて貴とく、そして聖とさによつてさらに貴とき人であり、祝福せられたるフランシスはあつき情をもつて彼を愛した。この人がある日聖フランシスをアツシジの僧正の住家に訪れて、團體の狀態と掟の遵守について彼と語りあつたさまざまのことのうちに、彼にことにこのことについて問ひ、そして言つた、「語りたまへ、父よ、汝がはじめに兄弟たちをもちはじめたときの企て、そして汝がいまもつところの企て、しかして汝の死ぬる日にいたるまでもつべく思ふところの企てとを語りたまへ、そして私は汝の最初と最後の企てと意志についての證しとなるであらう、たとへば、私たちのごとく司祭の職にある兄弟たちが、あまたの書籍をもち、そしてそれらを團體の所有に屬するものであるといふならば、それらをもつことができるであらうか？」

聖フランシスは彼に言つた、「兄弟よ、私は汝に謂ふ、すなはちこれが私の第一の企てゞありそして最後のねがひである、もしも兄弟たちが私を信じたならば、兄弟らの何人も、我らの掟の許すがごとき一着の衣と繩の帶と下布のほかには何ものをももつべきではない。」

もしもいづれかの兄弟らがうたがひを起し、「何故に祝福せられたるフランシスは、彼の在りしときに、掟の聖とき貧しさを、彼がフラテ・リカルドに言つたごとく、嚴しく守られるやうに作るか、またはそれをこのやうに守るべきことを命令しなかつたのか？」と言ふならば、私たち、彼とともにゐた私たちはこれに對して私たちが彼みづからの口から聞いたまゝに答へよう、彼みづからもこれらとそしてなほ他におほくのことを兄弟らに語り、そしてこれらのことの多くを、彼が主のみまへに篤き祈りと沈思とをもつて團體の幸福のためにもとめてえたる掟のなかに書かしめ、そしてそれらをすべて神のみむねによるところとして證した、しかしながら彼がこれらのものを兄弟たちに示したのちに、これらは彼らにあまりに重く、堪へがたきことのやうに見えた、しかして彼らは彼の死ののちにいかなることが團體に起るべきかを知らなかつた。そしてまた彼は彼みづからにとつても、團體の兄弟らのためにも亂れとなることをいたく氣づかつたために、彼は彼らに對して嚴しくすることを好まなかつた、そして彼は心ならずも彼らのねがひを容れ、そしてみづからの罪を主のみまへにゆるしをもとめた。しかしながら主が團體の功德のために彼の口に置かれたる言葉がむ

なしく彼にかへらざらむために、聖フランシスはそれを彼みづからに於いて滿たし、そしてそこからいくらかの報いが主より得らるべきことを希つた、そして終りには彼のたましひはこゝに安きをえてそして慰さめられた。

三

しかしながらあるとき、聖フランシスが海のかなたから歸りつゝあつたときに、一人のミニストロは彼と聖とき貧しさの章について語つた、それは彼の欲するところとそしてそれについての解釋とを知るためであつた、そしてことに、そのころに聖とき福音の誡しめのある章、すなはち、「旅の資に何ものをも携へることなかれ、」といふ言葉が掟のなかに書き入れられたときであつたので、これについて問うた。

そして祝福せられたるフランシスは答へた、「私はそれをこのやうに解釋する、すなはち兄弟たちは、掟のいふごとく、一つの衣と繩の帶と一枚の下布のほかに何ものをも有すべきではない、そしてもしも必要に迫られたときには、彼らは履を穿つことができる。」

そしてミニストロは彼に言つた、「私はいかにすべきであらうか、私は五十リラより多くの價あるほどあまたの書籍をもつてゐる。」しかしながらこのことを言つたのは、彼がそれらの書籍をよき良心をもつて所有しようと思つたからであつた、彼は聖フランシスが聖とき貧しさの章をそのやうに嚴密に解釋してゐることを知りつゝ、それに背いておほくの書籍をもつことに心を煩してゐた。

そして祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「私は私の良心にそむき、そして私たちがつとめとする聖とき福音の完全にそむいてふるまふことを欲しない、また許さない、またなし能はない。」

これらのことを聞いたときミニストロは憂ひた。けれど祝福せられたる人は、彼がかやうに煩へるを見て、たましひの大いなる熱情をもつて、すべての兄弟たちの在るまへで彼に言つた、「汝らは人々から小さき兄弟らと見られ、そして聖とき福音を守る人々と呼ばれることをねがつてゐる、しかしながら汝らのなす業に於いては寶函をもたうと欲するのではないか！」

けれどミニストロたちは掟にしたがへば兄弟らは聖とき福音を守らざるべからざることを知りながら、それにかゝはらず「汝ら旅の資に何ものをも携ふることなかれ、」といふ章を掟のなかから除き、それによつて彼らは福音の完全を守るにかゝはらざるべきことを信じてゐた。

聖靈によつてこのことを知つたときに、祝福せられたるフランシスは、それゆゑにいくたりかの

兄弟たちのまへに言つた、「この兄弟たちミニストロたちは神と私を欺かうと思つてゐるのか、しかも彼らはすべての兄弟らがみな聖とき福音の完全を守らざるべからざることを知つてゐるのである。それを私は捉の始めと終りとに書かれることを欲する、すなはち兄弟たちは嚴密に私たちの主イエス キリストの聖とき福音を守らなければならないこと、そして私は主が彼らと私の救はれのために私の口に置かれたそれらのことばを彼らにすべて告げ知らせ、またいまも告げ知らするうへは、兄弟らは永しへに言ひのがるゝ言葉をもたないことゝを。私は彼らが神の在ますみまへでそれを彼らのはたらく業によつて示し、そして神の助けによつていつまでもそれを守ることを私のねがひとする。」

それゆゑに彼は兄弟たちが彼に加はりはじめたときから彼の死ぬる日まですべての聖とき福音を言葉の末まで空しくせずして守つたのである。

四

またあるときある一人の新入の兄弟があつた、その人は詩篇を、巧みにではなかつたけれど、い

かに讀むべきかを知つてゐた、そしてその一卷をもつことをミニストロ・ジェネラレから許されてゐた、けれど、彼は祝福せられたるフランシスが彼の兄弟たちが知識と書籍とをもとむることを欲しないといふことを聞いた故に、彼は聖フランシスの許しなくしてそれをもつことに滿足しなかつた。

それゆゑに聖フランシスがその新入の兄弟のゐた處にきたときに、新入の兄弟は言つた、「父よ、私には一卷の詩篇をもつことは大いなる慰さめでありませう、ジェネラレは私にそのことを許しましたけれど、なほ私は、父よ、あなたに知られたうへでそれをもちたく思ひます。」

それにむかつて祝福せられたるフランシスは答へた、「皇帝シャルル、そしてローランやオリヰエ そして侯伯たちやすべての勇ましき人々はみな、戰ひに於いて猛く、大いなる勞苦と汗と血をもつて邪敎のものどもを死にまで逐ひはらひ、彼らに對して記憶すべき勝利を獲て、そしてつひにみづからも戰ひに倒れて、キリストの信仰のために聖とき殉敎者となつた、しかしながらいまはこれらの他の人々のなした功績を語ることのみをもつて譽れと人々の讃へとを受けやうとつとめるものが多い。そのやうに私たちのあひだにさへも聖とき人々のなした業を言葉にかたり、說敎するのみをもつて譽れと讃へを受けやうとつとめる多くの人々がある。」それはあだかも彼はかう言はうと欲したかのやうであつた、「書籍や學識は重んぜられるべきでない、たゞ德ある行ひこそ、何となれば知

識はたゞ人を誇らしめる、しかしながら愛は德を建てる。」

けれど幾日かののち、聖フランシスが火のそばにすわつてゐたとき、おなじ新入の兄弟はふたゝび彼に詩篇のことを話した。そして祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「汝が詩篇をもつたのちに汝は祈禱書をもつことを欲しそして希ふであらう。そのとき汝はあだかも高い僧官のごとくに汝の椅子にすわつて、そして汝の兄弟にむかつて、「私の祈禱書をもちきたれ。」と言ふであらう。」そのやうに言ひながら、聖フランシスは大いなるたましひの熱心をもつてすこしの灰を手にとり、そしてそれを彼の頭にまみらし、彼の手を頭のうへにめぐらしてあだかも頭を洗ふ人のするごとくして、そして言つた、「私、私が一つの祈禱書である、私が一つの祈禱書である！」そして彼はそのやうにあまたたびくりかへした、そして彼の手を頭のうへにめぐらした。そしてその兄弟はおどろきかつ恥ぢてゐた。

しかしてのちに祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「兄弟よ、私もまたおなじやうに書籍をもたうとして試みられたことがある、けれど私がこれについての主の御旨を知りえなかつたときに私は主の福音が書きしるされてある一冊の書をとつて、そして主に祈つて私が第一にその書をひらくときに主が私にこのことについての御旨を示したまふことをもとめた。そして祈りが終つたとき

に第一に本をひらいたときに私は聖とき福音のこの言葉に會つた、「なんぢらには神の國の奥義を知ることを賜へども、されど他の人々には譬へをもつてす。」

そして彼は言ふ、「知識にむかつて進んでのぼりゆくものはそのやうに多い、それゆゑに主なる神の愛のためにみづからをむなしくするものは祝福せられるであらう。」

けれど幾月かたつて、聖フランシスがボルチウンクラのサンタ・マリアの棲家に、家のまへにある庵室にちかく道のうへにゐたときに、まへに言はれたる兄弟はまた彼に詩篇について語つた。それにむかつて祝福せられたるフランシスは言つた、「往け、そしてこのことについて汝のミニストロが汝に教ふるごとくなせ。」そして彼がこれを聞いたときに、彼はそこにきた道から歸りはじめた。

そして祝福せられたるフランシスは道のうへに留まつて彼がその兄弟に言つたことについて考へはじめた、そしてたちまち彼のあとから呼びかけて、そして言つた、「待て、兄弟よ、私の行くまで待て！」

そして彼はその兄弟に近づいて、そして彼に言つた、「私とともに回れ、兄弟よ、そして私が汝に詩篇のことについては汝のミニストロの言ふごとく爲せと言つたそのところを示してくれ。」それゆゑに彼らはそのところに來たときに、聖フランシスはその兄弟のまへに跪づいて、そして言つた、

「私が悪かつた、兄弟よ、私が悪かつた、何となれば、小さき兄弟たるものは何人にても、捉が許すごとく一つの上着と繩の帶と下布と、そして著しき必要に迫られたるものが用ひうる履とのほかに何ものをも所有すべきではない。」

それゆゑに兄弟たちが彼のもとにこれらのことについて彼の助言をもとめてくるたびごとに彼はそれらの人々にこのやうに答へるのをつねとした、何となれば彼がしば〳〵言つたごとく、「人は彼が働らきそして爲すだけの知識をもつ、そして道に入れるものはその爲す業が語るだけよく語る人である、それは働らく人はその收むる果實によつて知らるゝのであるから。」

五

もつとも祝福されたるフランシスはつねに言つた、私たちが書籍に覓むべきは證跡であつて價ではなく、建德のためであつて裝飾ではない。彼はたゞ少しのもののみが所有され、しかしてそれも共有として、兄弟らの貧しさと乏しさにふさはしくあるべきことを望んでゐた。寢床と寢具に於いても大いなる貧しさがみちあふれてゐた、そしてなかば擦れ破れた襤褸を身に蔽ふものはそれを誇

つて裃ととなへてゐた。

彼はまたそのうへに彼の兄弟らに敎へて彼らの小屋を貧しく造らしめ、彼らの小さき室を木をもつて編み、石を用ゐなかつた、そして彼はそれらの家を低くいやしき形に築き作らしめて、たゞに住居についての驕りを憎んだのみならず、また彼は數おほき、または美々しき器具を憎んだ。彼は食卓に於いて、あるひはその器具に於いてこの世のことを人々に想ひ起さしむべき浮世の飾りの何ものをも好まなかつた、そしてすべてのものが聖とき貧しさを指し、すべてのものが巡禮と流浪とを歌ふやうにと欲した。

六

彼がボロニヤを過ぎつゝあつたときに彼はそこに一つの兄弟たちの家が新たに建てられたことを聞いた。そして彼がその家が兄弟たちの家と呼ばれてゐることを聞いたときにたゞちに彼は歩みをかへしてその市を出で去り、そしてすべての兄弟たちが急ぎそこを去つてすこしもその家に留つてはならないことを嚴しく命令した。それゆゑすべての兄弟たちは出で去つて、そして病める人さへ

もそこに殘ることなく他の人々とともに出で去つた、つひにオスチアの司教、そしてロムバルディアに於けるレガトッスなるドミヌス・ウゴリノが公けにその家が彼に屬するものであると宣言した。

その家から出で去らしめられた一人の病める兄弟がこれらのことについて證しを帶び、そしてこれらの言葉を書いたのである。

七

年ごとにポルチウングラのサンタ・マリアで開かるゝ全團の集會が近づいてゐたときに、アッシジの人々は、兄弟らが日々に數を增し、そして年ごとにすべてがそこに集まるのをつねとしながら、彼らがたゞ一つの藁で葺いた小屋、卽ちその壁を小枝と泥をもつてつくつた庵をもつのみであることを見、そして市民の會議をなして、幾日かのあひだに、急ぎそして大いなる敬虔と尊信をもつてそこに一つの大いなる家を石と石灰をもつて、聖フランシスの許しなく、そして彼の不在のあひだに建てなした。

そして祝福せられたる父がある縣から歸つて集會(カピトロ)のためにきたときに彼はそこに建てられたる家

をみて大いに驚いた、そしてこの家のために他の兄弟たちがおなじやうに大いなる家を彼らの棲める、そして棲むべき處に建てしめることをきづかひ、そして彼はこの處が團體のすべての他の處の規模であり範例であることを欲したゆゑに、集會が終らないまへに彼はその家の屋根のうへに登りそして兄弟らに命じて彼とともに登りきたらしめて、そしてそれらの兄弟らとともにその家を葺いた板を地上に投げ下しはじめた、そのやうに彼はその家を礎にいたるまで破壞しようと欲してゐたそのときいくたりかのアッシジの軍士たちは、兄弟たちの集會を見るために集まつてきた賤民らの群れがあるためにその處を守るためにきてゐたのであつたが、祝福せられたるフランシスが兄弟らとともに家を壞さうとするのを見てたゞちに彼のところに往つて、そして謂つた、「兄弟よ、この家はアッシジの自治市に屬するものである、そして我々はこゝにその自治市の命としてきてゐるのである。それゆゑに我々は汝に我々の家を破壞することを禁ずる」これを聞いて聖フランシスは彼らに言つた、「もしもそれが汝らのものであるといふことなれば、私はそれに觸らうとは思はない。」そしてたゞちに彼と兄弟たちとはそこから下つた。

そのことのためにアッシジの市の民は一つの法律を設けた、すなはちこのときからのち彼らの市長は、何人にもせよ、その家を修覆せしむべきことゝなつた。そして永いあひだにわたつて年ごと

にこの法律は守られてゐた。

八

またあるとき祝福せられたるフランシスの代理者はおなじ處に一つの小さい家を、兄弟らがそこに休みそして彼らの時ごとの祈りを唱へることのできるために建てさせはじめた。それはその處にきたる兄弟たちの數多きために彼らは勤行を唱ふべきところをもたないからであつた。何となれば、すべての團體の兄弟たちはそこに集まつてきた、それはたゞこのところに於いてのほかでは何人も團體に入れられなかつたからであつた、そしてさてその家が建つたときに祝福せられたるフランシスはその處にかへつてきた、そして彼の庵に留まつてゐたときにそこにゐる工人たちの物音を聞きそして彼の伴侶を彼の許に呼んで、この人にそれらの兄弟たちが何をなしつゝあるのかを問うた。それに對して彼の伴侶はそのすべてのことをありのまゝに告げた。そのときたゞちに彼は代理者を呼ばしめ、そして彼に言つた。「兄弟よ、この處は團體すべての規模であり範例である、そしてそれゆゑに私はむしろこの處の兄弟たちが主なる神の愛のために艱みとわづらひとを忍ぶべきことをねがふ、そしてこゝにきたる他の兄弟たちが各のゝ住むところへと聖とき貧しさのよき模範をもちかへるべきことをねがふ、さもなくば彼らはこゝに彼らの慰さめを十分にもち、そして他の兄弟たちは各々の處に家を建てる例しをとり、そして言ふであらう、團體の首(はじめ)の處なるポルチウンクラの祝福せられたるマリアの處に、かやうにそしてかばかり大いなる建物がある、我々もまたおのゝ處におなじやうに建てることができるであらう。」

九

ある一人の兄弟ははなはだ尊とくそして祝福せられたるフランシスときはめて親しかつた、この人はその住める隱者小屋のあたりに、すこしくはなれたところに一つの小さき庵をたてゝ、祝福せられたるフランシスがその處にきたるべきときに留まつて祈りすることのできるために設けた。

しかしながら祝福せられたるフランシスがそのところにきたとき、そしてその兄弟が彼をこの庵に伴つて行つたとき、祝福せられたるフランシスはその人に言つた、「この庵はあまりに美しい。」しかしながらそれはたゞ斧と手斧をもつて粗く削られた板をもつて造つたものであつた。「それゆゑに

もしも汝は私がそこに住むことを欲するならばその外側にも内側にも柳の枝と木の枝をもつてつゞつた覆ひを作らせよ。」いかにとなれば家や庵が貧しげなるだけそれだけ歎んで彼はそこに住むことを欲した。そのことをその兄弟がなし終つたときに祝福せられたるフランシスはそこに幾日が留まつてゐた。

けれどある日彼がその庵から出て往つたときに、一人の兄弟はそれを見に行つた、そしてしかるのちに祝福せられたるフランシスのゐたところへきた。そして祝福せられたる父が彼を見たときに彼に言つた、「汝はどこからきたか、兄弟よ？」そして彼は言つた、「私はあなたの庵からきました。」そして祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「汝がそれを私のものを呼んだゆゑに、これよりの ち私でなく他の人がそこに住め。」

けれど私たち、彼とともにゐた私たちはしばしば彼がこの言葉を謂ふのを聞いた、「狐には穴あり空の鳥には巣あり、されど人の子は枕すべきところなし。」そしてまた彼は謂つた、「主は、彼がそとにいでて四十日と四十夜のあひだ斷食したときに、そこに彼のために一つの庵、または一つの家を建てさせはしなかつた。そして彼は山の岩のうへに臥したのである。」そしてそれゆゑに主のためにしたがつて彼は彼の所有と呼ばるべき家も庵をもつことを欲しなかつた。また彼はそれらを造

らせもしなかつた。

もしもときとして彼が兄弟たちに、「行つてその庵を設けよ、」と言つたことがあつたときにも、彼はのちになつてそのなかに棲むことを欲しなかつた、それは聖とき福音の言葉に、「汝ら思ひわづらふことなかれ、」とあるゆゑであつた。そして彼の死ぬるときにさへも彼は彼の遺言のなかに書かしめて、兄弟たちの家や庵はすべてみな木と泥のみのものとし聖とき貧しさと謙りのより固き護りとさせたのであつた。

✝

あるとき彼が彼の眼の病ひのためにシエナにゐたときに、ドミヌス・ボナエントゥラは彼に問うた、この人は兄弟らの住處を建つる土地を贈つた人であつた、「あなたはこの處についていかにお考へになりますか？」

そして祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「汝は私が汝にいかに兄弟らの住處が建てらるべきかを語ることを欲するのか？」彼は答へた、「私はそれをねがひます、父よ。」そして聖とき父は言

つた——

「もしも兄弟らが住處をもたぬところにきたときに、そしてその市の人で何人か彼らに一つの家を建てそして一つの園とすべての必要なるものとを設けられるほどの土地をあたへやうとする人に出逢ふときには、彼らはまづはじめにいかほどの土地が彼らに十分であるかを考へなければならない、そしてそのときにつねに私たちが示すべきすべてのことについての聖とき貧しさと善き模範に心をとめなければならない。」このことを彼が言つたのは彼はいかにしても兄弟たちがいかなる處をも所有の權利をもつてもたず、彼らの用うるところの家、會堂、園またはその他のものについても決して貧しさの規を超えず、たゞ彼らはそれらのところに旅人や巡禮のごとくに宿るべきことを欲した。そしてそれゆゑに彼は兄弟らがその住むところに大いなる數をもつて集まらざることを欲した、何となれば、彼には大いなる人數に於いて貧しさを守ることは難く思はれたからであつた。そして彼の同心のはじめから彼の生涯の終りにいたるまでも彼の思ふところはすべてのことについて貧しさが守られるべきことであつた。「それゆゑに一つの住處に必要なるほどの土地を考へたあとで兄弟らはその町の司教のもとに往き、そして彼に言はなければならない、「君よ、これ〳〵の人が私たちにこれほどの土地を私たちの住處をそこに建てられるために、神の愛のために、そして彼のたましひ

の福祉のために、あたへやうと思つてゐます。それゆゑに私たちはあなたのところにきました、第一に、あなたはあなたにゆだねられたる羊の一むれのたましひたちと、そしてその處に住むべき私たちすべての兄弟らの父であり、君であらせられる故に、私たちはそれゆゑに切に、神の祝福とあなたの祝福をもつてこゝに家を建てやうと思ひます。」

しかしながら彼がかく言つたのは、兄弟らが切に刈り入れむとするたましひの收穫をば、彼らは彼らが司祭職の人々と一致して、俗の人々として彼らの務めをなしつゝあるときに於いて、彼らを輕んじて、たとひそれによつて人々の心をとりうるとも、なしうるよりもはるかによく果しうるからであつた。

そして彼は言つた、「主は私たちを彼の信仰の助けとして、そして聖きローマの教會の司祭職と僧官の助けとして召されたのである。それゆゑに私たちは、私たちのなしうるかぎり、つねに彼らを愛し、讃め、そして敬はなければならない。」それは、彼は彼らを小さき兄弟らと呼んだ、その故は彼らがその名のごとく例しに於いても働らきに於いても今の世の他の人々にまさつて賤しく謙だつてあるべきためであつた。

「そして私の悔い改めの始めから、主はアッシジの司教の口に己が御言葉を置かれた、すなはちこ

の人は私をキリストの奉仕に於いて助言しそして力を添へるであらうといふことを、このことゝそして私が司祭職の人々に於いて敬ふところのあまたの他のすぐれたることのために、私はたゞに司教たちのみならず、また貧しき司祭職たちをも、愛しそして敬ひ、そして彼らを私の君となすことを欲する。」

「そして司教から祝福をうけたならば、彼らは往つてそして彼らが住處を建てるために受けた土地のまはりに一つの大いなる溝を造り、そしてそこに彼らの墻壁として、聖とき貧しさと謙だりのしるしたる低き垣を設けよ。しかるのち彼らは小枝と軟土をもつて賤しき小さき家々を造り、いくつかの小さき庵室を設けて、そのなかで兄弟らがつねに祈りそして働らくところとせよ、それはよりすぐれたる適はしさのためであり、そして惰りを避くるためである。また彼らは小さき會堂を建てよ、それは彼らは人々に説教するためにも、またいかなる他の理由のためにも大いなる會堂を建つべきではない、何となれば、それは彼らが他の會堂に往つて説教するときに彼らの謙だりはさらに大なるべく、彼らの例しはより善かるべきゆゑである。そしてもしもいかなるときにも司祭職たる人々、または掟を受けたる人、また俗にある人々が彼らの住處にきたるときに、貧しき小さき家々や、小さき庵室や、さゝやかなる會堂が彼らに説教するであらう、そして彼らは言葉によつてより

もこのことによつてまさつて德を高められるであらう。」

そして彼は言つた、「しばしば兄弟たちは彼たちの聖とき貧しさを破つて大いなる家を建て、そして惡しき範例と怨恨とを造り、そしてときとしてはよりよく、より尊とげなる建物のために、また人々がより多く集まるために、欲心と貪婪より、彼らの古き住處または建物を立ち去り、そしてそれらを壞してほかにより大いなる、美々しきものを造る、それがためにそこに施しをあたへた人々も、そして他の人々もこれを見て恥しめられ、それがために煩はされるであらう。かくのごとき故に、兄弟らにとつて小さき貧しきさゝやかなる家を造り、己のが務めを守つて、隣人によき範例をあたへることは、彼らが己のが約束にそむいて他の人々に惡しき範例をあたへるよりも優れることである。されば兄弟らが時に一つの貧しき處を去つて他のさらに適はしく貧しきところに移るときには、その過ちはそれだけ小さくあるであらう。」

十一

しかしながら祝福せられたるフランシスが、兄弟らの會堂は小さかるべく、そして彼らの家はた

だ小枝と軟土をもつて造られて、聖とき貧しさと謙りの表象であるべきことを命じ、ことにこの模範がポルチウンクラのサンタ・マリアの住處に置かれ、すなはち家々は木と土をもつて造られて、それが全團體の第一にして首たる處なる故に、現在と未來のすべての兄弟たちに永しへの記念であるべきことを希つたときに、いくたりかの兄弟たちはこのことについて彼に反對し、そしてある地方では木材が石よりも高價であつて、彼らの家が木と土をもつて造られることは宜しきにかなはぬやうに思はれると言つた。

けれど祝福せられたる父は彼らと爭そふことを好まなかつた、それは彼が死に近づきそして重く病んでゐたからであつた。それゆゑに彼はそのことを彼の遺言のなかに書かしめた、「兄弟らは彼らのために建てられたる會堂、住家、そしてすべて他のものを、たゞ聖とき貧しさに適ふものゝほか受けざることに心すべし、しかして彼らはそこにつねに宿り人のごとく、旅人、しかして巡禮のごとくに住め。」

しかしながら私たち、彼が掟とそしてほとんどすべて彼の他の書きものを書いたときに彼とともにゐた私たちは、彼が掟とそして彼の他の書きものゝなかに多くのことを書かしめたことについて證しを帶びてゐる、それらのことについては兄弟らのうちの多くが、即ち私たちの司祭職とそして

學識ある人々とが彼に反對した、それらは今日に於いて團體全部に對してはなはだ益ありそして必要なことであつたであらう、しかしながら彼がはなはだしく亂れを恐れたために、彼はこゝろならずも、彼の兄弟たちのねがひを容したのであつた。けれど彼はしば〳〵つぎのごときことを謂つた「このことについて私に背ける兄弟たちは禍なるべし、私はかたくこのことが全團體の大いなる幸福と必要のために神の御旨であることを知つてゐる、こゝろに好まないけれど私はみづからを彼らの意志によつて枉げるのである。」

さればしば〳〵彼は私たち、彼の伴侶に謂ふのをつねとした、「これが私の悲しみ、私の傷むところである、私が團體すべての現在と未來の幸福のために神から御慈しみをとほして、祈りと沈思の少からぬいそしみをもつて、受けえたるもの、それが御旨によるところであることは私は主によつてたしかめられてゐる、しかるにこれらのことについていくたりかの兄弟らが彼らの知識と誤れる先見の權威によつて私に反對し、そしてそれらを無効とし、そして、これ〳〵のことは守られ保たるべし、そしてこれ〳〵はしからず、といふ。」

十二

祝福せられたるフランシスはこれらの言葉をしば〳〵彼の兄弟たちに言つた、「私は施物について、必要なる以上にそれを得、または用うることについて、決して盜人でなかつた。つねに私は私の要するよりも少なく受けた、それはさもなくば他の貧しき人々から彼らのわけまへを掠めることとなるべく、これに反して行へば盜みである。」

十三

ミニストロなる兄弟たちが彼に說いて、彼がせめて兄弟たちに何ものかを共有にすることを許しそれによつて彼らのあまたの人々は彼らの資たるものをもつべきをもとめたときに、祝福せられたるフランシスは祈りに於いてキリストを呼び、そしてこのことについて主と議つた。主はたゞちに答へて、言つた、「私はすべてのものをあまねくも、また一人々々にも、許しあたへる、私はつねにこの家族のために、いかにおほくその數が增すとも、養ひをそなへるであらう、そして私はそれが私に於いて希望するかぎりつねにそれをいたはつて育くむであらう。」

十四

キリストのまことの友しかして模倣者としてフランシスは、この世のものであるところのすべてのものを完たく輕んじて、そしてことにすべてのものゝうちで金錢を惡んだ、そして言語と模範をもつて彼の兄弟たちにそれを惡魔のごとくに避けることを訓しへた。それによつて兄弟たちにあたへられたる戒しめは、卽ち愛の一の價をもつて糞土と金錢とをひとしく量るべきことであつた。

さてある日一人の在俗の人がボルチウンクラのサンタ・マリアの會堂に祈るために入りきたり、そしていくらかの錢を捧げものとして十字架の近くに置いた、それをその人が去つたあとで、ある一人の兄弟がまつたくこゝろなくそれを手にとつて窓に投げだした。しかるにこのことが祝福せられたるフランシスに告げられたときに、その兄弟は過ちに陷つたことを知り、赦しをもとめ、みづからを地にひれふして、彼の身を罰にさゝげた。聖とき父は彼を匡し、そして彼が金錢を動かしたこ

とのために責めて、そして彼に命じてその錢を口にくはへて窓からとりあげ、そして住處の垣のそとに運ばせて、そこで彼みづからの口にくはへて一頭の驢馬の糞のうへに置かしめた。

そしてこのことを見そして聞いたすべての人ははなはだ大いなる恐れをもつて滿たされた、そしてそのときからのち彼らは金錢を驢馬の糞よりも輕んじた、そして彼らはそれをまつたく輕蔑するにいたるまで日に日に新しき模範をもつて勵まされた。

十五

この人は、高きところよりくだされたる德をもつて衣として、おもてに肉體に着る衣服をもつてするよりも、神の衣服をもつて內に溫められてゐた。彼は團體にあるもので三重の衣服を着たるもの、そして必要なる以上に軟かき衣服を用うるものを憎んだ。そして彼はつねに言つた、たゞ意欲のみをもつて、しかして理性によらずして、指されたる必要なるものは死にたるたましひのしるしである、「何となれば惰れるたましひ、恩寵より冷えゆくたましひにおいては肉と血はすこしづつ己のが權利を主張せずにはゐない。」

そして彼は謂つた、「何となれば、たましひの歡こびが缺けてゐるときに、肉が己れのものにたちかへるほかに何か殘るか？　動物的欲望は遁辭としてその必要なるものを數へ、肉の感覺は良心を飾る。けれどもしもまことの必要が彼の兄弟に起り、そしてたゞちに彼がそれをみたすことを急ぐならば、いかなる報酬を彼は受くべきであらうか？　一つの功德の機會は彼のために起つたのである、しかるに彼は慧しくもそれが彼に厭はしいものであることを證據だてた。それはいかんとなれば、忍耐してそれらの缺乏を堪へないといふことはふたゝびエヂプトに歸るみちを求むるにほかならぬからである。」

決していかなる理由のためにも彼は兄弟たちが二つよりおほくの衣を有することを欲しなかつたけれどこれらを彼はつねに縫ひつけられた布切れをもつて裏とすることを許した。彼はつねにょき衣服が恐るべきものであると語り、そして彼はつねに彼に背むくものに對してはなはだきびしくその過ちを匡した、そして彼がみづからの例しによつてこれを勵ますことをうるために彼はつねに彼みづからの衣服のうへに粗き布を縫ひつけた。それゆゑに死ぬるときに於いてさへも彼は彼の葬衣が粗布をもつて蔽はれることを命じた。

けれど彼は病める、あるひは他のいづれかの必要に强ひられたる兄弟たちには肌のうへに一つの

軟らかき衣を用うることを許した、しかしながらそれをもつて戸外にあつてはその裝ひに於いて粗末さと賤しさとが保たれるやうにした。彼は大いなる悲しみをもつて謂ふことをつねとした、「いまは嚴格はかほどにも弛みそして惰りが支配しなければならないのか、一人の乞食なる父の子たちは緋の衣をさへも、たゞその色のみを變へて、着ることを恥ぢない。」

十六

けれど祝福せられたるフランシスがリエティのむかひの山のうへのサン・エレウテリオの隱者小屋に留まつてゐたときに、大いなる寒さのために彼は彼の上衣とそして彼の伴侶リッチエリの上衣とを、彼は習はしとしてたゞ一枚の常用の上衣を着てゐたのであつたが、それにいくらかの綴布をもつて裏づけた、それによつて彼のからだはそのときからいくらか安らかであつた。

そしてしばらくたつて彼が祈りからかへつてきたときに彼は大いなる樂しさをもつて彼の伴侶に言つた、「私にはすべての兄弟たちの儀規であり範例であることがつとめである、そしてそれゆゑにたとへ私の肉體のためには裏をつけたる上衣が必要であらうとも、しかしながら私はおなじものを

必要とする私の他の兄弟たち、それらの人があるひはそれをもたず、あるひはもつあたはざるもののことを考へなければならない。それゆゑに私には彼らのことを思ひ、そして彼らが忍ぶところの缺乏を忍ぶことがつとめである、私に於いてこれを見て、彼らは大いなる忍耐をもつて堪ふるに力強くあるであらう。」

けれどいかに多くの、そしていかに大いなる缺乏を彼が彼の肉體に拒んで、それによつて彼が彼の兄弟たちによきためしをあたへ、彼らが缺くところをさらに忍耐つよく忍ぶよすがとしたかは、彼とともにゐた私たちが言葉にも書きものにもいひあらはしがたきばかりである。兄弟らの數が加はつたのち彼は彼の主もなる、そしてもつとも高きつとめをこのことに置いた、すなはち彼の兄弟たちに何を彼らが爲すべきか、また避くべきかを、言葉によつてよりも實行をもつて教へることであつた。

十七

あるとき彼がある一人の貧しき人に遭つたときに、この人の貧しさを考へて、彼は彼の伴侶に謂

つた、「この人の貧しさは私たちに大いなる恥ぢをもたらし、そしてふかく私たちの貧しさを責めるいかにとなれば。私よりも貧しくある人を見いだすときにそれは私にははなはだ大いなる恥しいことである、それは私は聖とき貧しさを私の愛人として、私のたましひと肉體の富みに換へて擇んだからである、そして私が神と人のまへに貧しさを務めとするといふうはさは全世界にひろまつたからである。」

十八

祝福せられたるフランシスが最初に兄弟たちをもちはじめたときに彼はかほどにも彼らの同心としかして主が彼の善良なる伴侶たちをあたへられたことゝを歡んで、そして彼らを愛しそして敬ふあまりに、彼は彼らに施しを乞ひもとめに行くことを命じなかつた。それはさらに彼らが往くを恥づるやうに見えたからであつた、そのことのために彼らの羞恥を思ひやつて、彼はひとり施しを乞ふために往つた。

けれど彼がこれによつてはなはだ疲れてゐたとき、ことに彼はこの世に在つては貴とく育てられ、

そしてうまれつきかよわく、そしてそのときにいたるまでのあまりにはげしき禁欲と艱みとによつてさらに衰へてゐた、そして彼がかゝる勞苦をひとり堪へえがたきことを思ひ、そして彼らがみづからそのことに召されてゐるのであつて、たとへ彼らはいまだそれを識らず、あるひはまた「私たちもまた施しを乞ひに往くことを願ふ、」と言ふほど分別あるものでもなかつた故にそれをなすことを恥ぢてゐることを思ひ、それゆゑに彼は彼らに言つた、「いとしき兄弟たちしかして私の小さい子供たちよ、往くことを恥づるな、何となれば主は已れみづからをこの世で私たちのために貧しくなされた、そして私たちはその模範によつてもつとも眞なる貧しさを選んだのであるから、何となればこれは私たちの主イエスキリストが私たちとそしてすべての主の例しによつて聖とき貧しさに生きようとねがふものゝために取りそして殘されたる遺産であるから。まことに私はおまへたちに言ふ、すなはちあまたのこの世にさらに貴とく、さらに聖とき人々がこの集まりに加はりきたり、そして施しを乞ひに行くことを大いなる譽れとし恩寵とするであらう。往け、それゆゑに、心に恃みおほく神の祝福をもつてよろこびつゝ施しをもとめに往け、そしておまへたちは一の錢のために百の小錢を返へす人よりももつと進んで、たのしく施しを乞ひに往くべきである、それはおまへたちはおまへたちが施しをもとめるその人々に「神の愛のために私たちに施しをなされよ、」と言つて彼

らにこれにくらべれば天も地も無きにひとしき神の愛をさゝげるのであるから。」

けれど兄弟らの數が少なかつたために彼は彼らを二人づつ遣はすことができなくて、城や町々に一人づつ往かしめた。そしてそれゆゑに彼らが見いだしたる施物をたづさへて歸つてきたときに彼らのおの〳〵は祝福されたるフランシスにそのあつめたる施物を示した、そして彼らはたがひに謂ふのをつねとした、「私はおまへよりもおほくの施物を受けた。」そしてこのときには祝福せられたるフランシスは彼らがそのやうにたのしく興ずるのを見て歎んだ。そしてそのときからのち彼らの各各はさらに熱心に施しを乞ひに往くことの許しをもとめた。

十九

おなじころに、祝福せられたるフランシスが、そのころに彼のもつてゐた兄弟たちとともに住んでゐたときに、彼は彼らとともにかゝる貧しさに住んでゐた、即ち彼らはすべてのことについて文字どほりに聖とき福音を守つてゐた、それは主が彼に彼と彼の兄弟たちが聖とき福音の範例にしたがつて生くべきことを示されたその日からであつた。

されば彼は兄弟たちのために炊ぎをする一人の兄弟に、兄弟たちがつぎの日に食べるために野菜を習慣にしたがつて、溫かき湯に浸しておくことを禁じた、それはすなはち彼らが聖とき福音の「汝らあすのことを思ひわづらふことなかれ、」といふ言葉を守るためであつた。そしてそれゆゑにその兄弟は野菜を軟らかにすることを曉の祈りののちにまで延ばした、何となればそのときにはそれが食される日が始まつてゐるからであつた。このことのためにあまたの兄弟たちはさまざまな處で永いあひだこの掟を守り、そして彼らにとつて一日に必要なる以上は施物を乞ひまたは受けようとしなかつた、そしてこのことはことは都市に於いてさうであつた。

二十

ある一人のミニストロが祝福せられたるフランシスのもとに、聖誕祭の祝ひを彼とともにリエティの兄弟たちの住處で祝ふためにきたときに、兄弟たちはそのミニストロとそして祝ひのために、その聖誕祭の日に美しい白い布を覆ひ硝子の器をそなへて食卓をすこしく嚴そかに貴とく設けた。

けれど祝福せられたるフランシスは食するために彼の庵室からきたときに食卓が高くそしてその

やうに美しく設けられてゐるのを見た。そのときにたゞちに彼はひそかに去つて、そしてそこにその日にきた一人の貧しき人の杖と嚢とを取つて、そして低い聲で彼の伴侶の一人を呼んで、住處の戸のそとに出た。そして家のなかの兄弟たちはそれを知らなかつた。けれど彼の伴侶は家のなかに戸の近くに留まつてゐた。

兄弟たちはそのあひだに食卓についてゐた、それは祝福せられたるフランシスは、もしも彼が會食の時刻にたゞちに出で來ないときには兄弟たちは彼のために待つに及ばないと命じてゐたからであつた。

そして彼がしばらくそとに立つてゐたあとで、彼は戸を叩いた、そしてたゞちに彼の伴侶は彼のために戸を開いた、そしてその嚢を彼の背に負ひ、そして杖を手にとつて、彼は兄弟たちが食事せる室の戸のまへに巡禮のごとく、そして貧しき人のごとくに行つて、そして呼んだ、「主なる神の愛のために、一つの施しをこの貧しき病める巡禮にあたへよ。」

けれどミニストロと他の兄弟たちはたゞちにそれが彼であることを知つた。そしてミニストロは答へた、「兄弟よ、私たちもまた貧しい、そして私たちは人數多きゆゑに、私たちのもつ施物は私たちに必要である。けれど汝が呼んだその主の愛のために、家のなかに入れ、そして私達は汝に主が

私たちにあたへられたる施物のうちからあたへるであらう。」

そして彼が入りきたりそして兄弟らの食卓のまへに立つたときにミニストロは己れが食べてゐた皿を彼にあたへた、そしておなじやうにしてパンをあたへた。そして謙りをもつてそれを受け納めて聖フランシスは食卓にすわつてゐる兄弟たちのゐるまへで火の近くにすわつた。そして歎息しながら彼は兄弟たちに謂つた、「私が嚴そかに美々しく設けられた食卓を見たときに、私はこゝろのうちに、それは日々に戸から戸に施しをもとめに往く貧しき團體の人の食卓ではないと思つた。いかにとなれば、愛するものよ、私たちにとつては他の團體の人々よりもなほさらキリストの謙だりと貧しさのためにしたがふことがつとめである、私たちは神と人のまへでこのことを業としこれに召されてゐるのである。それゆゑに私はいま一人の小さき兄弟としてすわつてゐるやうに思はれるそれは主の君とそして他の聖者たちの祝ひはこれらの聖者たちがそれをもつて彼らのために天つ國を獲たる聖とき乏しさと貧しさをもつてこそ、たましひが天より遠けられるところの美々しさと奢りとをもつてするよりもまさつて、譽め祝はるべきであるから。」

これを聞いて兄弟たちは彼が全たき眞を語つてゐることを思つて恥ぢた。そして彼らのうちにいくたりかは彼が地のうへにすわつてゐるのを見、そして彼がそのやうに聖とく純なるしかたで彼ら

を匡し教へむと欲しつゝあるのを見ていたく泣きはじめた。そのうへ、彼は兄弟らに彼が貧しくつましやかなる食卓を設けて、それによつて世の人々が徳に擧げられるべきことを教へた、そして

もしも何人か貧しき人がきて兄弟たちから招かれるならば、その人は彼らと並んで同等にすわり、貧しき人は地のうへに、兄弟らは高きところにすわるべきことのなかるべきやうに戒めた。

二十一

のちに法王グレゴリオとなり給へる、わがオスチアの君は、彼がボルチウンクラのサンタ・マリアの兄弟たちの集まりに來給へるときに、あまたの騎士と官人らとともに兄弟らの寢處を見るために家のなかに入られた。そして兄弟らが地のうへに臥すをつねとし、彼らのしたにすこしの藁と破れちぎれたる藁褥のほかに敷かず、枕をもたざるを見て、彼はそれらの人々すべてのまへでいたく泣きそして謂つた、「見よ、こゝに兄弟たちは眠るのである、しかしながら私たち過てるものよ、いかに多くの奢りを私たちは用ゐるのであらう！　それがためにいかなることが私たちに起りきたるであらうか？」これによつて彼とすべて他の人々とは大いに徳を建てられた。また彼はそこに一つの

食卓をも見なかつた、いかにとなれば、その住處では兄弟らは地のうへに於いてともに食する慣ひであつたのである。

二十二

祝福せられたるフランシスがノチニラの市の上にあるバガオルチアの住處にゐたときに水腫の疾のために彼の足はいたく腫れはじめた、そして彼は重く病つてそこにゐた。

そのことをアッシジの人々が聞いたときにいくたりかの軍士は彼をアッシジに連れかへるためにいそいでそこにきた、それはあるひは彼がそこで死んだときには、他市の人々が彼のもつとも聖き骸を所有すべきことを恐れたのであつた。

けれど彼らが彼を故郷に運びきたるみちで彼らはアッシジの公に屬するある砦に休んで朝飯をたべた、そして祝福せられたるフランシスはよろこんで彼を迎へた一人の貧しき人の家に休んだ。けれど軍士たちがみづからの必要なるものを買ふためにそのところのなかを巡りあるいたときに、彼らは何ものをも見いださなかつた。そして彼らは聖フランシスのもとに歸つてきて、あだかも戯れ

のやうに彼に言つた、「兄弟よ、あなたはあなたの受けた施物のうちから私たちに分けて下さらなければならぬ、こゝで私たちは何もたべるものを得ることができないから。」そして祝福せられたるフランシスは彼らに大いなるたましひの熱心をもつて言つた、「汝らは見いだすことができなかつた、それは汝らの蠅と錢とに信頼しつゝ、神に信頼しなかつたからである。しかしながらいま、汝らが買ふべきものをもとめて行つた家々に歸つて往け、そして汝らの羞恥を去つて、そこで主なる神の愛のために施しを乞へ、そして聖靈は人々の心に入つて彼らは汝らに豐けく與へるであらう。」彼らはそれゆゑに往つて、そして彼が彼らに言つたごとくに施しをもとめた、そして彼らが施しを乞うたその人々は彼らに歡ばしく、そのもてるものを豐かにあたへた。そしてこのことが彼らにあだかも一つの奇蹟によつてのごとくに起つたことを知つて、軍士たちは主を讃へつゝ大いなる樂しさをもつて祝福せられたるフランシスのもとに歸つてきた。

かくのごとくに、まことにこの祝福せられたる父は、主なる神の愛のために施しをもとむることを神と世界のまへに大いなる貴きことけだかきことゝしてゐたのである、その故は天なる父君が人の用うるために造られたるすべてのものは、神の愛する御子のために、値するものにも値せざるものにもひとしく彼らの罪のゆゑに御慈しみによつて自由に許されてあるからであつた。彼はつねに

言つた、神の僕たるものは、おのが富みと慈善のために行つて「私にたゞ一錢の價の貨幣をあたへるものがあれば、私は彼らに金の千個をあたへよう」と謂ふものよりもさらに進んで、よろこびをもつて主なる神の愛のために施しをもとむべきである。「いかにとなれば、神の僕は一つの施物を乞ふときに、彼が乞ひもとむるその人に神の愛をさゝげわたすのである、そしてこの酬いに比ぶれば天と地にあるすべてのものは何ものでもない。」

それゆゑに兄弟たちが增すまへに、そして彼らが增したのちにも、彼らが世界に說敎しつゝ行きそして何人かに招かれてともに食し宿るときに、いかに貴とくあるひは富める人であつても、つねに食事の時には彼らはその家に往くまへに施しを乞ひにめぐるのを慣はしとした、それは兄弟たちの善き範例であり、そして聖貧の愛姫の尊とさのためであつた。そしてしば〳〵聖フランシスを招いた人は、彼が往くに及ばないといふことを彼に謂つた、それにむかつて彼は答へた、「私は私の王者のごとき尊とさと遺產とを、そして私と私の兄弟たちのつとむる業をないがしろにすることを欲しない、それはすなはち戸より戸に施しをもとめて行くことである。」そしてときとして彼を招いた人はみづから彼とともに行くをつねとした、そして祝福せられたるフランシスが受けたる施物をひうけて、彼の敬虔のために、これを遺物として蓄へるものがあつた。

これらを書き記す人はこのことをあまたたび見た、そしてこれらのことについて證しを帶ぶるものである。

二十三

あるとき祝福せられたる父が、のちに法王グレゴリオとなられたオスチアの君を訪ねたときに、食事の時となればあたかも忍び出るごとくして彼は戸から戸に施しを乞ひに往つた。そして彼が歸つてきたときにオスチアの君はすでにあまたの騎士たちと貴人たちとともに食卓に行つて居られた。けれど祝福せられたるフランシスは近づいて行つて彼が受けたる施物を食卓のうへにカルヂナルの君のまへに置いた、それは彼は祝福せられたる父がつねに彼に近くすわることを欲したからであつた。

そしてオスチアのカルヂナレは、彼が施しを乞ひに出て行き、そしてそれを食卓のうへに置いたためにすこしく恥しかつた、けれどそのときは賓客たちに憚つて彼に何も言はなかつた。

そして祝福されたるフランシスはすこしばかり食べたあとで彼の受けた施物をとつて騎士たちと

カルヂナレの君の僧たちにすこしづつを主なる神のために贈つた。それらの人々はみなそれを大いなる歡こびと敬虔をもつて、頭巾と袖とを彼にさしだして受けとつた。そしてあるものはそれを食べ、あるものは彼に對する大いなる敬虔からかたはらに殘して置いた。けれどオスチアの君は少からず彼らの敬虔についてよろこんだ、けれどことにそれらの施物が小麥でつくつたパンでなかつたからであつた。

食事のあとで彼は祝福せられたるフランシスを伴つて彼の室に入つた、そして彼の手をあげて彼は聖フランシスを大いなるよろこびとたのしさをもつて抱き、そして彼に言つた、「何故に、私のもつとも單純なる兄弟よ、おまへはけふ私にこの恥しめをあたへたのか、すなはち、おまへの兄弟たちの家であるところの私の家にきながらおまへは施しを乞ひに行くとは?」

祝福せられたる父は答へた、「いな、わが君よ、私はあなたに大いなる譽まれをなしたのであります、いかにとなれば、一人の僕が彼の主君に對して務めをはたし從順を滿たすときに彼は彼の主君に譽まれをなすのであります。」

そして彼は謂つた、「私にとつてはあなたの貧しきものどもの型でありためしであることがつとめであります、ことに私は知つてゐる、この兄弟たちの團體のなかには名に於いても業に於いても小

さき兄弟たちなるものがあり、彼らは主なる神の愛としかして彼らにすべてのことについて敎ふべき聖靈のうながしによつて、彼らのはらからに對してあらゆる謙りと服從と奉仕にまで謙らさるべき人々である。しかるにまた彼らのなかにあるものは羞恥かまたはあしき慣はしに抑へられて、みづからを謙だりそして施しを乞ひそしてその他の勤勞をなすために身をかがめることを厭ふもの、そして厭ふであらう人々がありそしてあるであらう、それゆゑに私にとつては私の行ひによつて圓體にある人々とあらうとする人々に、彼らがこの世に於いてそしてまたつぎの世に神のみまへに言ひ脫るゝ言葉をもたぬことを敎へるのがつとめである。それゆゑに私たちの主君しかして使徒の君なるあなたとともにあつて、そしてこの世の大いなるそして富める人々とともにあつて、主なる神の愛のためにたゞに大いなる敬虔をもつて私をあなたがたの家々に迎へるのみならず、また私を强ひてあなたがたの食卓にすわらしめるとも、私は施しを乞ふことを恥ぢやうと欲しませぬ、いなむしろ私はすゝんでこのことを神のみまへに大いなる貴とさとなし王者の權威と思ひ、そしてすべてのものゝ主の君でましましたときに私たちのためにすべてのものゝ僕であることを願はれ、そしておのが榮えに於いて富みそして譽れあらせたまふときに私たちの謙だりに於いて貧しくなられそして賤しめられ給うたる主イエスのほまれであると思ひます。

「それゆゑに私は兄弟たちであり、そしてあるべき人々に知らせたい、すなはち私は兄弟たちのあはれなる食卓にすわつて私のまへに彼らが主なる神の愛のために戸から戸に乞ひもとめたる乏しき施物を見ることを、あなたの、もしくは他の貴人たちのさま〴〵の美味をもつてゆたかに設けられたる食卓にすわることよりも、たましひと肉體のためにまさつて大いなる慰安と考へることを。何となれば愛のパンは聖ときパンである、それを主なる神の讃へと愛とが聖とくするのである、それはいかにとなれば一人の兄弟が施しを乞ふときに彼はまづ、「主なる神は讃へられ祝されてあれ、」とそしてそのつぎに、「主なる神の愛のために私たちに一つの施しをあたへたまへ」と言ふべきであるから。」

そしてカルヂナレは祝福せられたるフランシスのこの言葉によつて少からず德を建てられ、そして言つた、「わが子よ、汝の目によしと思はるゝことをなせ、それは神が汝とともにゐまし、そして汝は神とともにあるのであるから。」

これは祝福せられたるフランシスのしば〳〵くりかへして謂つたねがひであつた、すなはち兄弟は永いあひだ施しを乞ひに出ることなくて留まつてはならない、それは行ひの大いなる値のためとしかしてまた彼がのちになつて往くことを恥ぢるやうにならないためとであつた。いな、兄弟がこ

の世で貴とくそして大いなるものであるだけ、彼はこれが往つて施しをもとめ、そしてそのころに兄弟たちのつねであつたごとくに他の奉仕の業をなしたときに、それだけ大いによろこび、そして彼について徳に擧げられるのであつた。

二十四

團體のはじめのころに、兄弟らがアッシジの近くにリヴォトルトに棲んでゐたときに彼らのあひだにある一人の兄弟があつて、祈ること少なく、働かず、施しを乞ふことを欲せず、そしてよく食するをつねとした。

これらのことを見て祝福せられたるフランシスは聖靈によつて、この人が肉の人であることを知り、そして彼に言つた、「汝の途を往け、蠅なる兄弟よ、汝は汝の兄弟たちの働らきの果を食ひ、そして神の働らきのなかに懶惰であることを欲する、あだかも惰たれる孕まざる雄蜂が益することなく、働らくことなくてありながら、善良なる蜜蜂の勞苦と收穫とを食ふごときものである。」

そのやうにして彼は己れの途を行つた、そして彼が肉の人であつたゆゑに彼は慈悲をもとむることもなく、そしてまたそれを見いださなかつた。

二十五

またあるときに、祝福せられたるフランシスがサンタ・マリア・デイ・ポルチウンクラにゐたときにある一人の貧しき高きたましひの人が施物をたづさへてアッシジから歸りながら町をへてあゆみつつ、高き聲でそして大いなる樂しさをもつて神を讃へつゝ來た。

彼がサンタ・マリアの堂の近くにきたときに、祝福せられたるフランシスは彼の聲をきいた、そしてたゞちに大いなる熱心と歡こびをもつて彼の方に出で往き、そして走つて行つて彼を道で迎へ、そして大いなる樂しさをもつて彼の施物と小さき褻とを負つてゐる肩に接吻した。そして聖フランシスは褻をその肩から取り下してそれをおのが肩にのせ、そしてそのやうにしてそれを兄弟たちの家のなかに運び入れ、そして人々のゐるまへで言つた、「私はこのやうに私の兄弟たるものが施しをたづさへて往きそして歸り、そして歡びたのしくそして神を讃へつゝ行くことを欲する。」

二十六

ある日に祝福せられたるフランシスは言つた、「小さき兄弟たちの團體と生活とは神の御子がこの末なる世に天なる父君から請ひもとめられたある小さき群れである、御子は言はれた、父よ、私はおんみが私のために一つの新しきそして貧しき民をこの末なる世に於いてつくりそしてあたへたまふことを欲する、その民らは彼らのまへに行つたすべての他のものには似ずして謙だりと貧しさに生きそしてたゞ私のみをもつことに滿足するものを。そして父君は、御子の言葉を聽かれて、そして謂はれた、わが子よ、汝のもとむることは爲された。」それゆゑに祝福せられたるフランシスはつねに謂つた、かゝることの故に神は彼らが小さき兄弟たちと呼ばれるべきことを、すなはちこれこそ神の御子が父君に乞ひもとめられた貧しき謙だれる民であるゆゑに、欲ししかして彼に啓き示されたのである。

この民については御子はみづから福音のうちに語られる、「恐るゝことなかれ、小さき群れよ、なんぢらの父はよろこびて國をなんぢらに予へたまはむ。」そしてまた、「なんぢらわがこれらの兄弟らのもつとも小さきものに對して行へるはすなはちわれに行へるなり。」そして主はこれをすべてのたましひの貧しき人々について識つたのである、しかしながら主はそれをことに、主の教會のなかにあるべき小さき兄弟たちの團體についてよりおほく語られたのである。

それゆゑそれが小さき兄弟らの團體と呼ばれるべきことが祝福せられたるフランシスに啓き示されたごとくに、そのやうに彼はそのことを〔彼の遺書（テスタメントウム）と〕そして第一の掟のなかに書かしめた、その掟を彼は法王の君インノチェント三世にさゝげ、そして法王はそれを承認しそして許容し、そしてのちに教會集議に於いてすべての人に宣べ知らせた。

それとおなじくして主は彼に兄弟たちが用うべき挨拶の言葉を示された、それは彼が彼の遺書のなかに書かしめたごときものである、曰く、「主は私に、私が挨拶として、「主はなんぢに安きをたまふ」と言ふべきことを啓き示された。」されば團體のはじめの日々に、彼が最初の十二人のいづれか一人の兄弟とともに往くときに、彼は道のうへに遭ふ男女、まだ野のうへにある人々に挨拶して言つた、「主はなんぢらに安きをあたへたまふ。」そして人々はそのときまでかゝる挨拶を一人の宗教團體の人から聞いたことがなかつたので、彼らはいたく怪しんだ。いな、ある人々は彼らに大いなる腹立ちをもつて言つた、「おまへのこの挨拶は何のつもりか？」そのためにその兄弟はそれを恥しく

思ひはじめて、それゆゑに祝福せられたるフランシスに言つた、「私に他の挨拶を言ふことを許して下さい。」そして聖とき父は彼に言つた、「彼らをして語らしめよ、彼らは神よりきたるものを識らないのであるから。けれど恥ぢてはならない、何となればこののちこの世の貴人たち、王公たちは汝に、そして他の兄弟たちにこの挨拶のために尊敬を示すであらう。それはもしも主が一つの新しきそして小さき群れ、生活に於いても言葉に於いてもすべて彼らのまへにきたものどもと異なりそして似ざる、たゞ主のみをもつともなつかしくもつことに甘んずべき民をもたうとねがひたまふならば、これらのことはもはや大いなることではない。」

第三章　隣人に對する愛と慈しみと謙りについて

二十七

あるとき聖フランシスが兄弟たちをもちはじめたころのこと、彼らとともにアッシジに近いリヴォトルトに住んでゐたころに、ある夜のことであつた、すべての兄弟たちは寢ねて、夜の半ばであつたときに、彼らの一人は叫びだしてそして謂つた、「私は死ぬ、私は死ぬ。」そのためにすべての兄弟たちはおどろきそして恐れて起きあがつた。そして祝福せられたるフランシスは起きてそして言つた、「起きよ、兄弟たちよ、そして灯をともせ！」そして灯がともされたときに彼は言つた、「私は死ぬと言つたのはたれか？」その兄弟は答へた、「それは私であります。」そして彼はその人に言つた、「どうしたのか、兄弟よどうしておまへは死ぬのか？」そして彼は答へた、「私は餓ゑて死にます。」

そして祝福せられたる父はたゞちに食卓を設けさせ、そして愛と愼しみとに滿たされた人のごとくに、この人がひとり食することによつて恥ぢをうけるべきことを慮つて彼とともに食した、そして彼の意志によつて他のすべての兄弟たちもおなじやうに食した。

それはその兄弟のみならずすべてあらたに主に赴いた他の兄弟たちが彼らの肉體をかぎりなきまで責めてゐたからであつた。そしてともに食したあとで祝福せられたるフランシスは他の兄弟たちに謂つた、「私のもつとも愛するものよ、私はおまへたちに乞ふ、おまへたちの各々は、己れの性質を考へよ、何となればおまへたちのあるものはより少なき食物をもつて身を保つことができやうとも、しかしながら私の欲することは、他のよりおほくの食物を要する人はこのことに於いて前者に倣ふべきものではない、けれどみづからの性質を考へて己れの肉體にその欲するところをあたへて、それがたましひに役せられるやうにしなければならない。それは私たちが肉體とたましひを害する過食に心しなければならないことくに、そのやうにまた私たちはあまりにはなはだしき禁欲に心しなければならない、いな、さらにおほくを慎しむべきである。いかになれば、主は惠みを欲したまふけれど犧牲を欲したまはないから。」

そして彼は謂つた、「愛する兄弟たちよ、私がなしたこのこと、すなはち、私の兄弟に對する愛のために、彼がひとり食することを恥ぢざらむために私たちがみな彼とともに食したこと、それは必要と愛とがむしろ私を強ひてせしめたのである。けれど私はいふ、それが道に適ふことでもなく、また宜しきことでもないことを思ふゆゑに私はかゝることをふたゝびしようと欲しない。しかしな

がら私は欲しそしておまへたちに命ずる、すなはちおまへたち、私たちの兄弟のおの〳〵は私たちの貧しさにしたがつてみづからに必要であるだけ肉體を滿足せしめなければならない。」

それは最初の兄弟たち、そして彼らののちにきた他の兄弟たちは永いあひだ彼らの肉體を飲食の禁斷と徹夜の祈りと、寒さと粗き衣服と、そして彼らの手の勞働をもつて責めてゐたからであつた、彼らは肌のうへに强き鐵の帶金と鎖衣、または毛衣を着けてゐた、ときとしてこのために兄弟たちが衰弱すべきこと、そしてすでにいくたりかはその短かきあひだにも病みはじめたのを見て、彼はある集まりに於いて兄弟らが肌のうへには下着のほかに何ものをも着けることを禁じた。

しかしながら彼とともにあつた私たちは彼について證しとなる、彼は生涯のすべての時に於いてこのやうに彼の兄弟たちについて慮ばかり深くそして宜しきを守つたけれど、しかしながらそれはそのやうにして彼らがいかなるときにも貧しさの道と我々の團體の法規から過らざらむがためであつた。けれどそれにかゝはらずもつとも聖とき父みづからは、彼が道に入つたはじめから彼の生涯の終りにいたるまで、彼が生れつきかよわく、そしてこの世に於いて貴てやかにせざれば生きることができなかつたにかゝはらず、彼の肉體に對して嚴格であつた。さればある日兄弟たちが食事やその他のことについて聖とき貧しさと適宜の程を超えてゐるのを見たときに、彼はすべての兄弟た

ちのゐるところで雜役の兄弟たちにむかつてなしたある說敎のなかで言つた、「兄弟たちは私の肉體のためにはいくらかの許容が必要であると思つてはならない、何となれば私にとつてはすべての兄弟たちの規範であることがつとめである故に、私は僅かの、そしてあしき肉を用ひそして滿足し、そしてすべての他のものをも貧しさにしたがつて用ひ、そして珍らしきもの、美しきものから怒りをもつて顏をそむけることをこそねがひとしよう。」

二十八

また他のときに、祝福せられたるフランシスがおなじ處にゐたときに、ある一人の兄弟、團體のなかでけだかくそして老つた人がそこで病みそしてはなはだ衰へてゐた。

そして彼がこの人を見たときに、祝福せられたるフランシスは彼のために憐れみにうごかされた。けれどそのとき兄弟たちは、健やかなるものも病めるものも、みな大いなる樂しさをもつて貧しさを彼らの富みとなし、そして彼らの病めるときにも藥を用ゐず、またそれをを乞ふこともなく、却つて肉體に害あるものを選んでゐた、それゆゑに祝福せられたる父はこゝろのなかで謂つた、「もし

もこの兄弟が朝はやくいくつかの熟した葡萄を食べるならば、私は思ふに、それは彼によき養ひとなるであらう。」そして彼が思つたごとくに、そのやうに彼は爲した。

それゆゑ彼はある日はなはだ早く起きて、そしてその兄弟を彼のところにひそかに呼んで、そして彼をその住處に近いある葡萄畑に連れて行つた。そして彼は味ひよき葡萄の實れる葡萄樹を擇んで、その兄弟とともに葡萄樹の近くにすわりながら、兄弟みづからがひとり食べるのを恥づることをきづかつてともに葡萄を食べはじめた。そして彼らがたべてゐたときにその兄弟は療された、そしてともに彼らは主を讃めたゝへた。

さればその兄弟は彼の生涯のかぎりこのもつとも聖とき父が彼に對して示しそしてなしたる慈しみと情ふかさを記憶して、そしてしば〳〵大いなる敬虔と涙をもつてこのことを兄弟たちのなかで物語るのをつねとした。

二十九

チェラノに於いて冬のころであつた、祝福せられたるフランシスが一人の兄弟たちに友である人

が彼に貸した布を外套のごとくにたゝんで着てゐたときに、そこに一人の老いたる女が施しをもとめてきた。彼はたゞちに外套を己れの頭から解いて、そしてそれが他の人のものであつたけれど、それを貧しき老婆にあたへて謂つた、「往け、そしておまへに合ふ上衣を作れ、おまへはそれをまつたく缺いてゐるのであるから。」

老いたる女は笑つた、そして驚いた、私はそれが恐れのためか歡こびのためであるかわからない、けれど彼の手から布を取つて、そして遲滯すれば彼がそれを取り戻すことを危ぶんで、はやく急いで走り去りそして彼女の鋏をもつて布を切りはじめた。

けれど彼女がその布が一つの上衣を作るのに十分でないことを見いだしたときに、彼女は聖ときの親切のもとに歸つてきて、そして彼にその布が一つの上衣に足るだけ大きくないことを指し示した。聖とき人はおなじくこのやうな布を背に着てゐる彼の伴侶のうへに目を向けた、そして彼に言つた、「おまへはこの貧しい女が言つたことを聞いたであらう。神の愛のために私たちは寒さを忍ばう、そしてその布を貧しい女にあたへて彼女の上衣を全たくしよう。」そしてたゞちに彼があたへたごとくに、おなじやうにまた彼の伴侶もなした。そのやうにして彼らは二人ともに貧しき女に着せむがためにみづからは裸かになつてゐた。

三十

あるとき彼がシエナから歸りつゝあつたときに彼は途で一人の貧しき人に遭つた、そして彼の伴侶に謂つた。「私たちはこの外套をその持主に返すべきである。いかにとなれば私たちはそれをたゞ私たちが私たちみづからよりも貧しき人に出あふまでの借りものとして受けたのであるから。」

けれど彼の伴侶は敬虔なる父の貧しさを考へて、彼が他人のためにそなへやうとしてみづからを疎そかにすべきではないと說いた。それにむかつて聖フランシスは答へた、「私は盜人であることを欲しない。もしも私たちがさらにはなはだしく乏しき人にあたへないならば、それは私たちについて盜みとして數へられるであらう。」そしてさう言つて情ふかき父は外套を貧しきゝに渡した。

三十一

コルトナの庵にゐたときに祝福せられたる父は新しい上衣を着てゐた、それは兄弟たちがいくら

かの骨折りをもつて彼のために得たものであつた。

一人の貧しき人がその家にきて已のが死んだ妻と殘された貧しい家族について歎いた。その人をあはれんで聖とき人は言つた、「私はおまへにこの上衣をあたへよう、おまへがそれを何人にも、もしも人がそれをおまへから買ひそしてよき價をはらふときのほかは、あたへないといふ條件をもつて。」兄弟たちはこれを聞いて貧しき人のところに走りよつて上衣を彼から取り去らうとした。けれど貧しき人は聖とき父の溫かき顏を見て心つよく思ひ兩手にかたく掴んでそれをわがものとして遲び去つた。つひに兄弟たちは貧しき人にふさはしき償ひがなさるべきやうにしてその上衣を贖つた。

三十二

ペルジアの公の領なるコルレのうへで、祝福せられたるフランシスは一人の貧しき人に逢つた。彼はこの人をまへに世間で知つてゐた、そして彼に言つた、「兄弟よ、おまへはどうしたか？」

けれど彼は憤れるこゝろをもつて彼の主公について詛ひを口に出しはじめた、そして謂つた、「私の主人の情のために主なる神は彼を詛ふであらう、私は苦しむほかはできない、彼は私からすべての私の財を奪つたのだから。」

けれど祝福せられたるフランシスは、彼が死のごとき憎みに執してゐるのを見て、彼のたましひを憐んで、そして言つた、「兄弟よ、神の愛のためにおまへの主人を赦せ、そしておまへみづからのたましひを救へ、あるひは彼は奪つたところのものを返すであらう、もしもさうでなければおまへはおまへの財を失つたうへにおまへのたましひを亡なふであらう。」

そして彼は言つた、「もしも彼が第一に彼が私から奪ひ去つたものを返してくれるのでなければ、私はすこしも彼を赦すことができない。」

そのとき聖とき父は答へた、「ごらん、私はおまへにこの上衣をあげよう、私はおまへにおねがひする。主なる神の愛のためにおまへの主人を赦せ。」そしてたゞちにこの人のこゝろは和らげられ、そしてこのよき行ひにうごかされて彼の主人のなした損害を赦した。

三十三

マキロネに住むある一人の貧しき女が眼の病のためにリエティにきた、そして醫者は祝福せられ

たるフランシスのところにきたときに彼に言つた、「兄弟よ、眼を病つてゐる女が私のところにきました、彼女はそのやうにも貧しいので私は彼女のために藥の料を拂つてやらなければなりません。」

そして彼がこれを聞いたときに彼はたゞちに女のために憐れみをうごかされて、そして兄弟たちのうちで彼の守人（ガルディアン）であつた一人を呼びだしつゝ、その人に謂つた、「守人なる兄弟よ、私たちは私たちの借りたものを返さなければならない。」その人は答へた、「兄弟よ、その借りたものは何でありますか？」けれど彼は言つた、「私たちが借りものとしてその貧しい病める女から受けとつたこの上衣を、私たちは彼女に返すべきである。」そして守人は言つた、「兄弟よ、あなたにもつともよきことゝ思はれること、そのやうになさい。」

そのとき祝福せられたる父はよろこびをもつて一人の彼に親しき敬虔なる人を呼び、そして彼に言つた、「この上衣をもつて、そして十二のパンをともに携へて、醫者がおまへに教へるべき眼を病める貧しき女のところに行け、そして女に語れ、あなたからこの上着を預けられた貧しき人はあなたに上着の借りものに對してお禮をする、あなたみづからのものであるこれを取り收めて下さいと。」

彼はそれゆゑに往つて、そして女に聖ときフランシスが彼に謂つたことをすべて告げた。けれど

女は彼が彼女に冗談を言つてゐるのであると思つたので、恐れと遠慮をもつて彼に謂つた、「どうぞおかまひ下さるな、私はあなたの仰せに覺えがありません。」けれど彼は上衣と十二のパンを彼女の手に取らせた。女はそのときに彼が誠のことを語つたにちがひないと考へて、恐れと敬ひをもつてそれを受け收め、歡こびそして神を讃つた。そしてそれが彼女から取り返へされるのを恐れて、彼女は夜ひそかに起つて、よろこびをもつておのが家に歸つた。

けれど祝福せられたるフランシスは彼の守人と計つて彼女がそこに宿れるあひだ日ごとに彼女の藥料をあたへるやうに取り計つた。

されば彼とともに在つた私たちは彼について證しするものである、彼は病めるものにも全たきものにも、たゞに彼の兄弟たちに對してのみならずまた他の貧しき人々に對して、健やかなるものにも病めるものにもそのやうに大いなる愛と憐れみをもつてゐた、そして彼は兄弟たちがときとして大いなる辛苦と骨折りをもつて得た彼の肉體の必要品さへも貧しき人々に與へるのをつねとした、そしてそのときにはまづ私たちがそのために憂ひ煩ふことを慮ばかつて私たちを慰さめ、そして内にもそとにも大いなる歡こびをもつて、彼にとつてはなはだ必要なるものをさへもみづからから取り去つて他にあたへた。そしてかゝることのためにミニストロ・ジエネラレと守人とは彼に命じて、彼

らの許しなくしてはどの兄弟にも彼の上着をあたへることを禁じた。それは兄弟たちが彼らの散歩のこゝろからときとして彼に衣を乞ふのをつねとし、そして彼はたゞちにそれをあたへたからであつた、ときとしては彼は衣を切り分けて彼らに一つの部分づゝをあたへそして一部分をみづからのものとして殘した、それは彼がたゞ一つの上衣をもつてゐたのみであつたからである。

三十四

さればあるときに彼が說敎しつゝある縣を旅してゐたときに二人のフランス生れの兄弟が彼に遭つた。彼らは彼から大いなる慰さめを受けたときに、つひに神の愛のために彼に彼の衣を乞うた、けれど彼は、彼が神の愛のためにを聞いたときにたゞちにおのが衣をぬいでそれを彼らにあたへて、みづからは幾時かのあひだ裸かであつた。

それはいかにとなれば、彼は、神の愛といふ言葉をもつて言はれるときには、彼は何人にむかつても彼の繩帶または上衣、または何ものでもその乞はれたるものを拒まなかつた。いな、彼は兄弟たちが何ものについてもむなしきこゝろで「神の愛のために」と言ふのを聞くことをはなはだ厭ひそ

してしばしば彼らを責めた。それは彼がつねに謂つたごとく、「神の愛はいと高くそして貴といものであるから、稀れに、そして大いなる必要あるときのほか、そして大いなる敬虔をもつてせずしては名言ふべきものではない。」

けれどこれらの兄弟たちの一人はこのときにおのが衣をぬいでそしてそれを彼にあたへた。彼が何人かに衣もしくはその一部分をあたへたときに彼はそのために少からぬ缺乏と憂ひとを受けた、それは彼がまもなくその代りを得ることができないためであつた、そしてことに彼はつねに、ときとしては裏にも表にも小切れをもつてつぎをあてた貧しき衣を着ることをねがつてゐた。いな、彼は決して新しき布の衣を着ることを好まずして、他の兄弟から幾日か着古したその人の衣を貰ひうけることをつねとし、そしてあるときは彼は一人の兄弟からはその衣の半ばを、そして他の兄弟からは殘りを貰ふやうにしてゐた。

けれど彼の數多き病ひと脾胃の惡寒のために彼はときとしてそこにあたるところに內側に新しい布を裏とした。そしてこのやうな彼の衣服についての貧しさを彼は彼が主にうつゝた年までも保ちそして守つてゐた。すなはち彼の死ぬ數日まへに、彼は水腫にかゝり、そして全身は萎えたごとくなつて、そして彼のもつてゐたさまざまの疾ひのために、兄弟たちは彼のためにいくつかの衣を作

つた、それは必要のばあひには彼の衣が日ごと夜ごとに換へられることのできるためであつた。

三十五

またあるときにある一人の貧しき人が、祝福せられたるフランシスのゐたところにきて、そして兄弟たちに神の愛のために布の一切れを乞うた。それを聞いて祝福せられたるフランシスはある一人の兄弟に言つた、「家中をさがしてごらん、もしもおまへがいくらかの布もしくは切れを見つけることができるならば、それをこの貧しい人にお遣り。」そして兄弟は家の中をくまなく走りあるいて、そして彼が何も見いださなかつたと言つた。

そのときにその貧しい兄弟がむなしく立ち去らないために、祝福せられたるフランシスは、彼の守人が禁ずることを恐れて、ひそかに往つて小刀をとつて、そしてその隠れたところにすわつて、彼の衣の内側に縫ひつけられた部分を切り取りはじめた、そしてそれをひそかにその貧しき人に與へようと思つてゐた。けれど守人はこれを知つて、たゞちに彼のところに往き、そして彼がそれをあたへることを禁じた、ことにそれはそのときはげしい寒さがあり、そして彼ははなはだ病みそして冷えてゐたからであつた。

そのときに祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「もしもおまへが私がその布切れを彼に與へることを欲しないならば、おまへはいくらかの布切れがその貧しき人にあたへられるやうに計らはなければならぬ。」そして兄弟たちは彼らみづからの衣服からとつたいくらかの布切れを、祝福せられたるフランシスのために、その貧しき人に與へた。

彼が世のなかに説教に出て往つたときに、徒歩するときにも、また彼が病みはじめてからは驢馬に乗つてゆくとき、またもつとも大いなるそして手段なきときには馬に乗つてゐたときにも（かゝるときでなければ彼は騎ることを欲しなかつた、そしてこれはたゞ彼の死ぬるすこしまへのことであつた、）もしも兄弟の何人かが彼に外套を貸すときには、彼はもしも彼が會ふ、または彼のところにくる貧しき人にあたへることのできるためでなければそれを受けなかつた、そのやうにしてたゞ彼のたましひの證しのみが彼にそれが必要なることを示すのであつた。

三十六

團體のはじめのころに彼がそのときもつてゐた二人の伴侶とともに、リヴォ・トルトに住んでゐたときに一人の人、第三の兄弟となつたエジディオと呼ばるゝ人が世のなかを出で彼のところにその生活の法を受くるためにきた。

そして彼はそこに彼が身につけて世のなかゝらもつてきた衣服を着て留まつたのちに、ある一人の貧しき人がそのところに、祝福せられたるフランシスから施しをうけるためにきたことがあつた。エジディオを顧りみて祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「おまへの外套をこの貧しい兄弟にお遣り。」そして彼はたゞちに大いなるよろこびをもつてそれを背からぬいで貧しき人にあたへた。

そしてそのときに彼が歡こびをもつて衣を貧しき人にあたへたことのために、神が一つの新しき寵しみを彼のむねに吹き入れるのが見られた。そしてそのやうにして彼は祝福せられたるフランシスによつてむれに入れられ、そしてのちつねにもつとも大いなる完全にむかつて徳をもつて進んだ。

三十七

祝福せられたるフランシスがロッカ・ブリッチイの近くにある兄弟たちの住處に於いて說敎するために往つたときに、あだかも彼が說敎すべき日に、ある一人の貧しくそして病める人が彼のところにきた。

この人について深い同情を感じて、彼は彼の伴侶にむかつてこの人の貧しさと病について話しはじめた、そして彼の伴侶は彼に謂つた、「兄弟よ、彼が十分に貧しさうに見えるのはまことであります、しかしながら思ふにこの縣中に彼のやうに富人になりたがつてゐるものは一人もありますまい。」そしてたゞちに祝福せられたるフランシスにきびしく叱られて彼は彼の過言を懺悔した。

そして祝福せられたるフランシスは言つた、「おまへは私がおまへに命ずる罰をこのことに對して受けて行はうと思ふか？」その人は答へた、「私はよろこんでいたします。」そして彼は彼に言つた、「往つておまへの衣服をぬげ、そしておまへみづからをあか裸かであの貧しい人の足もとにひれふし、そしておまへがそのやうなしかたで彼について惡しく語つたときにいかに罪を犯したかを彼に

告げ、そして彼におまへのために祈るやうに乞へ。」彼はそれゆゑに往つた、そして聖フランシスが語つたすべてのことをなした。

それをなし終つて彼は起ち、そして衣を着て、祝福せられたるフランシスのところに歸つてきた。そして祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「おまへは知らうと欲するか、いかにしておまへが彼に對して、いな、キリストに對して罪を犯したかを？　もしもおまへが一人の貧しき人を見るときには、おまへは彼がその御名に於いてくるその主、すなはちキリストを思はなければならない。主は御身づからのうへに私たちの貧しさと病ひとを受けられた、この人の病と貧しさは私たちにとつてあだかも鏡である、そのなかに私たちは私たちの主イエス・キリストの病と貧しさとを深き愛をもつて見、そして考へるのである。」

三十八

また他のときに、彼がボルチウンクのサンタ・マリアに住んでゐたときに、ある女が聖とき父から施しをもとめるためにそこの住處にきた、この女は貧しく、そして老い、そして彼女の二人の子は

團體に入つてゐた。

たゞちに祝福せられたる父は、そのときミニストロ・ジェネラレであつたフラテ・ピエトロ・ディ・カタニに言つた、「私たちは何かこの私たちの母にあたへることのできるものを持つてゐるか？」それは彼がつねに兄弟たる人の母を彼とそしてすべての兄弟たちの母であると謂つてゐたのである。

フラテ・ピエトロは答へた、「私たちは彼女に與へることのできるものを家のなかに何ももつてゐません、」彼女は彼女のからだをやしなふために施しをねがふのであつたから。「けれどたゞ私たちは會堂のなかにたゞ一冊の新約全書をもつてゐます、これは私たちが朝の祈りに讀むための本であります。」そのころには兄弟たちはあまたの祈禱書やあまたの詩篇をもたなかつたからであつた。

それゆゑに祝福せられたるフランシスは彼に言つた、「その聖書を私たちのお母さんにお遺り、さうすれば彼女は彼女の必要のためにそれを賣ることができやうから。そして私はかたく信ずる、そのことは、もしも私たちがそれを讀むことよりも、主とそして祝福せられたる處女とを悅ばすであらう。」そしてそのやうにして彼はそれを女にあたへた。

祝福せられたるヨブについて書かれてあることは、されば、彼についても言はれそして書かれることができるであらう、「わが幼きときより慈愛はわれとともに育まれ、しかしてそはわが母の胎よ

りわれとゝも生ひたちぬ。」されば彼とゝもに在つた私たちには、たゞ私たちが彼の愛と憐れみ、兄弟たちと他の貧しき人々に對する情について他から聞いたことのみならず、また私たちの目が見たことがらも書きまた語ればいと長くそして難いことであらう。

第四章　彼と兄弟らに於ける聖とき謙たりと從順の完全について

三十九

聖とき謙りの德を守るために。彼は、彼が道に入つてから數年のゝちにある集會に於いて兄弟たちのまへで彼の團體の首たる職をしりぞいて。そして謂つた。「いまよりのち私はあなたがたに對して死んだものである、けれどフラテ・ピエトロ・ディ・カタニを見よ。この人に私と私たちはともに服從することを欲する、」そして彼はピエトロのまへに地のうへに身をひれふして、彼に從順と尊敬とを約束した。

そのときにすべての兄弟たちは泣いた。そして彼らのはなはだ大いなる悲しみは彼らのむねから深い歎息を押しだした。それは彼らが彼らみづからをこのやうにしてかゝる大いなる父を喪つた孤兒たちとして識つたからであつた。

けれど聖とき父は、起つて、そして目を天に擧げ、手を合せて、そして謂つた、「主よ、私はいま

までであなたが私にゆだねられたこのあなたの家族をあなたに薦めます、そしていまあなたが知らるこの私の病ひのために、あゝいともなつかしき主よ、家族のために計ることができないので、私はそれをミニストロたちに渡します、そして彼らは審判の日にあなたのまへに條理を示さなければならないであらう、あゝ主よ、もしも彼らの怠慢により、または悪しき例により、またはあまりにきびしき處罰によつてたゞ一人の兄弟たりとも失はれたならば。」

彼はそれゆゑにそのときからのち彼の死の日にいたるまで一人の僕として留つた、そしてすべてのことについて他の人々よりもさらに謙つて身を行つてゐた。

四十

また或ときに彼はすべての彼の伴侶を彼の代理者に任せて、そして言つた、「私は一人の特別の伴侶をもつといふ自由の特權についてひとり格別にされることを欲しない、されば兄弟たちをして、主が彼らのこゝろに入るときにその御旨のまゝに處から處へと私とゝもに行かしめよ、」

そして彼は言つた、「私はいましがた一人の盲ひた人が彼の道のみちびきとしてたゞ一匹の犬の子

を伴つてゐるのを見た、そして私は彼に優つてみえることを欲しない。」

けれどこれがつねに彼の光榮であつた、すなはちあらゆる特權や榮耀のかたちをあとにすれば。そのときに彼のなかにキリストの德が棲むべきことであつた。

四十一

あるとき一人の兄弟から問はれて、何故に彼がこのやうに彼の兄弟たちを彼の心づかひから投げだし、そしてあだかも彼らがすこしも彼に關はりなきかのごとくに、彼らを他の人の手に渡したのか？　と言はれたときに、彼は答へた——

「わが子よ、私は能ふだけ私の兄弟たちを愛する、けれどもしも彼らが私の歩みのあとにしたがふならば、私はより深く彼らを愛し、そしてまた私みづからを彼らから距てないであらう、けれどそれはいくたりかの長職たちがあつて兄弟たちを他のことに引きよせ、彼らにむかつて昔の人の例しを提議し、そして私の戒しめを思はないからである。けれど何を、そしていかに彼らが爲すかは終りに於いてさらにあきらかに現はれてくるであらう。」

そしてしばらくののち、彼のはなはだ重き病ひが彼のうへに壓し迫つたときに、彼の精神の激情によつて彼は寢床のなかに起ち、そして叫んで謂つた、「私の團體と私の兄弟たちを私の手から奪ひとつたのは誰か？　もしも私が全團集會に行くならば、私は彼らにいかなる意志をもつかを示すであらう。」

四十二

祝福せられたる父は病める兄弟のために町々の公けなる市場に於いて肉を乞ひもとめることを恥ぢとしなかつた、けれど彼は病み臥せる人たちには忍耐して缺乏に堪へそして彼らが十分に滿足されなかつたときにも爭ひを起してはならないと戒しめた。されば最初の掟のなかに彼はかく書かしめた——

「私は私の兄弟たちに切に乞ふ、彼らの病めるときに於いて、神に對しまたは兄弟たちに對して怒りまたは心を亂さることなく、またあまりに熱心に醫藥をもとめてはならない、また時のまに死ぬべき、たましひの敵なる肉體を自由にすることを欲してはならない。たゞ彼らはすべてのものゝた

めに感謝し、そして神が彼らについて欲したまふごときものであることをねがへ。それはいかにとなれば、神が永しへのいのちへとあらかじめさだめたまうた人をば、神は鞭撻の痛みと病苦をもつて教へ給ふ、それは神みづから謂はるゝごとく、すべてわが愛するものはわれこれを責めこれを懲らす。」

四十三

ローマの市に於いて、二つの譽れある光明、聖フランシスとそして聖ドメニコとがともにのちに法王となられたオスチアの君のまへにあり、そして各々神についてもつとも妙へなることを彼らのむねから注ぎ出したときに、そのときオスチアの君は彼らに言つた、「原始の教會に於いては牧師や長職たちは貧しく、そして人々は愛に篤つくして、貪らなかつた。されば私たちはおまへたちの兄弟らを司教や僧官とするべきではないだらうか、さうすれば彼らはすべての他の人に對して證しとなり模範となるであらう。」

そのときに二人の聖者のあひだには彼らの答へすることについて謙だれるそして敬虔なる爭ひが

あつた、まことにそれは先を爭ふためではなくて、却つて各々他を顧みてさきに答へしめようとするためであつた。けれどつひにフランシスの謙だりが勝つた、そして彼は先に答へることをしなかつた、そしてドメニコは先に答へることに於いて謙だつて服從したことによつて勝つたのである。

祝福せられたるドメニコはそれ故に答へて言つた、「わが君よ、私の兄弟たちは、もしも彼らがこのことを知るだけでも、よき狀態に擧げられるでありませう、そして私の力に及ぶかぎり私は決して彼らがある尊貴の形式に昇ることを許さないでありませう。」

そのとき祝福せられたるフランシスは、オスチアの君のまへに身を屈めて、謂つた、「わが君よ、私の兄弟たちが小きものと呼ばれてゐるのはかゝる理由からであります、即ち彼らが大ならむとせざるためであります。その故は、彼らの營みは彼らに身を賤しくし、そしてキリストの謙たりの歩みのあとに倣ひ、これによつて彼らが終りに聖者たちの目のまへに他のものよりも擧げられることを敎へるからであります。さればもしもあなたが、彼らが神の敎會に於いて果實を收むることを欲していらつしやるならば、彼らを彼らの務めのありさまに留めそして保つて下さい、そしてもしも彼らが高きことのために努めるときには、彼らを地の上に打ち落し、そして決して長職に上ることを彼らに許して下さるな。」

これらが聖者たちの答へであつた、そして彼らが語り終つたときに、オスチアの君は、彼ら二人の答へによつて大いに德を高められ、はなはだ大いなる感謝を神にさゝげた。

二人はともに去りながら、聖ドメニコは聖フランシスに彼が帶としてゐる繩を與へることを乞ひもとめた。そして祝福せられたるフランシスは謙だりのこゝろからそれを拒んだ、それは彼が愛から乞ひもとめたとおなじであつた。けれど乞ひもめた人の樂しき敬虔は勝つた、そして祝福せられたるドメニコは彼の愛の激しさによつて聖フランシスの帶繩を受け、それを彼の上衣のしたに締めそしてそのときからのち敬虔をもつてそれを帶びてゐた。

しかるのちに彼らの各々は彼の手を他の手にわたし、そしてもつともいとしきたがひの從順をもつてみづからを他にゆだねた。そしてそのやうにして聖ときドメニコは聖ときフランシスに言つた「フラテ・フランチェスコよ、私はあなたのと私のとが一つの團體をつくり、そして私たちが敎會に於いておなじ仕方で生きることを希がふ。」

そして彼らがたがひに別れたときに、ドメニコは側らなるいくたりかの人々に謂つた、「まことに私はおまへたちに言ふ、すべて敎へに入れるものはこの聖とき人フランチェスコに倣ふべきである、そのやうに彼の聖とさは偉大である。」

四十四

祝福せられたるフランシスは、彼が教へに入つた始めから、主に輔けられて、賢こき人が石のうへに築くがごとくにみづからをすぐれて大いなる謙だりと神の御子の貧しさのうへに築き、彼の大いなる謙だりの故に彼の團體を小さき兄弟たちと呼んだ。

されば團體の始めて於いて彼は兄弟たちが癩病院に宿りそこで病者に仕へて、そしてそこに聖とき謙だりの礎を据ゑることを欲した。それゆゑ貴とき人きたひくき人が團體にきたときに、彼らにむかつて宣べられたるあまたのことのうちにも、彼は、彼らが癩病者に仕へそして彼らの病院に宿るをつとめとすべきことを教へるものをつねとした。それは第一の掟にも入れられてあるごとくに「天のしたに聖とき貧しさのほかに何ものをも所有することをねがはず、これによつて彼らが主によつてこの世に於いて肉體とたましひの食物をもつて養はれ、そしてきたる世にては彼らの天なる遺産を嗣ぐことを得るために」であつた。

そしてこのやうに彼はみづからと他の人のために礎石を大いなる謙だりと貧しさのうへに擇んだ、そして彼が神の教會に於いて大いなる僧官となることができたごときときにも、彼はたゞに教會に於いてのみならず彼の兄弟たちのあひだにても、低きにあらむことを選びそして願つた。彼の思ひそしてねがふところのこの殘しくあることこそ神と人々の目にもつとも高く擧げられてあれ。

四十五

彼がリエティで人々にその市の市場で說教してゐたときに、說教が終つたのちに、その市の司教はたゞちに起つて、そして人々に語つた、この人は愼しみふかくそれとゝもに高きたましひの人であつた、

「主は、彼が彼の教會を植ゑそして建てたまひたる最初のときから、つねに聖とき人々をもつてそれを飾られ、彼らをして言葉と模範をもつてそれを養はしめ給うたのである。けれどいま、この新しき世には、主は教會を飾るに、この貧しき、輕しめられたる、そして無知なる人、フランチェスコをもつてし給ふ、そしてそれゆゑに汝らは主を愛しそして讃めまつり、そして罪に心がけなければならない。それは主はいかなる國民にもこのやうになしかたをもつてはしなかつたからである。」

この言葉を終つて、司教は彼が説教をしたところから下りてきて、そして會堂のなかへ入つた。そして祝福せられたるフランシスは彼のところに近づいて、彼の足もとに身を伏し彼のまへにひざまづいて、そして言つた「まことに私はあなたに言ふ、わが君司教よ、何人もあなたがけふ私にむかつてなされたほどそのやうに大いなる譽れを私になしたものはこの世にありませんでした、それらの人々は言ひます、「彼は聖とき人である、」さういつて光榮と聖とさを私に歸して、創り主を忘れています。しかしながらあなたは、愼しみある人のごとくに、貴ときものといやしきものとを區別されました。」

祝福せられたるフランシスが讃へられそして聖者と呼ばれるときに彼はつねにかやうな言葉にむかつて答へて謂つた、「私はまだそれほど確かなものではない、私は息子や娘をもつかも知れない。その故は、もしもいかなる時にても主がかつて貸しあたへられた寶を私から取り去りたまふならばそのとき私には、不信心者にもそなはれる肉體とたましひのほかに私のものとして何か殘るであらう？　いな、私はかう信ずべきである、もしも主がそのやうにあまたの、そのやうに大いなる賜物を一人の盜人、または一人の信ぜざる者に、私にあたへたまうたごとくに、あたへたまふならば、彼らは彼らの主に對して私よりももつと忠實であつたであらう。あだかも木の板に描かれたる聖と

き主と祝福せられたる處女の繪に於いて、主と祝福せられたる處女は譽れを受くるけれど、木とそして繪はそれみづからに何ものをもとらない、そのやうに神の僕は一種の神の繪姿であつて、そのなかで神はその善のために譽れをうける、けれどその人はこれについて彼みづからのものとして取るべきものはない、神の目より見れば彼は木とそして繪より僅かなるものであり、いな、彼はまつたく何ものでもないからである。そしてそれゆゑにたゞ神にのみ榮えと譽れはさゝげらるべく、けれど人がこの世のなやみのなかに住むあひだは、恥ぢと煩ひをのみたゞ彼自らに歸すべきである。」

四十六

けれど、死にいたるまで全たき謙だりと隷屬に留まることをねがつて、彼の死ぬるまへに彼はミニストロ・ジェネラレに言つた、「私は希ふ、おまへはおまへの私に對する監督を私の伴侶たちの一人にゆだねてくれ、その人にむかつておまへの代りとして私は服從をなすであらう、從順の功德のために私は生くるにも死ぬるにもそれがつねに私とゝもに留まることを欲するのであるから。」

そしてそのときからのち彼は彼の伴侶たちの一人を守人としてもち、それにむかつて彼はミニス

トロ・ジェネラレにむかつてなすごとくに服從した、それのみならず、あるとき彼は彼の伴侶に謂つた「主は他のことのうちにもこの恩寵を私に許して下された、すなはちけふ團體に入る新弟子にむかつても、もしも彼が私に對して守人として定められたならば、團體のなかで、また生活に於いてもつとも秀でそして老いたる人に對するごとくに謹んで服從することである、いかにとなれば一人の僕たるものは彼の上みたる人を、人として見ずして、たゞ、その愛のために彼が從ふその神のごとくに見るべきである。」

のちに彼は謂つた、「全たき世界に於いていかなる長職の僧官といへども、主が私をして、もしも私がねがふならば、私の兄弟によつて恐れられしめたまふほど、そのやうに恐れられるものはない。しかしながら、主は私にこのやうな恩寵を許したまうた、即ち私は、團體のなかでもつとも小さき賤しきものゝごとくに、すべてのものをもつて滿足することをねがふのである。」

これもまた彼とゝもにあつた私たちが私たちの目をもつて見たことである、彼がみづから證しするごとくに、兄弟たちのあるものが彼をその乏しきときに滿たさせず、または彼に、人がそれを聞けばかならず煩はされるやうな言葉を告ぐるとき、たゞちに彼は祈りに赴いた、そして彼が歸るときには彼は何ごとをも思ひださずまた決して、「かゝる人が私のねがひを滿たさなかつた」とか、ある

ひは「この人が私にこれ〳〵の言葉を言つた」などと謂はなかつた。そしてこのやうにしてかゝる仕方を守つて、彼がます〳〵死に近づくだけ彼はいかにしてあらゆる謙だりと貧しさに、そして德のあらゆる完全に生きそして死ぬことができるかを考へることを努めてゐた。

四十七

もつとも聖とき父は彼の兄弟たちに謂ふのをつねとした、「まことに愛する兄弟たちよ、一つの命令を最初の言葉に於いて果たせ、そしておまへたちに言はれたる言葉がくりかへされるまで待つてはならない。論じまたは審判きしてはならぬ、命ぜられることに能はざるべきことはない、それはもしも私が何ごとかおまへたちの力を超ゆることをおまへたちに命ずることがあらうとも、聖とき從順はおまへたちの弱きところを助けることを缺かないであらうから。」

四十八

けれどあるときに彼の伴侶たちのまへに彼はこの歎息を口にだした、「彼の上みなる人によく従ふ受戒の人はこの世にほとんど一人もない。」たゞちに彼の伴侶たちは彼に言つた、「話して下さい、父よ、いかなることが全たきそしてもつとも秀でたる従順であるかを。」

けれど彼は答へて、まことの全たき従順を一つの死體の譬へのもとに述べた、そしてこのやうに言つた、「一つの生命なき死體をとつて汝の好むところに置け、おまへはそれが動くことを拒まず、また處を變へず、また放ち往かしめよとも乞はないことを見るであらう。けれどもしそれが王座に擧げられるならば、それはもつとも高きものを見ずしてたゞうなだれてあるであらう。もしそれに紫の衣を纏へばそれはます〳〵青さめる。さればかゝる人こそまことに従順なるものである、何ゆゑに彼が動かされるかを判斷せず、その置かるゝところについて思ひ煩はず、そして彼が動かさるべきことを乞はず、長職に昇されてもその平生の謙だりを保ち、彼が譽れをうくるだけそれだけみづからを價せずとする人である。」

乞はれたるにあらずして、純潔にそしてひとへなる従順を彼は聖とき従順を呼んだ。けれど彼はかく信じてゐた、肉と血に由らざる、もつともたかき服従とは、人々が神のはげましによつて、彼らの隣人たちの幸福のために、または殉教のねがひのために異教の國に往くべきことであつた。そ

して彼はこの従順をもとむることは神に正しく容れられるべきものであると考へてゐた。

神の上の手

四十九

そして祝福せられたる父は思つた、一つの命令はたゞ稀なるばあひのほかは従順の德の名に於いて與へられるべきものでない、またたゞ最後に用ゐらるべき武器を最初にいだすべきものでない、いかにとなれば、彼は言つた「手はたゞちに劍のうへに置かるべきものではない。」

けれど彼はつねに言つた、たゞちに従順の命にしたがはざる人は、すなはち遲滯せしむる必然なる原因のあらざるかぎりは、神をも畏れずまた人をも敬はざるものである。性急なる命令をなす人に於いて命令の力としてのこれるものは、怒りやすき手にある劍のごときものである、これよりまことなることがあらうか？　そして従順を疎そかにし輕んずる受戒の人よりも希望なきものはたれであらう？」

五十

ある兄弟たちは祝福せられたるフランシスに謂つた、「父よ、あなたは知つて居られませう、ときとして司教たちは私たちが説教することを許さず、私たちをして、私たちが主の言葉を告げ知らせることのできるまへに、あまたの日々を一つのところにむなしく立つて過させます。もしもあなたがこのことに關して法王の君から特權を得られた方がよくはありますまいか、それはたましひたちの救はるゝためにすることでありますから。」

これにむかつて彼はきびしき叱責をもつて答へそして謂つた。「おまへたち、小さき兄弟よ、おまへたちは神の意志を知らない、そして私に神の欲する如くして全世界を悔い改めしむることを許さないのである、それは私はまづ聖とき謙だりと尊敬をもつて司祭職たちを悔い改めさせやうと欲する、されば彼らは、もしも私たちの聖とき生活とそして彼らに對する謙だりたる尊敬とを見るならば、人々に説教しそして悔い改めしむることをおまへたちに乞ふであらう、そして彼らは汝らを誇りにみちびくべき汝らの特權にもまさつて、汝らの説教を聞かせるために人々を呼びあつめる

であらう。そしてもしもおまへたちがあらゆる貪欲から離れて、そして人々に彼らが負ふところを教會に與へることを説き勸めるならば、司祭職たちはみづからおまへ達に彼らの民たちの懺悔を聞くやうにと乞ふであらう、けれどこれについておまへ達はこゝろにかけることを要しない、それは司祭職たちが悔い改めてあれば人々はたやすく懺悔を聞く人々を見いだすであらうから。けれど私にとつては、私が主からねがふところの特權は、すなはち決して私はいかなる特權をも人から受けず、たゞすべてのものに尊敬をつくし、そして人々の言葉によるよりもむしろ模範によつて、從順をもつて世界を聖とき掟に悔い改めしむることである。」

五十一

祝福せられたるフランシスは小さき兄弟たちがこの末の世に於いて主によつて遣はされたのであつて、おのが罪の闇みにつながれてある人々に生活の模範を示すべきであることを確かめ謂つた。彼はつねに言つた、彼が世界にひろく往ける聖とき兄弟たちについて大なる譽れを聞くとき彼はもつとも甘美なる薫りにみたされそして貴とき受膏の德によつて薫ぜられた。

ある日のことであつた、ある一人の兄弟はキプロスの島の貴人のゐたところで、他の一人の兄弟に罵る言葉を投げつけた、けれど彼は彼の兄弟がそのためにすこしく悲しげになつたのに心づいてたゞちにみづから責めるこゝろを起し、そして彼はたゞちに一頭の驢馬の糞をとつてそれをおのが口に入れ、齒をもつて嚙み、そして言つた、「糞を嘗めよ、あゝ舌よ、なんぢは怒りの毒を私の兄弟にそゝいだではないか！」そしてこれらのことを見た人は、あきれるまで驚き、大いに德を建てられて己のがみちを行つた、そしてそののち彼みづからと、そして彼のもてるものゝすべてを兄弟たちの意志にまかせた。

それゆゑにすべての兄弟たちは習慣として守つた、即ちもしも彼らの一人が他の人にむかつて、傷くるまたは煩はす言葉をいだすことがあれば、彼の身を地のうへに平伏して、たゞちに怒らせた兄弟の足に接吻し、そして謙つて赦しを乞ひもとめた。

聖とき父は、彼の子どもたちがみづからの心から聖とさの模範を示したことを聞くごとに、かゝることについて歡んだ、そして彼は言葉または行ひによつて罪人たちをキリストの愛にみちびくべきかゝる兄弟たちを、受けらるべきもつとも價ある祝福をもつて負はせた。それは彼みづからがまつたく滿されてあつたたましひたちのための熱つき愛に於いて、彼は彼の子どもたちがまつたき同

じさをもつて答へることを願つてゐるからであつた。

五十二

あるとき主イエス・キリストは、祝福せられたるフランシスの伴侶なるフラテ・レオネに言つた、「フラテ・レオネよ、私は兄弟たちのために悲しむ。」

フラテ・レオネは主にむかつて答へた、「何故なれば。おゝ主よ？」そして主は答へたまうた、「三つのことの故に、即ち、私が彼らに、汝の知るごとく、彼らが播かずそして刈らざれどもそのやうにひろくそして豐けく示す私の惠みを彼らが知らない故に。そしてひねもす彼らがつぶやき、そして懈たるが故に、そして彼らがしばしばたがひを怒りにまで過ちする故に。そして愛にかへることなく、そして彼らの受けたる害ひを赦さざるが故に。」

五十三

彼がシェナに留つてゐたとき、そこに說教者の團體に屬する聖とき神學を學べる博士で、謙遜にしてそれともに正しきこゝろの人が彼のもとに來た。彼が主の御言葉について祝福せられたるフランシスとともにしばらく語りあつたときに、その師は彼にエゼキエルの言葉について問うた。「もしなんぢかの邪しまなる人に語りてその邪しまのみちより戒めざらんとき、彼のたましひをばわれはなんぢの手にもとめむと欲す、」彼は言つた、「よき父よ、しかしながら私はあまたの死の罪にある人々を知つてゐる、彼らにむかつて私は彼らの邪しまを戒しめませぬ、彼らのたましひは、しからば、私の手にもとめられるでありませうか？」

その人にむかつて祝福せられたるフランシスは謙だつて言つた、彼は知らざるものであつて、それゆゑに聖書の意味について答へるよりも、むしろその人から敎へらるべきものであると。そのときその師は謙だつて言葉をつづけた、「兄弟よ、私はこの文の解釋をあまたの知識ある人々から聞きました、けれど私はあなたのこれについてのさとりを學びたく思ひます。」

それゆゑに祝福せられたるフランシスは言つた、「もしもこの言葉をひろく解すべきものとすれば私はこのやうに取る、すなはち神の僕たるものは生活と聖とき行ひによつてみづからのなかに燃えそしてかがやき、そして彼の範例の光とそして彼の語る聖とき言葉によつて彼はすべての邪しまな

るものを改むべきである。私は謂ふ、このやうにして彼の輝きとそして彼の譽れの薫りはすべての人々に彼らの罪過を告げ知らすであらう。」

そしてそのやうにしてその博士は、大いに德を建てられてそこを去りつゝ、祝福せられたるフランシスの伴侶たちに謂つた、「私の兄弟たちよ、純潔と靜觀とに築かれたるこの人の神知は飛び翔れる鷲である、しかるに私たちの學は地のうへに腹這ふばかりである。」

五十四

祝福せられたるフランシスは彼の子どもたちがすべての人と和らぎ、そしてすべての人のまへにみづからをひくゝしてもつことを欲した。けれど彼はことに司祭職の人々に對して謙だることを彼らに言葉をもつて敎へ、そして模範をもつて示した。彼はつねに謂つた、「私たちはたましひたちの救はれのために司祭職の輔けとして遣はされたるのである。そしていかなることにても彼らに缺けてゐるものは私達によつて補はれなければならない。けれど各々はその酬いを、その權威に由つてならず、たゞその行ひによつて、得るであらう。知れ、兄弟たちよ、たましひたちを得ることは神にも

つともよろこばしきことである、そしてこのことを私たちは司祭職たちと背くことによつてよりも和らぐことによつてたやすく成しうるのである。けれどもしも彼らが民たちの福祉を妨げるならば、報復は神のみこゝろであつて、そして神はその時のいたるとき彼らに報いたまふであらう、そしてそれゆゑにおまへたちは上みなる人々に従へ、またおまへ達のあひだに悪しき嫉みを起してはならない。それはもしもおまへ達が平和の子らであるならば、おまへたちは司祭職たちと民たちのこゝろを得るであらう、そしてこれは司祭職たちを亂してたゞ民のみを得るよりも神に適ふことである。

「されば」、彼は言つた、「彼らの過ち、彼らの缺くところを蔽ひそして補へ、そしておまへたちがこれをなしはてたとき、おまへたちはそれだけひくゝあれ。」

五十五

祝福せられたるフランシスは、神の意志が彼の兄弟たちの數を増すことを欲したまふのを見て、彼らに言つた、「愛する兄弟たちしかして小さき子どもたちよ、私は主が私たちの數を増さうと欲したまふことを知る、されば私にはかやうにすることが善くそして敬へにかなふやうに思はれる、すなはち私たちは、サン・ルッフィノの寺法家(カノニチ)たちもしくはサン・ベネデットのアバテからいづれかの會堂を受けて、そこで兄弟たちが時の祈りをなしうるやうにし、そして兄弟たちが眠りそしてはたらくところとしてその近くに小さい貧しき小家を泥と木の枝をもつて造らう。このところは兄弟たちに適はしからずまた十分でない、そしてことに主は兄弟たちを増すことを欲したまひ、そしてまたこゝに私たちは兄弟たちが祈をなすべき會堂をもたないのであるから。そしてもしも兄弟のうちに死ぬものがあるとき、彼をこゝに葬むることは適法でなく、また世間の司祭職の會堂に於いてするのも宜しくない。」

そしてこの言葉はすべての兄弟たちを歡ばした。

彼はそれゆゑにアッシジの司教のもとに行つた、そしてまへに曰はれたる請願を彼のまへにのべた。これにむかつて司教は言つた、「兄弟よ、私はおまへに與へることのできる會堂をもつてゐない」そして寺法家たちもまたおなじことを答へた。

そのとき彼はモンテ・スバジオのサン・ベネデットのアバテのところに行き、そしておなじ提議を彼のまへにのべた。しかしながらアバテは、同情にうごかされて、彼の僧たちと相談し、そして神の恩寵と御旨もそれにあづかつてはたらいたために、祝福せられたるフランシスと兄弟たちにボルチ

ウンクラのサンタ・マリアの會堂、すなはち彼らのもつてゐたもつとも小さき、もつとも貧しき會堂を與へた。そしてアバテは祝福せられたるフランシスに言つた。「見よ、兄弟よ、私たちはおまへの乞ふところを容れた。けれどもしも主がこの集まりを増したまふならば、私たちはこのところがすべておまへの處の首であるべきことを欲する。」

そしてこの言葉は祝福せられたるフランシスとそして彼の兄弟たちとをよろこばした、そして祝福せられたるフランシスは兄弟たちに讓られた處について大いに歡んだ、それはことに會堂の名、すなはちキリストの母君の御名のためであり、そしてまたそれがそのやうに小さき貧しき會堂であることと、そしてまたそれがポルチウンクラ(小さき地)と名づけられて、その名に於いてそれが貧しき小さき兄弟たちの首であり母であるべきことが示されてゐるからであつた。即ちその堂はポルチウンクラと呼ばれてゐた。それはその敷地がまへに「小さき地所」と呼ばれてゐたからであつた。

されば祝福せられたる父はしば〳〵言つた、「主の御旨によれば他に一つの會堂も兄弟たちにあたへらるべきでない、そして最初の兄弟たちはいまゝでとおなじく新しき會堂を建てず、またこれのほかに他の堂を受けてはならないのである、その故は、こゝに、小さき兄弟たちの起つたことによつて、ある豫言が滿たされたのであつたからである。」

そしてその堂は貧しくそしてそのとき壞られてゐたけれど、永いあひだアッシジ市の人々とその君たちのすべての人々はその會堂にむかつて大いなる敬服をいだいてゐた、そしていまは彼らはより大いなる尊信をもち、そして日に日にそれは加はつてゆくのである。されば兄弟たちがそこに往つて棲んだときから、たゞちに主は彼らの數をほとんど日ごとに増し加へ給うた、そして彼らの譽れの芳しさは妙へにふしぎなるばかりスポレトの谷とそして國のあまたの縣にひろまつた。けれどむかしはそれはサンタ・マリア・デリ・アンジェリと呼ばれてゐた、それは、語りつたへらるゝごとく、そこには天使たちと〔そして天つ國よりきたるたましひたち〕の歌の聲が〔そのところにくる人々によつて〕しば〳〵聞かれたからであつた。

そしてアバテと僧たちとがこの處をこゝろよく祝福せられたるフランシスと彼の兄弟たちに與へたけれど、なほ、祝福せられたるフランシスは、賢こきそして慮かりある主人のごとく、彼の家すなはち教への團體がかたき磐石のうへに、即ちすぐれて大いなる貧しさのうへに築かれることを欲したので、年ごとにかのアバテと僧たちに一籠の小魚を大いなる謙だりと貧しさとのしるしとして贈つた、それは兄弟たちは己のが有なる處をもたず、また他人の用地内にあらざるところに棲家をもたず、いかなる仕方に於いても兄弟たちはそれを讓りうける力をもたないやうにしてゐた。け

れど兄弟たちが年ごとに小魚を僧たちに送つたとき、彼らはこれを己のが心から爲す祝福せられたるフランシスの謙りのために、兄弟たちに油を滿たした甕を贈つた。

まことに祝福せられたるフランシスとともにあつた私たちは證しする、この會堂について、彼はみづから確かめて言つた、主がこゝにて彼に示された殊なる惠みはあまたあつたが、このところに於いて彼には、祝福せられたる聖處女のよろこびたまふ世界の諸ろの會堂のすべてのうちで、この堂こそ彼女にもつともいとしく愛されるのであることが示された。そしてそれ故にそのゝち彼はそれに對してもつとも大いなる尊信と敬虔をいだき、そして兄弟たちがそれについての記憶を心に抱くべきために、彼は死ぬるときに彼の遺言のうちに、兄弟達はみなしかすべきことを書かしめた。

されば、彼の死ぬるころに、ミニストロ・ジェネラレとそして他の兄弟たちのゐるところで、彼は曰つた「ポルチウンクラのサンタ・マリアの處をば私は兄弟たちに遺言狀をもつて讓りそして委ねやうと思ふ、そしてそれによつてその處は兄弟たちに大いなる敬虔と尊信をもつてうやまはれるであらう。」

まことに、そのことを我々の昔の兄弟たちは爲した、されば、その處は聖とくそしてキリストと榮えの處女の君によつて擧げられてあつたとはいへ、なほ彼らはその聖とさを恒なる祈りと沈默に

よつて晝も夜も怠らず護つた。そしてときとしてもしも無言の時と終禱のあとで物語りするときときには、彼らはたゞもつとも大いなる敬虔と愼しみをもつて神の讃へとたましひの救はれに關はることをのみ語つた。そしてもしも何人かゞむなしき言葉を語りはじめたときには、かゝることの起るのは稀れであつたが、かゝる人はたゞちに他の兄弟によつて匡された。

そのうへ彼らはあまたの斷食と寒さと裸かと、そして彼らの手の勞働をもつて彼らの肉を殺いだ。あまたゝび彼らは惰らざらむために貧しき人々の野の仕事を助け、そして彼らに神の愛のためにそのパンを與へられた。これらとその他の善き行ひによつて彼らはこの處を充たし、そして彼らみづからを聖とく守つた。けれどそののちにこのところにふさはしからず集まつてきた兄弟たちと俗の人々のために兄弟たちさへも彼らのむかしの慣はしより祈りと德の行ひに於いて冷淡に、そしてさらに怠慢にそして懶惰であり、益なき言葉と世のなかのうはさを語ることに耽つてゐるために、その處みづからも、それがかつて慣はしであり、そしてはじめの兄弟たちがあらまほしく欲したほどそのやうに大なる崇敬と尊信をもつて重んぜられてはゐないのである。

祝福せられたる父がさきに曰はれたるこれらの言葉を謂つたときに、たゞちに大いなる熱情をもつて彼は結論した、そして言つた、「私は欲する、この處はつねに直接に長にして僕なるジェネラレ

のもとにあるべく、それは彼がこのところに一つの善きそして聖とき家族を養ふにより大いなる細心と勤勉とをもつてすべきためである、長職たちはよりよき、より聖とき、しかしてより適はしき兄弟たち、全團體のうちでもつともよく祈禱を唱へうる人々のうちから選べ、それによつてたゞに俗の民たちのみならず他の兄弟たちもまたよろこんで、そして大いなる敬虔をもつて彼らを見、そして聞くことをねがふであらう。けれど在俗の兄弟たちについては、思慮ふかき、謙だれる、正しき人々を選びそして彼らに仕へしめよ。私はまた欲する、そのところにはジェネラレなる長職とそして彼らに仕ふる兄弟たちのほかいかなる兄弟も、〔そしていかなる女も〕入つて行つてはならない、そして在俗の兄弟たちは彼らに仕ふる兄弟たちとそして彼らを訪れたる長職のほか何人とも語つてはならない。私は欲する、おなじく、彼らに仕ふるところの在俗の兄弟たちみづからも彼らにむかつて益なき言葉、または世のなかの噂さ、そのほか彼らのたましひに益なき言葉を決して語つてはならぬ。そしてこのことのために私はことに欲する、何人もその住處に入つてはならない、そして彼らはそれだけたやすくその住處の純潔と聖とさとをたもちうるであらう、そして私は欲する、その處に於いては何ごとも益なく爲されまたは言はるゝことなく、たゞその處はわれらの主の讃歌と譽れに於いて潔く聖とく保たれよ。そしてこれらの兄弟たちのうちにこの處から主のみもとへと去

るものがあれば、彼の代りたる他の聖とき兄弟が、その人はたれであつても、そこに長職によつて遣はされなければならない。

「さればもしも他處に於いて他の兄弟たちが何ほどか純潔と善より墮つることがあらうとも、私は欲する、この處は祝福せられてあれ、そしてそれがとこしへに全たき團體の鏡として、そして全き模範としてとゞまらむことを、そして神と聖とき處女の君の御座のまへなる燭臺のごとくに、つねに燃え、そして輝いてあらむことを。

「かゝることのために主はすべての兄弟たちの過ちと缺くところについて惠みを垂れたまひ、そしてつねにこの團體、彼のこのなよやかな草をさゝへそして守りたまはむことを。」

五十六

あるとき彼がボルチウンクラのサンタ・マリアに住んでゐたとき、そしてまたたゞすこしの兄弟たちのほかなかつたころに、祝福せられたるフランシスはアッシジの近くにある村々やその會堂を巡つて、人々に贖罪をなすべきことを警しめ宣べそして說敎しつゝ行つた、そして彼は清からぬ會堂

を掃ききよめるために箒をたづさへてゐた。

それはいかにとなれば、聖とき父は彼の希ふほどに清められてゐない會堂を見るごとにいたく悲しんだからであつた。そしてそれ故に説教が終つたときには彼はつねにそこにゐるすべての司祭職たちをとこか離れたところに集めて、俗の民たちに側へ聞きされることを慮りつゝ、彼らにむかつてたましひたちの救ひについて、そしてことに彼らが會堂と祭壇、そしてすべて神の聖とき神祕を祝ほぐために設けられてあるものを清きらかに保つやうに心を用ふべきことを説教した。

五十七

けれど彼がアッシジの市に屬するある村に行つたときに彼は會堂を謙だつて掃きそして拭ひきよめはじめた。そしてたちまち彼の噂は村中につたはつた、それは人々は歎んで彼を見、そしてさらに歎んで彼の言葉を聞くからであつた。そしてある驚くべく單純なる農夫、名はジョヴンニといふものが己れの畑を耕しつゝあつて、このことを聞いたときに、彼はたゞちに聖フランシスのところに行つた、そして彼が會堂を謙だりをもつてそして恭しく掃ききよめてゐるのに遭つた。そして彼は

彼に言つた、「兄弟よ、私にその箒を下さい、私はおまへに手傳はうと思ふから。」そして彼の手から箒を取つて、彼は殘りのところを掃いた。

そして彼らがともにすわつて休んだときに彼は祝福せられたるフランシスに曰ふ、「兄弟よ、いまで永いあひだ私は神に仕へようと思つてゐた、そしてことにおまへとおまへの兄弟たちのうはさを聞いたのちそのこゝろをもつてゐた、けれど私はどうしておまへのところに行つていゝかを知らなかつた。それであるから、いま私がおまへに遭ふことが主の御旨にかなつたのであるから、私は何ごとでもおまへのこゝろにかなふことをしようと思つてゐる。」

けれど祝福せられたるフランシスは、この熱心を見、そして主に於いて歎んだ、ことにそのときには彼はまたすこしの兄弟たちをもつのみであり、そしてその單純なるこゝろと純潔をもつてこの人がよき兄弟となるべく思はれたからであつた。

けれど彼は彼に曰つた、兄弟よ、もしもおまへが私たちの生活をし、仲間とならうと思ふならばおまへはすべておまへが他を害ふことなくしては所有することのできないやうなものをすてゝ、そしてそれを貧しき人に與へなければならない、それは聖とい福音の教へによるものであり、そして私の兄弟たちはその能ふものはみなおなじことをなしたのであるから。」

彼はこれを聞いたときたゞちに彼がさきに彼の牛の群を殘してきた野に行つて、そして彼らを解き放ち、そしてそのうちの一頭を牽いて祝福せられたるフランシスのまへにきて、そして謂つた。

「兄弟よ、多くの年月のあひだ私は私の父とそして私の家の人たちのすべてのために働いた、そしてこれは私の相續するものゝうち少しであるけれど、私はこの牡牛を私の分けまへとし、そしてあなたにもつとも善しと考へられるやうにして貧しき人に與へよう。」

けれど彼の親たちとそしてまだ稚ない兄弟たち。そして彼の家のすべての人々は、彼が彼らから去らうと欲してゐるのを見ていたく泣きはじめ、歎きと共にかなしいさわがしさを叫びはじめた。祝福せられたるフランシスはそれを見て憐れみにうごかされた、それは、一つの多人數な家族でそして貧しく弱きものであつたからであつた。

そして祝福せられたるフランシスは彼らに曰つた、「私たちみんなのために宴を設けよ、そして私たちはみなともに食べよう、そして泣くなかれ、私はおまへたちを眞に歡ばしくするであらうから。」

そのやうにして彼らはたゞちに食を設けた、そしてすべての人はともに大いなる歡こびをもつて食べた。そして食事のゝちに祝福せられたるフランシスは曰つた、「この人、おまへたちの息子は、神に仕へることを願つてゐる、そしておまへたちはこのことについて悲しむよりはむしろ歡ぶべき

である、いかにとなればたゞに神のためにのみならず、またこの世の生命についても、神がおまへたちを一人の肉親をもつて譽れあらせたまふことは、おまへたちにとつて大いなる譽れとそしてたましひと肉體の利益として讃へられるであらう、そして私たちの兄弟たちはみなおまへたちの子どもらであり兄弟たちであるであらう。そして彼は神の創られたものであり、そして彼の創り主に仕へようと欲してゐる、創り主なる神に仕ふることは治むることである、私は彼をおまへたちに返すことはできない、また返すべきではない、しかしながらおまへたちが彼について心を安んずるために私は彼が牡牛を貧しき人に與へるものとしておまへたちに與へることを欲する、それは彼は福音の敎へにしたがへばそれを他の貧しき人に與へるべきであるけれど。」

そしてすべての人は祝福せられたるフランシスの言葉によつて慰さめられた、そしてことに彼らは牡牛のことで悅んだ、それはそれが彼らに返され、そして彼らははなはだ貧しかつたからであつた。

そしてこの人のこゝろに於ける、そして他の人々に於ける純なる聖とき單純さが大いに祝福せられたるフランシスを悅ばせたので、彼はたゞちに敎への服をもつて彼に着せ、そして彼を伴侶として謙だりをもつて伴つて往つた。彼は祝福せられたるフランシスが爲すすべてのことに倣はなけれ

ばならないと信じたほどそれほど大いなる單純さをもつてゐた。されば祝福せられたるフランシスが祈りするためにどこかの會堂かまたはいづれかのところに立つときに、彼はまたそれを見ることを欲した、そして彼のすべての行ひとふるまひに於いて聖とき父と同じくあらうとするのであつたそのやうにしてもしも祝福せられたるフランシスが膝を屈め、あるひは手を空に擧げ、あるひは唾し、あるひは歎息するとき、彼みづからもすべてこれらのことを同じ仕方で爲した。けれど祝福せられたるフランシスがこれに心づいたときに彼は大いなる歡びをもつて、このやうな單純さについて彼を咎めた、それにむかつてジョヴンニは答へた、「父よ、私はすべておまへのすることをしようと約束した、そしてそれゆゑに私はすべてのことについておまへと同じくならなければならぬ。」

そしてこれについて祝福せられたる父は、彼がかやうに無垢に單純なるを見ておどろきそして歡んだ。けれど彼はのちに祝福せられたるフランシスと他の兄弟たちがその完全を見て大いにおどろいたほどまで進みはじめた。そしてしばらくののちに彼は德の聖とき道に於いて死んだ。されば のちに祝福せられたるフランシスはこゝろと肉體のよろこびをもつて兄弟たちのあひだで彼の悔い改めについて語り、彼をフラテといはずして聖者ジョヴンニと名づけるをつねとした。

五十八

けれど祝福せられたフランシスは、ポルチウンクラのサンタ・マリアの堂に歸つてきたときに單純なるフラテ・ヤコボが一人のいたく潰瘍した癩病人とゝもにゐるのに遭つた。祝福せられたるフランシスは癩病人とすべて他の病人たちを彼に委ねたのであつた、それは彼があだかも彼らの醫師であるかのやうであつたからであつた、そして彼は彼の傷や腫物にこゝろよく觸り、そして彼らを洗ひ、そして彼らの世話をした、それはそのとき兄弟たちは癩病の病院に宿つてゐたからであつた。

聖とき父はそれゆゑにあたかも彼を咎めるやうにフラテ・ヤコボに曰つた、「おまへはこのキリストの人々（Christiani）を連れだしてはいけない、それはおまへのためにも彼らのためにもよきことではないから。」それはいかにとなれば、彼は彼らのために働くことを願ひとしてゐたけれど、しかしながら彼は、人々がかゝるものを忌み嫌ふ慣ひであつたゝめに、重く病める癩病人を病院からそとにつれだすことを好まないのであつた。そしてフラテ・ヤコボその人は、つねに彼らとともに病院からポルチウンタ・ラのサンタ・マリアの堂まで、あだかも兄弟たちとつれだつて行くとおなじやうに、つれだつて行くことをこゝろとしないほど單純であつた。そして聖フランシスはつねに癩病

人たちをキリストの兄弟たちと呼んでゐた。

そして彼がこれらのことを語つたときに、祝福せられたるフランシスはたちまち彼みづからを責めた、そしてその癩病人が彼のフラテ・ヤコボに投げかけた譴責によつて恥辱をあたへられたのであると信じた。そしてそれ故に神とそして癩病人とに對して、和解することを欲して、彼はおのが過ちをそのときミニストロであつたフラテ・ピエトロ・デ カッタニに語つた。

そして彼は言つた、「私は欲する、おまへは私がこの過ちのために爲すべく選んだ贖ひを私のために保證せよ、そしておまへはどんなことがあつても私に拒んではならない。」彼は答へた、「兄弟よ、あなたの好むごとくに爲されよ。」フラテ・ピエトロはよく彼を敬ひそして畏れてゐた。それゆゑ彼は彼の命を拒むことを敢へてしなかつた、けれど彼はしばしばそれがために憂ふることがあつた、そのとき祝福せらたる父は言つた、「これが私の贖ひである、すなはち、私は私のキリストの兄弟とともに一つの皿から食べよう。」

それゆゑに祝福せられたるフランシスが癩病人とそして他の兄弟たちとゝもに食卓にすわつたときに一つの皿は聖フランシスと癩病人とのあひだに置かれた。けれど彼は全身潰瘍していぶせきものであつた、そしてことに彼の手の指は缺けて血が流れ、それをもつて彼が皿から食物を撮まむとき

にその手を皿に入れるごとに血とそして指の物質とがそのなかに流れ落ちた。そしてこれを見てフラテ・ピエトロと他の兄弟たちはいたく悲しくされた、けれど聖とき父に對する畏れと崇敬のために敢へて何ごとも口に出さなかつた。それを目睹した人がこれを書いたのである、そして書いた人はこれらのことについて證しをもつものである。

五十九

あるとき祝福せられたるフランシスがスポレトの谷なるトレヂの城に近いところのサン・ピエトロ・ディ・ボヴラの會堂に行き、そして彼とゝもにフラテ・パチフィコが行つた、この人は俗の世では歌の王と呼ばれてゐて貴とき、そして皇帝の宮廷に屬した歌の師であつた。

けれどその堂は人なく荒れてゐた、そしてそれゆゑに祝福せられたる父はフラテ・パチフィコに謂つた、「おまへは癩病の病院に歸れ、私は今夜はひとりこゝに留まらうと欲する、そして明日は朝はやく私の許にきたれ。」

けれど彼がひとりそこに殘され、そして聖の祈禱とその他の祈りを唱へたあとで、彼がしづかに

落ちつきそして眠らうと思つたときに、しかしながらそれはできなかつた。その故は、彼のたましひは恐れ、そして惡魔のさゝやきを感じはじめた、そしてたちまち彼は堂のそとに出てそして十字のしるしをなし、そして言つた、「全能の神の御名に於いて私は汝らに言ふ、惡魔どもよ、汝らは私の肉體のうへに、主イエス・キリストによつて汝らに爲すべく許されたるいかなることをも爲せ、私はすべてのことに堪へよう。私が私の肉體を私のもつとも大きなる敵となすゆゑに、おまへたちはたゞ私の敵、私のもつとも惡しき仇に、私のために報いるばかりである。」そしてたちまちそれらのささやきはすべて止んだ、そして彼が臥してゐたところに歸つてきて、彼は安らかに眠つた。

六十

けれど朝となつたときにフラテ・パチフィコは彼のもとに歸つた。彼はそのとき祈りしつゝ祭壇のまへに立つてゐた。そしてフラテ・パチフィコは歌唱伴のそとにゐて彼を待ち、一つの十字架のまへでおなじやうに祈つてゐた。

そして彼が祈りはじめたときに、彼は擧げられそして天につれ往かれた、それが肉體に於いてゞ

あつたかまた肉體をはなれてか、それはたゞ神のみ知る。そして彼は天に於いてあまたの座席を見た、それらのなかに彼は他のものよりも著しくそして、ほかのものに優つて榮えあり、輝やかしくそしてありとあらゆる貴とき寶石をもつて飾られた一つの座を見た。そしてそれの美しさを眺めつつ彼はこゝろのうちで何人にその座が屬するかをあやしみはじめた。そしてたちまち彼は一つの聲が彼に謂ふのを聞いた、「これはルチフェルの座であつた、そして彼のかはりに、賤しきフランシスがすわるべきものである。」

そして彼がみづからに返つたときに、祝福せられたるフランシスはたゞちに彼の方に出てきた、その足もとにフラテ・パチフィコは腕をのばして十字架のかたちしてひれふした。そして聖フランシスがすでに天つ國にかの座にすわつてゐるかのやうに彼を仰ぎみて、彼に曰つた「父よ、この惠みをあたへて下さい、そして主が私のうへにめぐみをもちたまふやうに、そして私の罪を赦したまふやうに主にとりなして下さい。」

けれど祝福せられたる父は手をのばして彼を扶け起した、そしてたゞちに彼が祈りのあひだに何ごとかを見たことを識つた。それは彼はあだかもまつたく貌を變へたごとく見え、そして祝福せられたるフランシスにむかつて、肉に於いて生ける人のごとくならずたゞすでに天つ國に領せる人のご

とくに語つたからであつた。けれど、彼はその異象を祝福せられたる人に語ることを欲しなかつたので、彼はあだかも遠きところからくるごとき言葉を己れみづからと語つた、そして他のことのあひだに、彼は彼に謂つた、「あなたはあなたみづからをいかに思ひます、兄弟よ？」

祝福せられたる父は答へて彼に言つた、「私には私が全世界にあるたれよりも大いなる罪人であるやうに思はれる。」そしてたちまちそれはフラテ・パチフィコのたましひに示し現はされた、「このことによつてなんぢはなんぢの見た異象が眞實であつたことを知ることができる。ルチフェルがその驕慢の故に彼の位置から逐はれたるごとくに、そのやうにフランチェスコはその謙だりの故に擧げられそしてそこにすわる德があることを。」

六十一

けれどあるとき彼があるはなはだ重い病からすこしく健かになつたときに、たとへ彼はたゞすこし食したのみであつたけれど、その病ひに於いて彼がいくらかの容赦をしたやうに彼には思はれた。

そしてある日起きあがつて、彼はまだ三日熱がまつたく癒えて去らなかつたにかゝはらず、アッシジの市の民たちを說敎のために市場に集まらしめた。けれど說敎が終つたときに彼は彼がふたゝびそこにくるまでは何人もそこから立ち去つてはならないと告げた。そしてあまたの兄弟たちと、そしてその會堂のカノニコであつて聖フランシスによつて最初のミニストロ・ジェネラレに選ばれたピエトロ・ディカッタニとゝもにサン・ルッフィノの會堂に入つて、そして彼はそのフラテ・ピエトロに、從順の德の名に於いて命令したうへで、フラテ・ピエトロが彼の曰ふことがいかなることであつてもそれを拒むことなく行へと語つた。

フラテ・ピエトロは彼に答へた、「兄弟よ、私は、あなたの好むごとくするほかに、あなたと私については何ごとも行ふことはできませぬ、また爲すべきでなく、また欲しませぬ。」それゆゑに、おのが衣服をぬぎすてゝ祝福せられたるフランシスは彼みづからを民たちのまへで赤裸かのまゝに、一すぢの繩を首に繫いで、彼が說敎したところまで牽いてゆくことをフラテ・ピエトロに乞うた。彼は他の一人の兄弟には、その人が灰を盛つて皿をたづさへて、彼の說敎したところまで往き、そして彼が、そのところまで牽かれてくるときにその灰を彼の顏のうへに投げつけるやうにと請うたけれど、後者はこのことについて彼が聖とき父に對してうごかされた同情のためにこの命にしたがはな

かつた。

そしてフラテ・ピエトロは彼の首にかけた繩をとつて、彼が命じたごとくに己れのうしろに彼を牽いて行つた。けれど彼はいたく泣いてゐた、そして他の兄弟たちも彼とゝもにいたましさと苦しさの涙をながした。

彼がこのやうにして赤裸かですべての人々の見るまへで彼がさきに說敎したところまで引かれて行つたときに彼は曰つた、「おまへたち、そしてすべて私のためにしたがつて世のなかを離れて敎へとそして兄弟たちの生活に入る人々はみな私を聖とき人であると信じてゐやう、けれど私は神とおまへたちとに懺悔する、私はこの病ひのあひだに肉とそして肉より造つた汁とを食べたのである。」

そして人々はみな大いなるいたましさと憐れみのために彼について泣きはじめた、ことにそれはそのとき冬であつて霜がきびしく、そして彼はまだ三日熱から癒えてゐなかつたからであつた。そして彼らは胸をうつて彼らみづからを責めた、そして謂つた、「もしもこの聖者が、その聖とき生活を私たちも知り、そして彼が肉體に於いては、彼がキリストのみちに入つたはじめから肉體に加へたる禁欲と嚴格のためにほとんど死ねるがごとくに生きつゝあることをも知る、その人が正しきそ

して明らかなる必要のためにしたことをも、彼の身のそのやうな辱しめをもつて責めるならば、私たちは、この生活のすべての時を肉體の欲にしたがつて生ききたりそしてなほも生きようとする私たち罪あるものどもは、何をすべきであらうか？」

六十二

おなじやうにあるとき彼がある隱者小屋にゐたとき聖マルチノの精進のあひだに豚脂をもつて料理した菓子をたべた、それは彼の病氣には油ははなはだ害があるためであつた。精進の季節が終つて、彼が一つの大いなる群集にむかつて說敎すべきことゝなつたときに、彼は人々にむかつて、彼の說敎の最初の言葉に於いて曰つた、「おまへたちは大いなる尊敬をもつて私のとこへくる、そして私を一人の聖とき人であると思つてゐる、けれど私は神とおまへたちと懺悔する、私はこの精進のあひだに豚脂をもつて料理した菓子をたべたのである。」

いな、これのみならずほとんどいつでも彼が在俗の人々とゝもに食したときまたは彼の病ひのために兄弟たちから何らかの肉體の慰安が彼れにあたへられたときには、たゞちに家のなかでもそと

でも、それを知らない兄弟たちまたは在俗の人にむかつて、彼は公けに曰ふのをつねとした、「私はこれ〳〵の食物をたべた。」それは彼が神のまへにあらはに置かれたることを人々のまへに隠すことを欲しないからであつた。

またおなじやうにしていかなる團體の人または在俗の人のゐるところでも、彼のこゝろが誇りまたは驕りたかぶること、またはその他の過ちにうごかされたときには、彼はたゞちにそれを人々のゐるところで、公けに、蔽ふことなく懺悔した。されば彼はあるとき彼の伴侶たちに曰つた、「このやうにして私は隠者小屋に於いてもそしてその他の私の棲むところでも、あらゆる人々がみな私を見ることができるやうにして住んでゐたい。もしも彼らが私を一人の聖者であるごとく信じ、そして私が一人の聖とき人にふさはしき生活をなさゞるならば、私は偽善者であるにちがひない。」

そしてそのやうにして脾の衰弱とそして胃の冷えのために、彼の守人であつた一人の伴侶が脾と胃にあたるところに彼の上衣の下に小さい狐の毛皮を縫ひつけやうと思つたときに、ことにそこではそのときはげしい寒さであつたが、聖フランシスは彼に答へた、「もしもおまへは私が着物の裏に狐の皮を當てゝゐることを欲するならば、おまへはその毛皮の一枚を外側にも縫ひつけなければならぬ、さうすれば何人もこれによつて私が裏に狐の皮をあてゝゐることを知るだらうから。」そして

彼はそのやうになさしめた。けれど彼は、彼にとつてそれははなはだ必要であつたらうけれど、それをあまり着なかつた。

六十三

彼がアッシジの町をとほつて行つたときに一人の貧しき老いたる女が神の愛のために彼に一つの施しを乞うた。そして彼はたゞちに彼女に彼が背に被てゐた外套をあたへた、そしてたゞちに躊躇することなく彼は彼に從つてきた人々のゐるまへで、いかに彼が高ぶるこゝろをもつたかを懺悔した。

そして私たちはこれらに似た彼の最も大いなる謙りのためしをほかにあまた見そして聞いてゐた、そしてつねに彼とゝもにゐた私たちは言語をもつてしても、文字をもつてしてもそれを說きあかしがたきばかりである。そして祝福せられたるフランシスが彼のもつとも重くそしてもつとも高き務めとしたことは彼が神のまへに偽善者とならざることであつて、そして彼の屢ばなる病氣の故に彼に對しては容赦が必要であつたにかゝはらず、けれど彼はつねに兄弟たちや他の人々によき範例

を示すべくこゝろにかけて、されば彼はあらゆる乏しさを堪へ忍んで、それによつてすべての人からうらみの機會を取り去つた。

六十四

集會（カピトル）の時が近づいてゐたときに、祝福せられたるフランシスは彼の伴侶たちに曰つた、「私がこゝにおまへたちに語るやうな狀態にみづからあるのでなければ、私は小さき兄弟であるやうに思はれない。

「見よ、兄弟たちは大いなる敬虔をもつて私を集會に招く、そして私は彼らの誠に動かされて彼らとともに集會に行く、けれど彼らは、ともに集まつて、彼らに神の言葉を宣べそして彼らに說教せよと私に乞ふ。そして起ちあがつて私は聖靈が私に敎へるまゝに彼らに說敎する。それ故に私の說敎を終るときにすべての人は私に向つて叫びだす、「我々は汝が我々のうへに治むることを欲しない汝は價するほどの辯舌がなく、そして汝はあまりに無學でそして無知である。そして我々は我々の上にそのやうに無學なる、賤しまるゝ首をもつことをいたく恐れる、さればこれよりのちは汝みづ

からを我々の長職と呼ぶこととを敢へてするな！」そしてそのやうにして彼らは批難と譴責をもつて私を逐ひ下す。

「もしも彼らが私を責めそして辱しめをもつて逐ひ私が彼らの長職であることを欲しないといふときにも、あだかも彼らが私を敬ひそして譽めるときのごとくに、いづれのばあひに於ける彼らの利益と德をも考慮して、おなじほどに歡こぶことがなかつたならば私が一人の小さき兄弟ではないかのやうに思はれる。その故は、もしも彼らが私を擧げ敬ふときに彼らの德と敬虔のために歡ぶならば、そのときにはまだ私のたましひにとつて危險があるであらう。彼らが私を罪するとき、そこには私のたましひのためにいくらかの獲るところあるべきとき、いかばかりか私は私のたましひの德と祝福のために歡こび喜ぶべきである。」

六十五

あまたの兄弟たちがそこから海のかなたのいくつかの縣に遣はされた集會が終つたときに、祝福せられたるフランシスはいくたりかの兄弟たちとゝもに留まりながら、彼らに曰つた、「愛する兄弟

たちよ、私としてはすべての兄弟たちの型でありそして例であることがつとめである、それゆゑにもしも私が兄弟たちのいくたりかを遠いところへ遣はして辛苦や恥辱や餓ゑや渇きやその他の艱みを堪へしむるならば、私もまたおなじやうにどこか遠いところに行くことが正しく、そして聖ときの謙りの欲するところである、さうして兄弟たちは私がおなじ苦しみを忍んでゐると聞くならば艱みに於いてさらに強く堪へ忍ぶことができやう。されば往け、そして主に彼が彼の讃へとたましひたちの福祉とそして私たちの團體のよき範例としてもつともふさはしかるべき縣を選びあたふやうになしたまはむことを祈れ。」

もつとも聖とき父の慣はしとして、彼がいづこかの縣に行かうと欲するときには、まづ主に祈りそして兄弟たちにも祈らしめて、主が彼のこゝろを主にもつとも好ましきところに向けたまふことをもとめた。それゆゑに兄弟たちは往つて祈つた、そしてそれが終つたときに彼らは彼のもとに歸つてきた。そしてたゞちに彼は彼らに謂つた、「私たちの主イエス・キリストと榮えある母君處女マリア、しかしてすべての聖者たちの御名に於いて、私はカトリカの民の住むフランスの邦を選ぶことにその故は他のすべてのカトリカのあひだで彼らはキリストの聖體に對して殊なる敬虔を示す、そのことは私に大いに悅ばしい、それ故に私はもつともよころんで彼らと交はりたいと思ふ。」

聖とき父はキリストの聖體についてかばかり大いなる尊敬と敬虔をもつてゐた、すなはち彼は掟のなかに書かしめやうと欲した、兄弟たちがその留まるところの縣に於いてこれについて注意と心がけをもつべきこと、そして彼らはキリストの聖體をよきそして嚴そかなるところに藏めるやうに僧や司祭たちに戒しめ、そしてもしも彼らが怠つたならば兄弟たちがそれをなすべしといふことであつた。

彼はまたこのことを掟のなかに置かしめようと欲した、すなはち何處に於いても兄弟たちが主の御名または主のみすがたを形づくる言葉が、ふさはしくそしておごそかに置かれてゐないのを見いだしたならば、彼らみづからそれを集めて、そして御言葉に於いて主を讃へつゝ、それを恭しく片よせることであつた。これらのことは、ミニストロたちには、兄弟らがこのことを命令のかたちで受けることは善しと見えなかつたので掟のなかには書かれなかつた、しかしながら彼は彼の願ひを兄弟たちにこのことについて彼の遺書とそして他の文書のなかに殘すことを欲した。それのみならずあるときは彼は兄弟たちにあまたの美しきそしてきよき聖體櫃をもたせてあらゆる邦に遣はさうと欲した、それはいづこでも彼らが主の聖體がおごそかならず置かれてあるのを見いだすときに、彼らはそれを恭しくこれらの聖體櫃に收めるためであつた。また彼はいくたりかの他の兄弟たちに善

きそして新しき錢器をもたせて、美しい、きよらかな聖體のパンを造らせるために遣はさうと欲した。

それゆゑに彼がともに伴はうと欲する兄弟たちを選んだときに、聖とき父は彼らに曰つた、「主の御名に於いてなんぢらは二人づゝ謙だりをもつて恭しく道に往け、そしてことに曉より第三の時のすぐるまでは嚴なる沈默をもつて、なんぢらの心に於いて祈れ、そしてなんぢらのあひだには空なる益なき言葉は名にも現れざれ。たとへなんぢらは歩むとも、なんぢらの語ることはなんぢらが隱者小屋かまたは庵にあるかのごとくに謙遜にそして恭しくあれ。その故は、肉體は私たちの庵である。そして私たちのたましひはその庵のなかに留まつて神に祈り、そして神について思ふ隱者である。さればもしもたましひがその庵のなかで靜けく留まることができないならば、手をもつて造られた庵も彼に益することがないであらう。」

そして彼がフィレンツェに着いたときに、彼はのちに法王グレゴリオとなられたるオスチヤの司教ウゴリノの君をそこに見いだした。彼は祝福せられたるフランシスから私がフランスに赴くことを欲すると聞いたときに、彼の往くことを制止して、そして曰つた、「兄弟よ、私はおまへが山のかなたに往くことを欲しない、それはいかにとなればかしこにはローマの宮廷におけるおまへの伴侶た

ちの幸福を妨げることに熱心なる長職たちがあまたゐる。けれどおまへの團體を愛する私やその他のカルヂナレたちは、もしもおまへがこの縣の境のなかに留まるならばさらに悅んでおまへたちの輔けとなるであらう。」

そして祝福せられたるフランシスは彼に曰つた、「わが君よ、私の他の兄弟たちを遠い國々に遣はしつゝ、もしも私がこの國に留まり、そして彼らが主のために受くべき艱みをわかつ人でないならば、それは私にとつて大いなる恥辱でありませう。」けれど司教はあだかも彼を譴めるかのやうに曰つた、「何故におまへはおまへの兄弟たちをそのやうに遠いところへ、餓ゑに死なせむために、あるひは他の艱みを受け忍ばせるために遣はしたのか！」

祝福せられたるフランシスは大いなる熱つき誠とそして豫言の精神をもつて彼に答へて、そして謂つた、「わが君よ、あなたは主が兄弟たちをたゞこの邦のみのために遣はされたとお思ひになりますか？　けれど私はまことにあなたに曰ひます、神はこの世のすべての人々のたましひの德と福祉のために兄弟たちを選びそして遣はされました、そして彼らはたゞに信ずるものゝ邦に於いてのみならず、異敎の民のあひだでさへも迎へられて、そしてあまたのたましひたちを獲るでありませう。」

そのときオスチアの司敎は彼の言葉におどろきそして彼が眞を語つてゐることを確めた。そして

このやうにして彼は彼にフランスに往くことを許さなかつたけれど、しかしながら祝福せられたるフランシスはそこにフラテ・パチフィコをあまたの他の兄弟たちとゝもに遣はした、けれども彼みづからはスポレトの谷に歸つた。

六十六

ボルコ・サン・セポルクロの上なるある隱者の小屋にはとき〴〵盜人たちがきた、それは森のなかに潜んで旅人たちを害するのをつねとしてゐるのであつた。

そして兄弟たちのあるものは彼らに惠みを與へるのはよくないことであると曰つた、けれど他のものはまた彼らを憐むこゝろから、そして彼らを悔い改めさせようとする心から施しを與へた。そのあひだに祝福せられたるフランシスはそのところにきた、そして彼にむかつて兄弟たちは彼らに惠みをあたへることの正しくあるかを問うた。

そして聖とき父は彼らに曰つた、「もしもおまへたちが私が話すやうにするならば、私はおまへたちが彼らのたましひを收めることができることを主に於いて信ずる。それゆゑに往つてよきパンと

よき葡萄酒をとりきたり、そしてそれらを盜人たちの棲む森まで運んで行け、そして叫んで曰へ、「兄弟たち盜人たちよ、私たちのところに來い、私たちは兄弟たちである、そして私たちはおまへたちによきパンとよき葡萄酒をもつてきてやつたぞ。」彼らはすぐに出てくるであらう、そしておまへたちは地のうちに卓布を敷き、そしてそのうちにパンと酒とを置き、そして彼らの食ひをはるまで謙つてそしてたのしく彼らに給仕せよ。けれど食事ののちにおまへたちは彼らに主の御言葉について語り、そして最後におまへたちは彼らに神の愛のために彼らがこの第一の請求をはたすことを約束するやうに乞へ、すなはち彼らが何人にもそのからだのうへに傷つけずまた害をなさざることを、何となれば、もしもおまへたちがすぐこのことを一度に求めるならば彼らはおまへたちのいふことを聽かないであらうから、けれどおまへたちの謙だりと愛のために彼らはたゞちにこのことを約束するであらう。そのときまた別の日に彼らの善良なる約束に對しておまへたちは彼らのもとにパンと葡萄酒とともにいくらかの卵と乾酪とをもつてゆき、そしておまへたちは彼らが食ひをはるまで給仕し、そして食事のあとで彼らに曰へ、「何故におまへたちはひねもすこゝにゐて餓ゑ死にしようとし、そしてそのやうに多くの苦勞を忍び、そしてそのうへに心と行ひに於てあまたの惡しきことをなし、そのために、もしもおまへたちが主に悔い改めないならば、おまへたちのたましひを

喪ふやうなことをしてゐるか？　むしろおまへたちは主に仕へるがいゝではないか、彼はおまへたちにこの世に於いては肉になくてかなはぬものをあたへたまひ、そして終りのときにはおまへたちのたましひを救ひたまふであらう。」そのときに主は彼らのこゝろに入りたまひ、それによつて彼らに示しておまへたちの謙だりと愛のために彼らは悔い改めるであらう。」

そしてそのやうにして兄弟たちはこれらのことのすべてを聖とき父が彼らに命じたるごとくに爲した、そしてそれらの盜人たちは、神の恩寵と慈しみによつて、兄弟たちが謙りをもつて彼らにもとめたすべてのことを文字どほりにことばどほりに、聞きそして守つた。いな、それのみならず、兄弟たちの彼らに對する謙だりと親切のために、彼らは恭しく兄弟たちに仕へ、兄弟たちの薪を肩に負つて隱者小屋に運んだ、そして彼らのいくたりかはつひに教へに入つた。そして他のものは彼らの罪を懺悔し、彼らの罪のために贖ひをなし、それよりのち彼らがおのが手の勞働によつて生きそして決してふたゝびかやうなわざをなさゞるべきことを兄弟たちの手に於いて誓つた。

六十七

あるとき祝福せられたるフランシスはローマにオスチアの君を訪ふために行つた。そして彼は彼

のもとに幾日か留つたのちにまたカルヂナレなるレオの君を訪うた、この人は祝福せられたる人をことに尊んでゐた。そしてそのときは冬であつて、寒さと風と雨のために徒歩で旅するにはまつたく便なきときであつたので、カルヂナレは彼におのがもとに幾日か留まり、その家に於いて日々食をうけることをつねとしてゐる他の貧しき人たちとともに一人の貧しき人として彼から食物を受けるやうにと乞うた。けれど彼がこのことを曰つたのは、彼は祝福せられたる人がいかなるところに客となつてゐても乞食のごとくに迎へられたることを欲するのを知つてゐたからであつて、カルヂナレたちや法王の君が彼をもつとも大いなる敬虔と尊信をもつて迎へ、そして彼を一人の聖者のごとくに敬まはうと欲してもやめないからであつた。そして彼は言葉を添へて曰つた、「私はおまへに離れた一つの家をあたへよう、そこでおまへはおまへのねがふまゝに住み、そして祈りすることも食することもできるやうにしよう。」

そのときに最初の十二人の一人であつて、またともにこのカルヂナレのもとに留つてゐたフラテアンジェロ・タンクレディは祝福せられたるフランシスに言つた、「兄弟よ、こゝの近くに一つの廣くそして離れたる塔があります、そこであなたはあだかも隱者小屋にあるごとくに住むことができませう。」そして祝福せられたる人がそれを見たときに、それは彼のこゝろになかつた、そして還つてカル

ヂナレの君に曰つた、「わが君よ、あるひは私は幾日かあなたとゝもに留まらうと思ひます。」そしてわがカルヂナレの君は大いに悅ばれた。

そのやうにしてフラテ・アンジェロは行つてそして塔のなかの仕處を祝福せられたる人とその伴侶のために設けた。そして祝福せられたるフランシスが、彼のカルヂナレとゝもに留まるあひだそこから下つてくることを欲せず、また何人もそこにくることを許さないので、フラテ・アンジェロは日々彼とそして彼の伴侶に食物を運ぶことを約束し、そしてそのやうに行はしめた。

そして祝福せられたるフランシスがそこに彼の伴侶とゝもに往つたとき、はじめの夜に彼がそこに眠らうと欲したときに、惡魔たちがきていたく彼を打擲した。そして彼は彼の伴侶を呼んで言つた、「兄弟よ、惡魔どもがいたく私を打つた、そしてそれゆゑに私はおまへが私とともに留まることを欲する、私はひとり留まることを恐れるから。」そしてその夜は彼の伴侶は彼の近くに留まつた。そして祝福せられたるフランシスはあたかも熱病になやむ人のごとくに震へた、それゆゑに二人は夜もすがら護りあかした。

そのあひだに聖とき父は彼の伴侶に言つた、「何故に惡魔どもは私を打つたのか、そして何ゆゑにその私を傷つくる力が彼らに主によつて與へられたのか?」

そして彼はつゞけて謂つた、「惡魔どもは主の警吏である。それはあだかも市長(ポデスタ)がおのが警吏を遣はして罪を犯したものを罰するごとくに、そのやうに私たちの主は警吏たち、すなはちこの世に於いては主の警吏たちなる惡魔どもによつて、主の愛し給ふ人々を匡しそして潔くしたまふのである。あまたゝび完全なる教への人なる人が知らずして罪ををかすことがある、彼がおのが罪を知らざるゆゑに、彼は惡魔たちによつて潔くされる、それによつて彼はこゝろをせめて、うちとそとに彼が過ちせることを見そして顧りみることができる、いかにとなれば主がまことの愛をもつて愛したまふ人々に、彼は何ごとも罰せられずしては殘したまはないのである。けれど神の慈しみと恩寵によつて私が懺悔と償ひによつて改めなかつたことに於いて罪を犯したことを私は知らない、いな、それのみならず、みめぐみによつて神は私にこの賜ものをあたへ給はつた、すなはち私は祈りのあひだに私が主のみむねにかなひまたはかなはざるあらゆることについてあきらかなるさとりをうけることができる。

「けれどそれは主がいま彼の警吏たちによつて私を責めたまふのはこのためであらう、すなはち、たとひ私の君カルヂナレは悅んで私に恩惠を示し、そして私の身にとつてはこの安息をうけることは必要であらうけれど、しかしながら饑ゑやあまたの艱みを忍んで世の中を旅する私の兄弟たち、

そして隱者小屋や貧しき小さき住處に棲む他の兄弟らが、私がカルヂナレの君のもとに住むといふことを聞くときに、彼らはつぶやきうらむ原因をもちそして言ふであらう、「私たちはそのやうにあまたの艱苦を堪へてゐる、しかるに彼は彼の安逸を得てゐる、」と。けれど私はつねに彼らによき範例をあたへなければならない、何となれば私はたゞそのために彼らにあたへられた身であるから。そして兄弟たちは私がほかに在るよりも彼らみづからの貧しき小さき住處に彼らとゝもに在るときにさらによく德に擧げられそして彼らは私もまたおなじことを忍んでゐると聞くときにさらに忍耐つよく彼らの艱みを堪へ忍ぶのである。」

そしてそれゆゑにそれは聖とき私たちの父のもつとも高きそしてたえざるつとめであつた、すなはちすべてこのことに於いてよき範例を彼があたへること、そして彼について他の兄弟たちからいかなる不平の原因をも取り除くことであつた。そしてこの故に、健やかなるときも病めるときにも彼はあまたのことに惱んだ、されば彼の死ぬる日まで彼とゝもにゐた私たちの知れるごとく彼を知つてゐた兄弟たちは、彼らがこれらのことを讀みまたはそれらを想ひおこすたびごとに、涙をながすことをとゞめるあたはずして、そして彼らはすべての彼らの艱みや缺乏をより大いなる忍耐と歡こびをもつて堪へるのである。

それゆゑに祝福せられたるフランシスは朝まだきに塔から下りてきてそしてカルヂナレの君のもとに行き、彼にすべて彼のうへに落ちきたれることゝそして彼が彼の伴侶と共に受けたことを語つた、のみならず彼は彼に曰つた、「人々は私を聖とき人であるやうに思つてゐます、そしてこのとほり惡魔どもは私を一つの庵から逐ひだしました！」そしてカルヂナレの君は彼についてはなはだ悅ばれた。しかしながら彼は彼を聖とき人として知りそして敬つてゐたので、彼は彼がそこに留まることを欲しなくなつたときに彼に逆はうとしなかつた。そしてそのやうにして聖とき人は彼に暇を乞うて、リエティに近いフォンテ・コロンボの隱者小屋に歸つた。

六十八

祝福せられたるフランシスがボルチウンクラなるサンタ・マリアに於けるカピトロ・ジェネラレにあつたときに——それはそこに席をもつて張られた小屋のほかに家がなかつた故に席の集會（カピトロ）と呼ばれたものであつた、そしてそこには五千人の兄弟たちがきてゐた、そのときにいくたりかの慧しき しかして學識ある兄弟たちはそこに居られたオスチアの君のもとに行き、そして彼に言つた、「わが

君よ、私たちはあなたがフラテ・フランチェスコに説得して賢き兄弟たちの忠告にしたがふやうに、そしてときゞは彼らに導かれるやうにすることをおねがひします。」

そして彼らは聖アウグスチヌスの掟、聖ベネディクトゥスの掟、そして聖ベルナールの掟などが團體に於いてはこれ〳〵のしかたで生活すべきことを敎へてゐるのを引用した。そしてカルヂナレがこのことを聖とき人に諫めのごとくに傳へたときに、祝福せられたるフランシスは彼に何ごとも答へずして、たゞ彼の手をとつて、彼を集會に集まつた兄弟たちのところに伴ひきたり、そして聖靈の熱情と力をもつて兄弟たちにこのやうに語つた。

「私の兄弟らよ、私の兄弟らよ、主は私を無知と謙だりの道に召された、そして主がこの道を私に示し給うたのは私のためそして私を信じ私に倣はうとする人々のためである。そしてそれゆゑに私は欲する、おまへたちは私にむかつていかなる掟のことをも口にするな、聖アウグスチヌスも、聖ベネディクトゥスも、また聖ベルナールも、たゞみめぐみをもつて主によつて私に示し給はつたものの ほか、いかなる生活の規則をも言ふなかれ。そして主は人々に曰はれた、主は私がこの世に一つの新しき聖約であることを願ひたまふと、そして主は私をこの學びの道とは異なる他の道よりみちびきたまふと。けれど神は汝らを汝らの智慧と知識によつて恥ぢしめたまふであらう、そして私は

神の警吏たちに賴り恃んで神が彼らをもつて汝らを罰したまふことを、そして汝らが欲すると否とにかゝはらず、汝らが恥しめられて己のが狀態に歸りゆくであらうことを信ずる。」

そのときカルヂナレはいたく驚いてそして何も答へなかつた、そしてすべての兄弟たちは大いに恐れた。

六十九

もしも何人かが德の行ひをなほざりにして、たゞ誇りにふくらむのみなる學問にあこがれるときことにもしも何人かがその始めより召されたる務めにはげまざるときに祝福せられたるフランシスはいたく悲しんだ。

されば彼はつねに曰つた、「知識のねがひに導かるゝものは艱みの日に於いておのが手の空しきを見るであらう。それゆゑに私は欲する、私の兄弟たちは德に强かれ、されば艱みの時がきたるとき彼らは苦しみに於いて主を己れらとゝもにもつであらう。艱みの時はかならずきたるであらう、そのとき書籍は何ごとの用にもたゝずして窓や棚に投げこまれるであらう。」

このことを彼が謂つたのは、聖書を讀むことが彼に好ましくなかつたからではない、けれど彼はすべての人々を知識に對する過大なる要求より引きもどさうとしたからである。その故は、彼は彼らが知識の欲によつて生學問の人となることよりも、むしろ彼らが愛によつて善くあらむことを欲したからである。されば彼は遠からずその時がきたることをあらかじめ料り知り、そしてそのときに於いて彼はすでに誇りにふくらむ知識が破滅の原因となるべきことを豫測してゐた。されば彼は死ねるのちに、一人の彼の伴侶が說敎の技の學びにあまりに熱心なるものに顯はれて、それを彼に責めそして禁じ、そして彼が謙だりと無知の途を踐むことをつとむべしと命じた。

七十

祝福せられたるフランシスはつねに謂つた、「神に愛せられたるこの團體が惡しき兄弟たちの惡しき例しのために辱しめられて、公けに出であるくを恥づるべき時がきたる。けれどその時に於いて團體に加はるためにきたるものはたゞ聖靈のはたらきによつてのみ導かるべく、そして肉と血は彼らに汚れを加ふることなかるべく、そして彼らはまことに主によつて祝福せられるであらう。

「聖とき人々をして篤つき誠をもつて働らかしめた愛が冷えるゆゑに、功德ある行ひは人々になされず、かへつてはなはだ大いなる誘惑は彼らにきたる、そしてそのやうな時に於いて價あるものとして見いだされたるものは彼らに先だつた人々よりも優れるものであらう、けれど禍ひなるかな、彼らは、彼らはたゞ形と姿に於いてのみ敎への人のごとく語り、己れらの智慧をみづから讃へつゝ、そして己れらの學問を恃みながら、けれど惰れることを知られる、それはすなはち、彼らの誓ひによつて純潔にそして單へに守るべく召されてあるところの德の業、十字架と贖罪のみちに、そして福音の純なる遵守に於いてみづから努めないのである。いかにとなれば、これらのものどもは、選ばれたるものゝ試練のために起るべく許されてある誘惑を固く拒むことができないであらう、しかしながら試みられそして善しと見られたるものは生命の冠を受けるであらう、そのとき邪しまなるものゝ惡業は彼らを促がしてやまない。」

七十一

ある伴侶がかつて祝福せられたるフランシスに謂つた、「父よ、私があなたにむかつて曰はうと思

ふことを許して下さい、それはすでに多くの人の考へたことであります。」

そして彼は謂つた、「あなたは知つて居られます、いかにあるときは神の恩寵によつて、全たき團體が完全の純潔に榮えたかを、そしていかにすべての兄弟たちが大いなる熱情と勤勉をもつてあらゆることについて、小さきそして貧しき住居に、そして用うる器具に、わづかなるそして貧しき書籍と衣服に聖とき貧しさを守つたかを。そしてこれらのことに於いてさうであつたやうにすべての他の方面に彼らは一つの意志と熱情となり、そして私たちのつとめであり職であるものに屬するあらゆることを守る勤勉とすべての人のためになす範例に於いてつとめたかを、そしてこのやうにして彼らは神と隣人の愛に於いて心は一つとなつてまことに使徒のごとく福音の人々のごとくであつたかを。

「けれどいまこのごろはこの純潔と親愛とは變はりはじめた、たとひ多くの人々は兄弟たちの數多きゆゑと言ひそして彼らの罪ならずとなし、かゝることの故に掟が彼らに守られないのであるといふけれど、いな、多くの兄弟たちはかゝる盲目となつたのである、すなはち彼らは民らがむかしの道によつてよりはこれによつて却つて德を增しそして敬虔に向ふであらうと思つてゐる、そして彼らには聖とき無知、謙だり、そして貧しさ、これら團體の始めにして基礎であつたものを輕んじな

いがしろにしつゝ、これをもつて却つて尊とく生活してゐるやうに思つてゐる。されば私たちは、このことを思ひめぐらして、彼らがあなたに好ましからぬであらうとかたく信じます、そして私たちは、もしも彼らがあなたに悅ばしくないならば何故にあなたは彼らを容してそして匡さないかをあやしみます。」

祝福せられたるフランシスは答へて彼に曰つた、「主はおまへを赦し給ふであらう、兄弟よ、おまへは私にむかつて反對しそして抗はうとする、そして私を私のつとめならぬことに立ち入らしめやうとする。その故は、私が兄弟たちのうへに首たるの勤めをもつてゐたあひだ、そして彼らがその務めと職に留まつてゐたあひだ、たとひ私の悔い改めのはじめから私はつねに病み衰へてゐたけれど、なほ私の能ふかぎりなる小さき勤勉をもつて私は彼らを範則と說敎をもつて滿足せしめた。

「けれど私は見た、主は兄弟たちの數を增したまひ、そして彼らの惰たりとそして精靈の缺けることのために、彼らがつねに歩んでゐた正しき安らけき道より離れはじめて、そして死にみちびく濶き道に足を入れつゝ、彼らのつとめと職と善き例しにしたがはず、また私の說敎と戒しめとそして私が彼らにつねに示した例しにかゝはらずその危ふき死の旅をすてむと欲しないのである、それゆゑに私は團體の統治を主とそして長職(ミニストロ)たちにゆだねた。されば私が兄弟たちに首たるの職をすてたと

きに、私は私の病弱の故に彼らのことにあづかる能はざることをカピトロ・ジェネラレのまへに告げてみづから謝した、けれどもしも兄弟たちが今といへども私の意志にしたがつて歩まうと欲するならば、彼等の慰安と徳のために、私は私の死ぬるまで彼らが私のほかに他のいかなるミニストロをももつことを欲しない。それは一人の忠信なる善きしもべが彼の上みなる人の意志を知りそして守るときには、首たるものは彼について多くの勤勞を要しないからである。いな、それのみではない、私は兄弟たちの徳と福祉のために彼らと私の得ることの故にいかに歡ぶであらう、さればもしも私が病んで床に臥してあるとも彼らを滿足せしむることを煩ひとしないであらう、いかにとなれば、私の首たるのつとめはたゞ精神のものであるから、すなはち過ちを抑へて、それらをたましひより匡しそして償ふことであるから。

「けれど私が說敎と戒しめと例しをもつて彼らを匡し償ふことができないからとて、私はこの世のなかの法官らのごとく、彼らを罰し鞭つて、一人の執刑人とならうとは欲しない、私はこの世とつぎの世に於ける刑罰のために刑吏であるところの見えざる敵が、神の命令とおのが職の誓ひを破つたものとに報いをなし、そして彼をして彼らの恥ぢとなり辱ぢとなるまでこの世のなかの人によつて匡されるやうにし、かくて彼らが彼らのつとめと職にかへるべきことをたゞ主に信賴するものであ

る。けれど誠に、私が死ぬる日まで、私は少くも範例とそして善き業によつて、主が私に示し給ひそして私が言葉と例しをもつて彼らに敎へそして示した道によつて歩むべく兄弟らをみちびくことをやめようと欲しない、かくて彼らは神のみまへにいひのがるゝ言葉なく、そして私は神のいますみまへに彼らについて條理を述ぶるべきつとめはない。」

このちに書かれてあるのは、フラテ・レオネ、すなはち聖フランシスの伴侶にして懺悔父なる人がアッシジに近きサン・ダミアノにてフラテ・クルラド・ダ・オッフィダに書きあたへ、そして彼みづからが聖とき人の口づから聞いたと言つたものである。聖フランシスはアッシジの近くにてサンタ・マリア・デリ・アンジェリの會堂のうしろにて祈りつゝ、手をたかくキリストにむかつてあげて、主がかならずきたるべき大いなる艱みのときに民らにめぐみあらせたまはむことをもとめた。

そして主は曰はれた、「フランチェスコよ、もしも私がキリスト敎の民たちに惠みふかくあることを欲するならば、私のためにこのことを爲せ、すなはちなんぢの團體はそれが置かれたるはじめのありさまに留まれ、いかにとなれば、全たき世界のうちにもはや何ものも私に殘らないであらうから、そして私は汝とそして汝の團體の愛のために約束する、私は世界がいかなる艱みに苦しむこと

をも許さないであらう。けれど私は汝に曰ふ、彼らは私が彼らを置いたその道から引きかへさなければならない、そして彼らは私をはげしき怒りに起すであらう、そして私は彼らにむかつて起ち、悪魔たちを呼びつどへて、彼らが望んでゐた力を彼らにあたへるであらう、そして彼らは兄弟たちと世のなかのあひだに大いなる亂れをきたらせ、そのためにそこには何人も森のなかに隱れずしては汝の僧服を着ることができなくなる。そして世界が信仰を失ふときそこには汝の團體のほかに他に一つの光も殘らないであらう、それは私が彼らを世界の光として置いたからである。」

そして聖フランシスは言つた、「森のなかに棲むべき私の兄弟たちは何を養ひとして生きるのでありませう?」そしてキリストは曰はれた、「私は彼らをあたかも私がイスラエルの子らを沙漠に於いてマナをもつて養つたごとくに養ふであらう、そしてそれは彼らがその民らのごとくなるであらう故に、そしてそのとき彼らは汝の團體が築かれそして創められた最初の狀態にかへるべきである。」

七十二

もつとも聖とき父は彼の兄弟たちが知識と書籍とを貪ることを欲しなかつた、けれど彼は彼らに

希ひそして說敎した、すなはち、彼らが聖とき謙だりのうへに築かれ、純なる單純をまなび、聖とき祈りと、そして聖とき最初の兄弟たちが守つた私たちの戀人、たふとき貧しさによるべきことを希へと。そして、彼はつねに言つた、これこそ人が已れの救はれとそして他の人の德を建てるにもつとも安らけきたゞ一つの道である、それは私たちが倣ふべく召されたる主キリストが私たちにたゞこれのみを言葉と模範にひとしく敎へそして示されたからである。

されば聖とき父みづからははるかに未來を見、そして聖靈によつて知つて、そしてあまたゝび兄弟たちに謂ふのをつねとした、「兄弟たちは他を敎へるあひだに彼らみづからのつとめ、すなはち聖とき謙だり、純よき無知、祈り、そして敬虔、そして私たちの戀人なる貧しさを失ふのであると。そして彼らは彼らが聖書を知るがゆゑにそれだけ彼らみづからを敬虔にみたされ、愛にもえ、そして神の知識にかがやかされたと思ふやうになるであらう、さればやがて彼らは內には冷やかにむなしきものとなつて殘るであらう、そして彼らは彼らの第一のつとめに歸ることができない、いかにとなれば、彼らは彼らのつとめにしたがつて生くるべき時をあだなる誤まれる勉學に費してゐるからである。そして私は惧れる、彼らが所有せりと思ふところのものも彼らから取り去られるであらう、それは彼らにあたへられたるもの、すなはち彼らのつとめたることを守りそして學ぶことを、

彼らはまつたく怠つてゐるのであるから。」

そして彼は謂つた、「あまたの兄弟たちはすべての彼らの勉學と心がけをたゞ知識を得ることに置き、彼らの聖とき職を去つて、こゝろと身をもつて謙りと聖とき祈りのみちのそとにさまよひ出てゆくものがある。かゝるものは、彼らが民に說教したときに、そしていくたりかがそれによつて德に擧げられまたは悔い改めに向つたと聞くならば、彼らの業とそして他人の利益について、あたかも彼らみづからの業であるかのごとく、誇りそして驕るであらう、しかしながらそのとき彼らはむしろ彼らみづからの詛はれと審判のために說教したのであつて、主がまことにこの果實を收めたまふために用ゐらるゝ器としてのほかに、それよりおほくは、まことは、何ごとも爲さなかつたのである。そして彼らの知識と說教によつて德に擧げそして悔い改めに向はしめたと信ずるその人々をも、主はたゞ聖とき、貧しき、そして謙だれる單純なる兄弟たちの祈りと涙によつて、たとひこれらの聖とき兄弟たちはおほむねこれを知らずにゐるけれど、敎へそして悔い改めしめ給うたのである。それはこのやうにして彼らが知らずにゐるのは神のみむねであつて、彼らが誇らしくならないためである。

「これらこそ私の圓卓の騎士たる兄弟たちである。彼らは荒野やひそかなるところに隱れ住んで、

それによつてそれたけ熱心に祈りと靜思に時をあたへ、彼らみづからと他人の罪を歎き、單純に生活しそして謙だりをもつて語る、彼らの聖とさは、彼らの兄弟たちや人々に知られざるときにも神のみまへに知られてゐる。そして彼らのたましひが天使たちによつて主のみもとにつれゆかれるとき、そのとき主は彼らに彼らのはたらきの果實を示したまふであらう、それはすなはち彼らの範例により、祈りにより、涙によつて救はれたるあまたの人々のたましひである。そして主は彼らに謂はれる、「私の愛する子どもらよ、かゝるそしてかばかりあまたのたましひたちがおまへたちの祈り、涙そして範例によつて救はれたのである、そしておまへたちがわづかのものについて誠であつたゆゑに私はおまへたちをしておほくのものに主たらしめよう。他のものはまことに彼らの智慧と知識の言葉をもつて說敎しそしてはたらいた、そして私は、おまへたちの功績によつて、救ひの果實をもちきたすことができた。それゆゑに彼らの勞苦の酬いとそしておまへたちの功績の果實を受けよれよ、それはすなはち永しへの王國である、それをおまへたちは謙だりと無知と、祈りと涙の激しさの力をもつて占めたのである」そしてこのやうにしてこれらの人々は彼らの穗束を、すなはち謙だりと聖とき無知の功績と果實を運びつゝ、歡こび樂しみつゝ主の歡喜に歩み入るであらう。

「けれど識ることとそして他の人に救はれの道を示すことのほかにこころがけず、みづからのため

には何ごとの備へもなさなかつたものどもはキリストの審判のまへに裸かでむなしく立たなければならない、その運んでくるものはたゞ混亂と恥ぢと悲しみの穂束である。そのとき私たちの召されたつとめたる聖とき謙だりと無知と聖とき祈りと貧しさの眞實は擧げられそして榮えありそして大いなるものとされるであらう、その眞實をばかの知識にむなしく驕れる人々が彼らの生命をもつて詛ひ、そして彼らの智慧のあだなる言葉をもつて譏つて、その眞を虛妄なりといひ、そして盲ひたるものゝごとくに、眞の道を歩んだものを殘酷らしく迫害したのであつた。かゝるとき彼らが賴みとして歩み、眞實なりとして說き、これによつて彼らがあまたの人々を盲目の淵に投け入れたる彼らの臆見の誤りと虛妄とは悲しみと亂れと恥ぢに終るべく、そして彼らみづからは彼らの臆見とともに暗の靈たちとひとしくその闇のなかにつきいれられるであらう。」されば祝福せられたるフランシスはしばしばこの言葉について言はれた、「そのとき石女はあまたを生み、そしておほくの子をもちしものは衰ふるにいたる」すなはち、「その石女とは無知なる、謙だれる、貧しきそして輕しめられたる善き敎への人であつて、それは彼の聖とき祈りと德によつてたえず他の人の德を擧げ、そして惱ましき歎息をもつてよき果實を生みいだすものである。」この言葉を彼はしばしばミニストロや他の兄弟たちにむかつて語るのをつねとし、ことにカピトロ・ジェネラレに於いて語つたのであつ

あつた。

七十三

キリストの忠實なる僕、しかして完全なる模倣者フランシスは聖とき謙だりの力によつてもつともまつたくギリストと身をかへたるごとく感じつゝ、すべての他の德にもましてこの謙だりを彼の兄弟たちに要求した。そして彼らがこの恩寵を愛し、希ひ、獲てそして保たむがためには彼は彼らをたえず言葉と模範をもつてはげまし、そしてことに彼はミニストロたちと說敎師たちに謙だりの行ひをなすことを訓へそしてはげました。

その故は、彼はつねに彼らが彼らの長職たる義務のため、そして彼らが說敎について勤勉なるために、聖とき敬虔なる祈り、または施しを乞ひに往くこと、ときとして彼らの手をもつて働らくこと、そしてその他の勞働を他の兄弟たちとおなじやうになすことを怠つてはならない、それは彼らみづからとそして他の人々のたましひの善き模範たりそして功德であるためであると言つた。

そして彼は言つた、「下に從ふ兄弟たちは、彼らのミニストロたちや說敎師たちが祈りに時をつひ

やし、そしてみづからを枉げて謙遜なる勞働や重んぜられざる勤勞をつくすときに、ます〳〵おほく德に擧げられる。しかしながらこのやうにせずば彼らは混亂や誤りやみづからの死後の詛ひなくして、他の兄弟たちをこれらのことについて訓しへることはできないのである、いかにとなれば、私たちにとつては、キリストの例しを、敎へるよりも、そして行ひかつ敎へるよりも、むしろたゞ行ふことがふさはしいのである。」

七十四

祝福せられたるフランシスはかつてあまたの兄弟たちを呼び集めそして彼らに謂つた、「私は主に乞ひもとめた、主がみいつくしみをもつて私に私がいかなるときに主の僕であり、いかなるとき然らざるかを示したまへと。けれどもつともみめぐみふかき主はひろきみこゝろから私に答へて下すつた、「私は知つてゐる、おまへはおまへが聖ときことを考へるとき、語るとき、そしてなすときにまことに私の僕である。」それゆゑに私はおまへたちを呼びあつめた、兄弟たちよ、そしてこのことをおまへたちに示したのは、もしもおまへたちが私を見てまへに曰はれたそれらのものについてい

づれかにて缺くることあるとき、おまへたちのまへで恥ぢしめられるためである。」

七十五

彼はつねに言つた、みづから何らかの仕事を忙しくそして謙だりをもつて勵まざる怠たれるものどもはすみやかに主の御口から吐きだされるであらうと。されば怠惰なる人は、たちまち嚙みつく齒をもつて攻められずしては、彼のまへに出ることはできなかつた。

そしてこのやうにして彼は、あらゆる完全の模範として、謙だつて彼の手をもつて勞働し、時といふかぎりなく善き賜物のすこしをもいたづらに流るゝを許さなかつた。されば彼は言つた、「私は私の兄弟らがみな働らきそして善き仕事に熟練してあることを欲し、かくて私たちは人々にそれだけ厄介とならず、そしてまた心も舌も安逸のなかにさまよひあるかざることを欲する。」

そして彼はつねに謂つた、「勞働の利益と報酬とは働らく人の意志にゆだねられるべきでなく、たゞ守人(グワルディアン)もしくは家族の隨意に任ぜられるべきである。」

第五章　掟の完全と全團體に對する彼の勤勉について

七十六

聖とき福音の遵守について完全なる篤行の人であり愛人であつた祝福せられたるフランシスは福音の完全なる遵守に外ならぬ我々の掟をともにつとめとすることについてもつとも熱心であつた。そして彼は掟のまことの熱愛者たる、そして熱愛者たらんものを彼の殊なる祝福をもつて恵んだ。

されば彼は彼に倣ふ人々にむかつてつねに曰つた、この我々のつとめは生命の書であり、救はれの希望、榮光の豫感、福音の髓、十字架のみち、完全の境涯、天國の鍵でありしかして永しへの聖約の契りであると。このことがすべての人々に知られそして守られることを彼は希つた、そして彼は兄弟たちが疲勞に耐へるために彼らの談話に於いてしば〳〵これについて語ること、そして彼らの第一の誓ひの記憶のためにまつたくしば〳〵それについて彼らみづからの内なる人と語ることを希望した。彼は彼らにまた敎へて曰つた、生活のみちびきの記念として、思ひでとして、そして掟の

ふさはしき遵守を忘れざらむために、それはつねに彼らの目のまへに携へられるべく、そしてそれよりまた大いなること〻して、彼は兄弟たちが掟とともに死ぬることを希ひそして敎へた。

七十七

さればもつとも聖とき父の敎へと定めを忘れずして、ある一人の在俗の兄弟は、(私たちはうたがひもなくこの人が聖とき殉敎者のむれに擇られてあることを信ずる。)殉敎のねがひのために異敎の人々のあひだにあり、サラセン人たちによつて殉敎の苦しみに牽きゆかれたときに、大いなる熱情をもつて掟を双の手に捧げ、謙遜に膝をまげて彼の伴侶に言つた、「この掟にそむいて私が爲したすべてのことについて、最愛なる兄弟よ、神のみ榮えのまなこのみまへに、そして汝のまへに、私はみづからを罪ありとして懺悔する。」

この短かい懺悔に劍はつゞいた、それによつて、彼の生命を終りつゝ、彼は殉敎の冠を克ちえた。彼はいと若くして團體に入つたのであつた、さればほとんど掟の枷に堪へることができなかつたのである、けれど若き身をもつて彼は鐵環の肌衣を肉のうへに着てゐた。幸ちある少年よ、幸ち

おほく始めそしてなほ幸ちおほく終りを遂げたる彼は。

七十八

祝福せられたるフランシスは謂つた、「私は往つて小さき兄弟たちの團體を聖ときローマの教會に薦めよう、彼女の力つよき鞭によつて、團體のために惡しきを希ふものは恐れしめられそして禁められるべく、そして神の子どもらはいづこにゆくともまつたく自由をもつて彼らの永しへの救はれの增加をよろこぶことができやう。彼女の子どもらをしてこのことによつて彼らの母の妙へなる恩惠を知らしめよ、そしてつねに彼女に對するたましひの敬虔をもつて彼女の尊とき歩みにしたがはしめよ。そは彼女の護りのもとにあれば惡しきことは團體におちかゝることなく、またベリアールの主の葡萄畑を罰せられずして過ぎてゆくことはないであらうから。その母君は私たちの貧しさの光榮をあつめたまふであらう、そして彼女は謙だりのほまれと從順のよろこびとがいかにしても誇りの雲によつて暗くされることを許したまふことがないであらう。彼女は私たちのあひだに愛と平和のきづなをかたく保ちたまひ、彼女のもつともきびしき驗ためをもつて欲せざるものを打ちたま

ひ、そして福音の純潔の聖とき邊守は日々に彼女のまなこに榮えるであらう、また彼女は私たちによき譽れと聖ときことばの薫りがいかなるときにも失はれることをゆるしたまはないであらう。」

七十九

祝福せられたるフランシスは彼が主からこれらの四つのことを、一人の天使より彼に告げ知らされて、受けたのであると謂つた、すなはち、この小さき兄弟たちの團體と業とは審判の日にいたるまでも決して墮つることなからむ。またあらゆる力をつくして團體に迫りあだをなさうとするものは永く生きざらむ。また惡しき人が、團體のなかで惡しく生きようと願ふならばそこに永く留まることはできないであらう。またたれにてもこゝろの底よりこの團體を愛するものは、たとへ彼が罪人であらうとも、なほ彼はいやはてに於いてみめぐみを得るであらう。

八十

彼が團體のなかに完全を保つことについてもつた熱誠はかゝる大いなるものであつた、そして彼には掟をつとめとすることの完全はかゝる大いなるものとして考へられた、即ち、彼はしば〳〵彼が死ぬるのちに何人が全團體を治むるにふさはしく、そして神の助けによつてそのなかに完全を保つことに適へるものであるべきかを思ひ慮るをつねとして、しかしてそれに適するものに遭ふことができなかつた。

されば彼の生涯の終りに近づいて、ある一人の兄弟が彼に言つた、「父よ、あなたは主へとこの世を去られませう、そしてあなたに從つてきたこの一家族は涙の谷に留まるでありませう。團體のなかゝら、もしもあなたが知つておいでゞあれば、何人かを指し示して下さい、あなたが心を安んじて信頼し、そしてミニスト・ロジエネラレの重任がふさはしく負はされるに足るべき人を。」

祝福せられたるフランシスは答へた、そしてすべての言葉は歎息をもつて重かつた、「わが子よ、私はこのやうに大いなるそしてさま〳〵なる軍隊に適せる率ゐる人、このやうに廣くそして散亂せる群れの羊飼ひとしてふさはしき何人をも見いださない。しかしながら私はおまへに一人の姿を描いてみせよう、そのすがたに於いていかにこの家族の統率者そして羊飼ひがあるべきかは輝やき出るであらう。」

「その人はもつとも嚴そかなる生活をなす人でなければならぬ、そして大いなる愼しみ、讃ふべき德望の人であるべく、そしてすこしも私しの情があつてはならない、さもなくば彼がある一方により親しく愛するとき亂れは全體に生ずるであらうから。彼のこゝろには他人のために祈りする友情の誠がなければならない、けれどそれは彼がいくらかの時を己のがたましひのために、そしていくらかを彼の群れのために頒つことゝするのでなければならない。されば朝ははやく彼はすべてのことのさきにミサのもつとも聖とき牲をそなへ、そしてそこでは永き敬虔をもつて、もつとも愛ふかく彼みづからとそして彼の群れとを神の護りに薦めなければならない。けれど祈りのゝちには彼は人々の眞中に位置をとつてすべての人々に問はれ、そしてすべてに答へることができるやうにし、すべての人々のために愛と忍耐と優しさをもつて心を用ゐるやうにしなければならない。

「彼は人々について偏頗であつてはならない、すなはち彼は無知なるしかして愚かなる人々についても、賢こき學識ある人々についてよりも少なき心づかひをしてはならない。彼にもしも知識の賜ものが許されてあるとも、しかしながら彼をして彼のふるまひに敬虔と單純とそして忍耐と謙りのすがたをもたしめよ、そして彼をしてこれらの德を彼みづからにも他の人々に於いても貴とばしめよ、そしてつねにそれらを說敎するときにみづからその行ひを勵み、他の人々を言葉によつてより

もむしろ行ひの例しによつて奬まさしめよ。彼は錢を憎む人であれ、それは私たちのつとめの完全の最大の敵である、そしてすべての人々の倣ふべき首しかして模範である身として、彼はいかなるしかたをもつても多くの貯への函をもつて荒んではならない。

「一つの衣と一つの書籍をもつて彼に足れりとせよ、けれど他の人々のためには一つの墨壺とゝもに一本の蘆ペンと書板とそして印とをもたしめよ。彼をして書籍を好んで寛める人またはおほく讀むことを好む人たらしむるな、さもなくば恐らくは學びに傾むくものは彼のつとめから除かれるであらう。彼をして惱める人を篤つく情ふかく慰めしめよ、彼は艱みにあるものゝいやはてなる避けどころである故に、さればもしも健やかならしむる手だてが彼に缺けてゐるならば、煩ひの絶望は病めるものを侵すであらう。

「暴らきものを優しさに屈せしむるために、彼をしてみづからを謙だりをもつて行はしめよ、しかして彼みづからの義しさを弛めて人々のたましひを益するよすがたらしめよ。團體のみちを踏みあやまるものにむかつてはあだかも失はれたる羊になすがごとくに、憐れみの杯をさしいだし、彼をして彼らに慈しみを拒むことなからしめよ、かゝるばあひにまで迫り陷るゝ誘惑ははなはだ大いな

るものであると知れ、もしも主がその誘惑が彼に迫ることを許したまふならば彼みづからとても恐らくは大なる絶壁に陷るであらう。

「私は欲する、彼がキリストの代表者としてすべての人々から敬虔と尊崇をもつて譽れをうくることを、そして彼が彼の乏しきところとそして私たちの狀態の貧しさにしたがつてすべての人々からすべてのことについてすべての善意をもつて養はるゝことを。しかしながら彼には譽れに微笑まぬことがふさはしく、また迫害に於いてよりもおほく恩惠に於いて悅ぶはふさはしくない、されば彼のふるまひは譽れによつても、より善きへと變るほかに、變つてはならない。けれどもしもときとして彼が快よき旨き食物を要することがあらうとも、彼をしてそれをひそかなるところでなく公けなるところにて取らしめよ、かくて他の人々は彼らの病めるとき衰へたるときにみづからをかやうに養ふことについて恥ぢを要せぬであらう。

「ことに彼にはつとめて隱れたる良心をあきらかにし、そして眞實を祕められたる泉よりさぐりいだすことが職である。彼をしてすべての訴へをはじめには疑ひにとゞめて、ふかき檢察によつて眞のものが現れはじむるまで待たしめよ。彼をして多く語るものに耳を假さしめず、そしてかゝる人々が訴ふるとき疑ひにとゞめて、輕く彼らを信ぜしめされ。彼は恥づべき譽れをもとむるために正

義と公平の規準を害しまたは弛めるごときものであつてはならない。しかしながらかくいへばとて、あまりなる嚴しさのために何人のたましひも壞られてはならない、そして益なきやさしさのために惰りが生れでゝはならない、そして寛き許容から規律の消滅が出でゝはならない。そしてこのやうにして彼はすべての人から恐れるべくそして彼を恐るゝ人によつて愛せられるべきものたれ。

「彼をしてつねに彼の長職たる任を彼にとつての譽れよりはむしろ重き荷であると思ひそして感ぜしめよ。私はまた彼が伴侶として斯る人々をもつことを希ふ、その正直のゆゑに善く言はるゝ人々そのみづからの欲に對してはきびしく、缺乏にあつて強く、過ちせる人々に對してはあはれみふかく情あつく、すべての人々にひとしき愛をいだき、おのが手の勞働に對してたゞ肉體の純なる必要のほかを受けず、そして神の讃へと、團體の福祉と、彼らみづからのたましひの功績と、そしてすべての兄弟らの完たき幸ひのほかに何も希はず、すべての人々に對してふさはしく禮儀あり、そして彼らにきたるところのものを聖とき樂しさをもつて受け、そして福音の遵守の儀規を示し、掟を行ふことのつとめにしたがつて、こゝろのうちに純よくそしてすべてのものにむかつて單純なる人々——見よ、私はいふ、この團體のミニストロ・ジェネラレはかくあるべく、そしてかゝるものを伴侶として彼は有すべきである。」

八十一

彼がつねに團體の完全のためにいだいてゐた熱心の強さにしたがつて、もしも彼にそのなかにある不完全について見または聞くことがあれば、また彼がいくたりかの兄弟たちは團體に對してあしき例しをあたへ、そして兄弟たちは、いま彼らの完全と行ひのもつとも高ききはみから、下りゆくことを悟りはじめたときに、彼は悲しまざるをえなかつた、そしてむねのうちにこゝろのあまりに大いなる悲しみに迫られて、あるとき彼は主にむかつて祈りに於いて謂つた、「主の君よ、私はあなたが私にあたへて下さいましたこの家族をあなたにまかせます。」

そしてたちまち主は彼に言はれた、「私に語れ、無知なる心弱き人の子よ、何人かゞなんぢの團體から歩み出るとき、そして兄弟たちが私のなんぢに示した道によつて歩まないとき、何ゆゑになんぢはそのやうに悲しむか？　また私に語れ、たれがこの兄弟たちの團體を植ゑたか？　人を悔い改めに向はしめたのはだれか、堅忍の德をあたふるものはたれか？　それは私ではないか？　私がなんぢを私の家族の上に選んだのは學識ある雄辯なる人としてゞはない、何となれば私はなんぢも、

また私がなんぢにあたへた掟をまことに守る人々、まことの兄弟たちたるものも、知識と雄辯のみちによつて歩むことを願ひはしない。けれど私は無知にして學ばざるなんぢを選んだ、それは汝がまた汝と他の人々とが、私が私の羊群のうへを護ることを知りえむためである、そして私はなんぢを彼らにあたふる徴(しるし)として任じたのである、すなはち私がなんぢに於いて行ふわざを、彼らが彼らみづからに於いて行ふべきためである。されば私がなんぢに示したるみちに歩むものは私をたもちそしてさらに豐けく私を所有することができやう。けれど他のみちによつて行かむとねがふものは彼らがもてりと思ふところのものさへも奪はれるであらう。されば私はなんぢにいふ、いたく悲しまざれ、たゞなんぢの行ふところを行へ、なんぢのつとむるところをつとめよ、それは私はとこしへの愛に兄弟たちの團體を植ゑたのであるから。さればなんぢは知れ、私が彼らをかくまでも愛するゆゑに、もしもいづれかの兄弟が、その過ちにかへつて、團體のそとに死ぬることあらば、私は團體に他の一人を送るであらう、そしてこの人はさきの兄弟のかはりに完全の冠を得るであらう。もしもその人が生れずにあるならば、私は彼を生れしめよう。そしていかに私が兄弟たちの團體と生命とを愛するかを知らせむために、かりに團體すべてのなかに三人を除いては殘らざるべきことをさだまれりとせよ、しかしながらそのときといへどもそれは私の團體であつて、そして私は永し

へにそれをみすてないであらう。」

そして彼がこれらの言葉を聞いたとき彼のこゝろは妙へに慰さめられた。そして彼が團體の完たくされむためにいだいた熱つき誠のゆゑに彼は兄弟たちによつてなされたるいかなる不完全の行ひや、それがために惡しき例しやまたは亂れが起るべきことを聞くときにいたく悲しくなることをとどめることはできなかつたけれど、なほ彼がこのやうに主の君によつて力づけられたのちは、彼は詩篇のこの言葉を思ひだした、「われはちかひかつかたくせり、神の正義を守らむことを、」そして主みづからが私とそして私に倣はむと欲するものに與へたまはつた掟を奉ぜむことを。

「けれどすべてかゝる兄弟たちは私のごとくにこのことのために盡した、そしてそれゆゑに、私が私の病ひとその他の道理ある理由のために兄弟の長上の任務を去つたのちは、私はこれよりのちに團體のために祈ることゝそして兄弟たちによき範例を示すことのほかにつとめはない。そして私が主よりうけそして眞なりとして知るところは、すなはち、もしも病ひが私に許さぬならば、私が團體にあたへうるもつとも大いなる助力とては、日々團體のために主に祈つて時を送ることである、いかにとなれば、主が團體を治め、支へ、そして護り給ふのであるから。されば、私はこのことについてみづからを主とそして兄弟たちにむかつて責めを帶びるものとした、すなはち、もしも一人

の兄弟たりとも私の悪しき範例によつて亡ぶることあらば、私は彼のために主にむかつて條理を述べるべき責めがある。」

これらの言葉を彼は彼のこゝろをしづかならしめるためにみづからのうちに語るをつねとした、そして彼はまたしば〳〵兄弟たちにむかつてそのことを説教し、集會に於いて説きあかしするのであつた。さればもしもある兄弟がいかなる時にか、彼に、彼が團體の統治に與かるべきであると言ふときには彼はつねに答へて言つた、「兄弟たちは彼らのをもつち、そして彼らはそれをたもつことを誓つたではないか。そして彼らが私の故に言ひのがるゝ言葉をもたざるべきために、主の御旨より私を彼らの長職として命ぜられたのちに、私がおなじくそれを守るべきことを彼らのまへに誓つた。されば、兄弟たちは彼らがなすべきことゝそして彼らが避くべきことゝを知れるゆゑに残れることはたゞ私が私の業をもつて彼らに教へることのほかにはない、そのいはれは、たゞこのことのために私は、私の生けるときにも死ののちにも、彼らにあたへられたる身である故に。」

八十二

團體の有する數ある住處のうちにも、彼は生けるあひだ殊にサンタ・マリア・デリ・アンジェリの聖とき住處に於いて、團體すべての首たる母たるところとして、生活と言葉のあらゆる完全を守ることについて、殊なる熱誠と特別なるねがひをつねにいだいてゐた、彼の思ひそして欲するところはこの處がすべての他の處のために謙だりと貧しさとそしてあらゆる福音の完全の儀規であり範例であること〻、そしてそこに留まる兄弟らは他の兄弟らを超えて掟の遵守の完全にかゝはるすべてのこと〳〵を爲しあるひは避くることにいそしみ勵むべきことであつた。

さればあるときは、すべての悪の根となるべき、ことに教へに入れる人にとつてしかるべき懶惰を避けるために、彼は日ごとに食事ののち兄弟らは彼とゝもに何らかの勞働につとむべきことを定めた、それは彼らか祈りの時に獲たる善きものを、食物のゝちにはことに陷りやすき益なきむなしき談話によつて、全たくあるひはいくらかを失はざらむためであつた。

また彼はつぎのごとくにさだめ、そしてかたく守るべきことを命じた、すなはち、もしも兄弟らのうちのだれかゞ惰たれるか、また兄弟たちのたれかが働らきつゝ冗だなる言葉を口にしたときには、彼は「われらの父（パテル・ノステル）」を一ど唱へて、そしてその祈りの始めと終りに於いて神を讃むべきことゝした。けれど、もしもときとしてその人が、みづからの過ちを知つて、そのなしたことを懺悔し

たときには、彼はその「われらの父」を、まへに言つた「主の讃美（ラウデスドミニ）」とともに、おのがたましひのために唱ふべく、しかしながらもしも彼がいづれか他の兄弟によつてまづ咎められたときには、そのときは彼は「われらの父」をまへに曰つたごとくして彼を責めた兄弟のたましひのために唱へなければならないのであつた。けれど彼が咎められたときに、謝しそして「われらの父」を唱へないときには彼を咎めた兄弟のたましひのために二つの「われらの父」を唱へるべきであつた。けれどもしもその人がみづからのまたは他の人の證しによつて、彼がその冗だなる言葉を言つたことがまことゝなつたときには、彼はその「讃美（ラウデス）」を彼の祈りの始めと終りに、あたりに立つてゐるすべての兄弟たちに聞えそしてわかるほどに、それほど高い聲で唱へなければならない、そしてその兄弟たちはその人がそれを唱へてゐるあひだ、靜かにして聞いてゐるべきである。

けれどもしも何人かゞ一人の兄弟が益なき言葉を言ふのを見そして聞きつゝしかも默つてゐて、そしてその人を咎めないときには、彼はおなじやうにして「われらの父」とそして「讃美」とを彼のたましひのために唱へなければならない。

そしていかなる兄弟でも一つの庵、または家、またはいかなる處にでも歩み入りつゝ、そこに兄弟または兄弟たちを見いだしたならば、たゞちに敬虔をもつて神を祝福しそして讃へなければなら

ない。もつとも聖とき父はつねにこの「讃美（ラウデス）」をくりかへすことをよろこんだ、そして彼はもつとも篤つき意志とねがひをもつて他の兄弟たちに敎へ、そして彼らをはげましてこの讃美をこゝろふかくそして敬虔をもつて唱へしめた。

八十三

たとへ祝福せられたるフランシスは、天なる王國が地上のあまねきところに建てられてあることを知つてゐたけれど、そして彼はいづれのところでも神の恩寵が神に選ばれたるものにあたへられうべきことを信じたけれどけれど彼はポルチウンクラのサンタ・マリアの處がさらに豐けき恩寵にみたされ、そして天つ國の天使たちのこの世ならぬおとづれをもつて惠まれてあることを識つた。

この故に彼はしば〳〵兄弟たちに曰ふのをつねとした、「見よ、あゝわが子どもらよ、おまへたちは決してこの處をすてゝはならない、もしもおまへたちがこなたより投げだされたならばかなたより入れ、それはこの處は聖ときものであつて、キリストとしかして處女なる母君の棲みたまふところであるからである。こゝにこそ私たちが數少なかつたときに、もつとも高き主は私たちを增され

た。こゝで主は彼の貧しきものたちのたましひを彼の叡智の光をもつててらしたまひ、こゝで彼は私たちの意志を彼の愛の火をもつて燃やしたまうた。このところにて篤つきこゝろをもつて祈る人はそのもとむるものを得るであらう。そしてこゝで過つものはさらに重く罰せられるであらう。かゝるゆゑに、あゝ私の子どもらよ、この處をまことに神の住家として、殊さらに主と母君に愛されたるところとして尊敬と譽れをもつてもつともたふときところと思ひ、そしてこゝにてはおまへたちの全たきこゝろより歡こびと懺悔の言葉をもつて父なる神としかして御子なるわれらの主イエス・キリストとに聖靈の合一に於いて懺悔せよ。」

八十四

主がサンタ・マリアの處にて行ひたまへる特權について

聖ときがなかに聖とし、まことにこれぞ處の處なる、
値ひして大いなる譽れに値すとせらる。
その姓は幸あり、その名はさらに幸あり、

しかしてその第三の名の起るは賜ものゝしるしなり。
天使らは在りてこゝに光をひろくてらし、
こゝにはしば〳〵讃歌の聲をひゞかせて夜を守る、
すべて壞れたるをフランシスが再び起したるのち、
父みづからの修覆せる三つのうちにてこれは一つなり。
こゝを父は嚢の服にて身を包みしときに選びぬ。
こゝにて彼は肉體を破りてこゝろに從はしめたり、
こゝにて彼の愛の火をもて彼はわれらの意忘を燃しぬ、
こゝに寺のうちに小さきものゝ團體はうまれぬ。
父の模範に人々のむれがしたがふとき、
神の花嫁の君クララはこゝにてはじめて髪を剪りぬ、
かくてうき世の飾をすてゝキリストのみちを逐ひぬ。
こゝにてぞ兄弟らと姉妹らのさかえある誕生は
聖とき母にいでぬる、これによりて彼女はキリストをまたこの世にもたらしたまひぬ。

こゝには古き世界の廣き道はせまくせらる、
しかして選ばれたる民の族のために德はひろくせらる。
こゝに掟はそだち聖とき貧しきは生れかへれり、
誇りはたふされ、十字架はわれらに呼びかへされぬ、
かくてフランシスが艱みいたく勞れしとき、
こゝに彼は安くせられ、彼の心はこゝに新たにされぬ。
こゝにうたがはれたる眞は證しされぬ、
さらに、こゝに父のねがひしことみな許されき。

第六章　兄弟らを完全にするための彼の勤勉について

八十五

もつとも祝福せられたる父は、彼が兄弟たちを完全にするためにつとめた愛の熱さとそして勤勉の誠によつて聖とき兄弟たちの心のなかへとあるところまで己れをうつし入れ、そしてしば〳〵ところのうちで、いかなるありさまと德をもつて一人の善き小さき兄弟が飾らるべきかを思つた。

そして彼はつねに謂つた、これらの聖とき兄弟たちの生活と境涯にあるものは一人の善き小さき兄弟であるであらう――卽ち、フラテ・ベルナルドの信仰、それを彼は貧しさの愛とともにもつとも完たくもつてゐた。まことにもつとも聖とき純潔の人であつたフラテ・レオネの單純と純潔と、フラテ・テンジェロの恭しき禮儀、この人は團體にきたれる最初の騎士であつてあらゆる禮儀と溫和をもつて飾られてあつた。フラテ・マッセオの惠まれたる綺としかして自然なる思慮とゝもに美しきそして敬虔なる辯舌。フラテ・エジディオがもつとも高き完全に達せるかの靜觀に擧がれる心。聖ときルフ

イノの徳たかきやまざる勞働、この人はつねにひまなく祈り、眠れるときまたは何ごとかなしつゝあるときにも、その心はつねに主とゝもにあつた。フラテ・ジネブロの忍耐、この人はおのがまなこのまへに知れるみづからの意志の完たき抛棄によつてそしてキリストを十字架のみちに於いてまなばむとするもつとも秀でたる意志によつて忍耐の完全の狀態に達したのである。その時に於いてすべての人よりもからだの力强かつた人、讃美のフラテ・ジョヴンニの身と心の健やかさ・フラテ・ルッジェロの愛、この人の全たき生涯と交はりは愛の焰にもえてゐた。そしてフラテ・ルチドの勤勉、この人は大いなる勤勉の人であつて、そして一つの處に一月より永く留まることを欲しなかつた、そして彼にある處に留まることが好ましくなれば、たちまち彼はその處から去り、そして謂つた、「私たちはこの世には住む處をもたない、たゞ天に於いてのみ。」

八十六

彼が愛しそして兄弟たちのこゝろにあらむことを愛しそして欲した德のうちに、聖とき誠だりの礎については、彼はわけて淸直(ホネスタス)の美しさと淸らかさとを愛した。されば兄弟たちに恥ぢる目をもつ

ことを敎へるために、彼は放快なる目をこのたとへによつて示すのをつねとした——

ある敬虔なるそして權力ある王が王妃のもとに二人の使者をつゞけて遣はした、第一の使者は歸つてきて復命を言葉どほりにつたへる、けれど王妃については何ごとも語らない。その故は、彼は彼のまなこを賢こく彼の頭のなかにとゞめてゐた、それゆゑすこしもそれを妃のうへに向けなかつたからである。他の一人は歸つてきて、少しの言葉を曰ふやいなや、王妃の美しさについて一つの長い物語を編みあげた。「まことに、」彼は言つた、「君よ、私は一人の上なく美しい女性を見ました、幸ひなるは彼女を樂しむ人でございます。」そして王は彼に言ふ、「なんぢ、惡しき僕よ、なんぢは恥らぬ目を私の妻のうへに向けたのである、なんぢがその見たるものを巧みに獲やうと欲したことはあきらかに知られる。」彼はそれゆゑにはじめの使者をまた呼び來らしめて、そして彼に曰ふ、「なんぢは妃についていかに思ふか?」彼は言ふ、「かの君は私にはまことによき人と見えます、彼女はよろこんでそして懈らず聽いて居られましたから。」そして彼の答へは賢こきものであつた。そして王は彼に曰ふ、「しかしながら彼女の美しさについてはいかに思ふか?」彼は答へる、「わが君よ、それを見ることはあなたのものでございます、そしてあなたのお言葉を運んでゆくのか私のものでございました。」審判は王によつてあたへられる、「なんぢは、」彼は曰つた、「純よきまなこをもつてゐるゆ

ゑに、私の室に於いてより純よき肉體であれ、そして私の樂しさをもつてよろこべ、けれどこの恥ぢをしらざるものを私の家から出て往かしめよ、しからざれば彼は私の床を汚すであらう。」それゆゑに聖フランシスはつねに曰つた、「だれがキリストの花嫁を見ることを恐れないものがあらうか？」

八十七

あるとき彼の胃の衰へのために嘔吐を欲したときに、彼がおのが身に加へたる大いなるきびしさのために彼は夜もすがら朝にいたるまで血を吐いた。そして彼の伴侶たちが彼の死に垂んたるを見たときに、彼のはげしき衰へと惱みのために、彼らはもつとも深きかなしみと涙の流れをもつて彼に謂つた——

「父よ、あなたがゐなくなつたら私たちは何を爲しませう？　だれにあなたは私たちみなしごをゆだねられますか？　あなたはいつまでも私たちの父であり、母であり、私たちをキリストに於いて孕みそして生んで下さいました。あなたは私たちにとつて導きであり、牧人であつて、師であり、

匡す人であり、言葉よりもおほく模範をもつて私たちを教へそして匡して下さいました。されば羊飼ひをはなれた羊どもはどこへ行きませう？　父なきみなし兒！　導びき人なき粗らき無知なる人人は！　あゝ貧しさの榮え、無知の讃へ、そして私たちの賤しさの譽れ、私たちはあなたをもとめてどこに行きませうか？　たれがこれからさき私たち盲ひたる人々に眞のみちを示しませう、私たちを訓しへた言葉の語る口、助言のいづる舌はどこにありませう？　私たちを十字架の道に向け、そして福音の完成に勵ました熱つき精神はいづこにありませう？　あなたはいづこに居られませうそして私たちはどこであなたに値遇することができませう、あゝ私たちのまなこの光よ、いづこにあなたを覓めませう、私たちのたましひを慰むる人よ。見よ、父よ、あなたは死なれます、見よ、あなたは私たちをこのやうによるべなくして去られます、そして私たちをかやうに悲しくいたましきありさまに殘されます！　見よ、その日、涙といたみの日、棄てられと悲しみの日は近よつてゐます！　私たちがあなたとゝもにあつてから、私たちがそれを考へることができなかつたときにさへもつねに見ることを恐れてゐたいたましき日がきます。かゝることもふしぎではありませぬ、まことに、いかにとなれば、あなたの生命は私たちにとつて恒なる光であり、あなたの言葉は炬火であつて、燃えてそして私たちをたえず十字架と福音の完成の道に、そしてもつともいとしき十字架

のイエスの愛と模倣にとみちびかれました。そしてそれゆゑに、父よ、あなたがキリストに於いて生んで下すつた私たちとそしてあなたの他の兄弟らをたゞちに祝福して下さい、そして私たちにあなたの意志の記念の何ものかを留めて下さい、それをもつてあなたの兄弟らがつねにあなたを記憶にいだき、そして彼らが「これは私たちの父が死ぬるとき彼の兄弟らと子どもらに殘された言葉であるといふことのできるために。」

そのときもつとも情ふかき父は、彼の父のごとき目を彼の子どもたちのうへに向け、彼らに言つた、「私のもとにフラテ・ベネデット・ディ・ピラトを呼べ。」この兄弟は一人の司祭であつて、聖とく愼しみふかく、そして祝福せられたるフランシスのために、彼が病め臥せるときに、ミサを祝つて聽聞せしめた人であつた、それは彼が能ふときはつねに彼の病みるあひだミサを司らしめまたは聽くことを望んだからであつた。そしてこの人が彼のもとにきたときに彼は言つた、「記せ、私は團體にあるところの、そしてきたるべき私の兄弟たちを世界の終りまで祝福する。そして私の衰へと私の病ひの苦痛のために私は語ることができないゆゑに、これらの三つの言葉に於いて私は私の欲することゝ企つることゝを簡やかにすべての、現在と未來の私の兄弟たちにあきらかにする、すなはち私の記念と祝福と遺言のしるしとして、彼らはつねに私が兄弟らを愛したごとくそして愛するど

とくにたがひに愛せよ、彼らはつねに我らの戀人なる貧しさを愛しそして守れ、そしてつねに聖とき母なる教會の長職や僧官らに對して誠なる臣隷であれ。」

兄弟らの集會に於いてもこのやうにして私たちの父はつねに集會の終りに於いて團體にあるところの、そしてきたるべきすべての兄弟らを祝福しそしてその罪を消し解くことに熱心であつた、そしてほかに於いても彼は愛の熱情に於いてしば〳〵このやうなことをなした。けれど彼はつねに兄弟たちに、彼らがみづからを惡しき例しのまへに恐れそして防ぐことを戒しめた、そして彼はすべて惡しき例しによつて人々の心をきずつけて兄弟らの團體と生活とを罵しり濱さしめた人々をみな詛つた、それは善きそして聖とき貧しき人々はかゝるものにとつて恥ぢしめられそして苦しめられるからであつた。

八十八

ある夜祝福せられたるフランシスは彼の病ひの苦痛のために虐げられて、その夜もすがら憩ふことも眠ることもできなかつた。

けれどつぎの朝、彼の苦痛がすこしくうすらいだときに、彼はその處にあるすべての兄弟たちを呼ばしめた。そして彼らが彼のまへにすわつてゐるのを見て彼はあだかも兄弟らの悉くが彼らにおいてそこに在るかのやうに彼らを眺めた。そして彼の右の手を彼らの一人一人の頭に横へて彼は彼らをすべて、そこに在るものと在らざるもの、そして世の終りまで團體にきたるべき人々をことごとく祝福した。そして彼は彼の兄弟たち彼の子どもらを彼の死ぬるまへにことごとく見ることができないためにみづから憐れんでゐるやうに見えた。

そして彼が生涯に於いて主イエスを完全に學んだごとくに、彼の死に於いても主なる師の君に倣ふことをねがつて、彼は彼のまへにパンを運びきたることを命じ、そしてそれを祝福し、そしてそれをあまたの小片に切り分けしめた。それは彼の大いなる衰へのために彼はそれを割くほどの力がなかつたからであつた。そしてそれをとつては彼は兄弟らの各のに一切れを手渡しして、そしてそれを悉く食するやうに乞うた。

されば主が死にたまふまへに彼の愛のしるしとして木曜日に御弟子らとゝもに食することを欲したまひしごとくに、そのやうに主の全たき模倣者なる、祝福せられたるフランシスはおなじ愛のしるしを彼の兄弟たちに示すことを欲したのであつた。そして彼がこのことをキリストの例しに於い

てなさうと欲したことはあきらかに現はれてゐる、何となれば、彼はのちにその日が木曜日であつたかを問うた、そしてそれが木曜であると信じてゐた。

そしてこれらの兄弟たちの一人はそのパンの一片を貯へて置いた、そして祝福せられたるフランシスの死んだのちに、おほくの病める人々はそのパンのうちを味はつてたちまち彼らの病ひを癒された。

八十九

彼の病ひの苦痛のために安きことなく、そしてそれがために兄弟たちが彼の故に落ちつかずそして疲れてゐるのを見たときに、彼は、おのが肉體よりもさらに彼の兄弟らのたましひを愛してゐたゆゑに、彼のためにする彼らのあまりに大いなる心づかひよりして何らかの堪へられぬことのために神のみまへにすこしといへども罪をまねくこともあるべきことを恐れはじめた。されば彼はあるとき敬虔と慈しみをもつて彼の兄弟たちに言つた——

「いとしき兄弟らよ、私の小さき子どもらよ、私の病ひのために勞しても疲れないやうにせよ、そ

れは主の君は彼の賤しき僕のためにするなんぢらの働らきの果實をすべてなんぢらにこの世とそしてきたるべき世に於いて返しあたへたまふであらうから、そしてなんぢらがいま私の病ひの看護のあひだそのために行ひあたはざるところのことをばなんぢらはもしもなんぢらがたゞみづからのためになしたよりもさらに大いなる利益をうるであらう、いかにとなれば私を扶くる人は全たき兄弟らの團體と生命とを扶けるのであるから。いな、さらに、なんぢらはかく謂ふべきである、「私たちはおまへについて出費を拂ふ、そして主の君はおまへのことについて私たちの債務者となり給ふであらう」と。」

しかしながら聖とき父がこのやうに言つたのは彼らのたましひの弱さを助けそして起すためであり、彼が彼らのたましひの完全ならむために抱いてゐたはなはだ大いなる熱心の故にであつた。彼がまた恐れたのは、この苦勞に試みられて彼らが「私たちは祈るひまもなく、またこのやうな苦勞に堪へられない、」と謂ひ、そしてかやうにしてかゝる小さき勞働に疲れて忍耐をうしなひ、そして大いなる賞りを失ふにいたるべきことであつた。

九十

祝福せられたるフランシスが彼の「被造物について主にさゝぐる讃美」を作つたあとで、彼はまた聖キアラと貧しき貴女たちの慰さめと訓しへのためにいくつかの聖とき言葉を作り一つの歌を添へた、それは彼らが彼の病ひについてはなはだしく煩はされてゐることを知つてゐたからであつた。そして彼がみづから彼らを訪れることができなかつたとき彼はこれらの言葉を彼の伴侶らに托して彼らに送つた。

それは彼が彼のねがひをこれらの言葉に於いて彼らにあきらかならしめることを欲したからであつた、すなはち、彼らがいかにして生活しそして謙だりをもつて交はり、愛に於いて一つの心であるべきかについてゞあつた。それは彼は彼らの同心と聖とき交はりとがたゞに兄弟らの團體の譽れたるのみならず、また世界と教會のためにはなはだ大いなる建德であることを見たからであつた。

しかしながら彼らの道に入れるはじめに於いて彼らがはなはだ貧しき乏しき生活をなしたことを知つて彼はつねに彼らのために憐れみと慈しみに動かされてゐた。されば彼はこれらの言葉に於い

て彼らに、主が彼らをあまたのところより一つにあつめて聖とき愛と聖とき貧しさと聖とき從順とに召したまひたるごとくにそのやうに彼らがいつまでもこれらの德のなかに生きそして死ぬることを乞うた、そしてことに彼は彼らに戒しめて、彼らが主が彼らにあたへたまふべき施しのものをもつて、樂しさと感謝の行ひとをもつて、つゝましやかに彼らの肉體を養ふべきこと、ことに、彼らは病める姉妹のためになす勞働に於いてつねに忍耐つよくあるべく、そして病めるものみづからもおなじやうにその病ひにあつて堪へ忍ぶべきことを訓しへた。

第七章　キリストの受難に對する彼の愛と同情の恆なる熱情について

九十一

キリストの苦しみと惱みについて抱ける祝福せられたるフランシスの愛と同情の熱情はかばかり大いなるものであり、すなはちそれがために彼はおのが病ひについてすこしも心づかひしなかつたほどにまでつねにその受難のためにそとにも內にも惱んだ。

されば、永いあひだ、彼の死の日にいたるまで、胃と肝臟と脾の疾にくるしみ、そして彼が海のかなたから歸つてのちは彼の目の激しき痛みをたえずもつてゐたけれど、しかしながら彼はそれがために彼みづからを醫されるために慮かることを欲しなかつた。

それゆゑオスチアの君ウゴリノは、彼がつねにおのが肉體に對して苛酷であつたのを見、そしてことに彼がいまは眼の光を失ひはじめたのを見、しかもなほ彼が癒やされることを欲しないゆゑに大いなる慈しみと憐れみをもつて彼を諫めて曰つた、「兄弟よ、おまへが病を醫さないのはよろしく

ない、いかにとなれば、おまへの生命と健康とは兄弟たちと俗の人々に、そして教會の全體にとつてはなはだ益あるものであるから。もしもおまへがおまへの力よわき兄弟らに對してあはれみをもち、そして彼らに對してつねに敬虔にそして慈しみふかくあつたならば、おまへはかくのごとく大いなる困苦に於いてみづからにむかつてかやうに殘酷にはしなかつたであらう。それゆゑに私はおまへが癒され扶けられるやうにすることをおまへに命ずるのである。」

このやうに言つたのは、もつとも聖とき父がつねに神の御子の謙だりと足跡からかぎりなき甘美の味ひを見いだせるゆゑに苦がきものをとつて甘しとしてゐたからであつた。

九十二

あるとき、彼の回心よりすこしくのちに、彼がポルチウンクラのサンタ・マリアの會堂からあまり遠からぬところでひとり道のうへを歩んでゐたとき、彼は高き聲をもつて泣き悲しみながら行つた。しかるにある心たふとき人が彼に遭ひそして彼が何かの病ひのいたみをもつてゐるのではないかときづかつて、彼に曰つた、「兄弟よ、どうしたのか？」そして彼は答へた、「私は主の君の受難を泣

きかなしみつゝ、このやうにして恥づることなく世界を歩まう。」

そのとき彼らはともに泣きはじめ、そしておほくの涙をながした。その人を私たちは知つてゐたそしてこのことをその人から聞いたのである、その人はまたおほくの慰さめと慈しみを祝福せられたるフランシスとそして私たち彼の伴侶とに示した。

九十三

キリストの愛と慈しみに醉うて、祝福せられたるフランシスはときとしてこれらのごときことを爲した。

たましひの上なく甘美なる旋律は彼のむねのうちに湧きのぼつてしば〳〵フランス語でひゞきいで、そして彼が彼の耳をもつてひそかに聽きとつた神のさゝやきのしらべはフランス語の歌をもつて歡こびにたぎり出でた。そしてあるときは彼は一つの枝を地より拾つて、それを左の腕に沿うて横へて、右の手には他の一本の棒をそのうへに弓のごとくに引いて、あだかもヴオラかまたは他の樂器を奏でるごとくに、それに適へる身振りをしつゝ、それにあはせてフランス語で主イエス・キリ